

著子代千藤内

說小

冷炎

京東

行發堂橋京

小説

冷

炎

内藤千代子著

冷 炎

内藤千代子著

(一)

美 冷

和子は眩しさうに眉根を寄せ乍ら、今までその蔭に伏しかくれるやうにしてゐた洋傘をつばめた。それは純白の地に濃紫の襦子でふちとつた、西洋婦人でもさうにその頃はまだ目新しいハイカラなものであつたので、かへつて人目を引くからであつた。場所は第一高等学校の構内、正門を入つて本館の前の植込の蔭で、傍に誰やら外國人の胸像がある。

今日は此校の記念祭であつた。例年三月一日がその當日なのを四月廿五日に持ち越したので、天気はよし日曜日なり、朝つばらからおびたしい人出、ぞろ／＼ぞろ／＼引つ切りなしに門を這入つて来る。それ／＼連を待ち合すらしい連中や知人を出迎の寮生達は門前に群つて、来る電車も来る電車も満員の人を吐き出す中から求むる姿を鶴の目鷹の目で物色してゐる。正門の處には繩を張つて出口と入口と嚴重に區別してあり、大勢の委員が胡亂な者は一步も内へ入れじと頑張つて控ゆる。それらを興ありげに眺めやり乍ら和子は、もう三十分あまりもこゝに立往生してゐるのであつた。どうしたことか必ずといふ約束の人の影が見えないので。仰げば高い時計臺の針は九時四十分を指してゐた。委員の人にでも訊けばその人の様子を直ぐわかる、とは思ひ乍らもそれのためにはれた。和子は先刻から一同の注意の的にされてゐるのであるから。なまじその人の名など言つてつまらぬ誤解なんぞ受けではその人にも氣の毒だと思つた。が、不安なやら焦れつたいやらに小さく地團駄

踏んでゐた。

やつと分館の方からその人が馳けて來た。きたない霜降の夏の制服の左腕に黄いろい布を巻いて、靴下もない素足にボコ／＼と大きな兵隊靴を引きずつてゐる。蘇生したやうな氣持に和子は無言のまゝ微笑して迎へた。

「どうも大變お待ちせしました。僕下足場の方を少し手傳はされちやつてたもんだから……手が放されなくつて。」

大きな掌で額を引こすり乍ら、

「堪忍して下さい。こんな場所で厭だつたでせう。」

「え、何かー」

「みんなが見やしませんでしたか。」

「ホ、見られて間をわるがるほどの、もうそんなしほらしい人間でもありませんわ。」

「さうでしたか。」

學生は先に立つ。和子はつゝましい歩調で後に従ふ。路の左右には羽目板と言はす塀と云はす樹木と云はず、さまざまの慢書や大々的の意匠をこらした廣告ビラが翻へつてゐるけれども、和子はろく／＼首を上げずに歩いた。女の足のゆるさに學生は振り返つては立ち止り、待ち合せては説明しつゝ、人波を分けて進むと、薄暗い狭い廊下は目白押しの雑踏、宛然七時近くの割引電車以上で、一時入口の扉を閉めて入場を謝絶するほどの騒ぎである。

椅子を倒まにかゝげて四脚に紙を張つた紅みどり紫や五彩さまざまの自治燈の光りは、そのほの暗い廊下を炯然と照らして、天井から吊り繞らした櫻の造花や藤の花房がゆら／＼と揺めく下に、人々の顔が石膏細工のやうに奇しく美しく見える。前後左右から揉みに揉み立てられて、評判な各室の飾物なんぞおち／＼のぞいてはゐられなかつた。それでも和子は背が高いので、一きはぬきんでた洋髪のかみ

ぶりが目じるしになつたが、和子の方では案内者の姿を幾度も見失つて了つてまご／＼した。周囲には同じ様な白線帽の健兒連が多かつたので。ちや、わ！
六寮七十何室、やつと巡り終つてホツと額に滲む汗をぬぐつた和子は、化粧くづれが氣になつた。

『疲れたでせう。』

『え。もうまるで泳ぐやうなんでも、足なんぞ下についてやしませんでしたよ。大へんな人氣ですわねえ、いつになつても向陵萬歳ね。随分お美しい御連中も見えてますやうね。』

『お定連なんですよ、彼女等は。僕毎年見かけますよ。』

直き目の前を行く飛模様の半コートに女優卷の二人連の後を顔でおひ乍ら云ふ。

『どうでした。貴女は？ 年々に面白かなくなるでせう、こんな馬鹿騒ぎは、僕等だつてさうですもの。駄目ですわねえ、一歳でも若い内でなくちや。』

「あら、貴下方がそんなこと有仰る！　ぢや私などどうしませう。ほゝゝゝ」

特有の花やかな調子を立てたが、すぐ氣がついて足元へ目を落して、

「何んだか物足らないやうな氣がいたしますの。残り惜しいやうな……………いつでも此校へ入りますと、もう門外へ出たくなりなますわ。一高の魅力よ、別天地ね。」

話し乍ら裏手の運動場の方へ出る。下の廣場では今擊劍の野試合が始まらうとしてゐる。周囲の勾配には見物の人の山で、紫の羽織や褪紅色の帯や様々に着飾つた若い女性の色彩が、紺飛白やマントや制服の黒つばい中に目立つ。和子は群集の後方に立つたりしやがんだりして待ちくたぶれてゐたが、場の中央につるした大太鼓の音が鑼々と響き渡るばかりでなか／＼開始されない。案内の學生は一寸と云つて和子をこゝへおいたまゝ飛鳥のやうに何處かへ馳け去つて了つたのである。

やがて背後から軽く肩を叩かれて振り向くと、今年の繪端書と寮歌集とを渡しな

から、午食に案内しやうと云つた。和子はふたゝびその後に従つた。

恰ど時分時なので何處の賣店も一杯の人であつた。兩人はバラダイスの洋食部へ這入つた。野天にテントを張つて青々ゝ萌えた芝生の上に椅子や卓が配置してあるが、溢るゝばかりの客人の大部分は立食である。空いてゐる腰掛は一つもない。お見合にでも行くような盛装をした令嬢達が途方にくれて立ちすくんでゐる。和子は學生の盡力でやつと一隅に席を求めることが出来た。學生は何方向いても染馴の顔が多いので、會釋や默禮にいそがしかつたし、あまりの混雜に氣をのまれてまご／＼してゐる他校の學生たちの世話など焼いてやつたり、一高式の蠻聲張り上げてコツクや主人を叱り飛ばしたりした。

注文したものを待つ間の手すばに先刻貰つた繪端書をまさぐつてゐた和子は、ふと手頸にかけた手提袋の中から萬年筆取出して、紀念に何か書いて頂戴とせがんだ。學生は笑ひ乍ら小頸を傾げてゐたが、

星移り

人變る共

岡の上の

時計臺よ、

永へに

幸多かれ

本館の廊下よ

櫻の花よ

そして

小使の翁よ!!

クローバの花と

寒雨とストームに

培はれ育でられし

子より!!

向陵を去らんと

するに臨みて!!

和子は絶すうれしさうにしてゐた。俯いて物書く學生の頭が、向ひ合つた和子の目の下にあつた。その白二本條の帽子ももう狐いろを通り越して青色に變色してゐる。

チリン／＼とけたゝましい鈴の音を先登に假裝行列が通る。みんな食べかけの皿もナイフも投り出して總立ちになつたけれど、和子は微笑んで一寸其方を見やつたばかり、腰を上げやうともしなかつた。そんな行爲ははしたないことに思はれたので。

二時からはまだ別の連中を案内しなければならぬと云つてゐる學生と別れて、ま

だ五足とは進まぬ出合頭、

「ヤア、玉川さんちやありませんか。」

はつと面を上げると、見馴れぬ洋装の若紳士が莞爾々と笑つてゐた。

「何誰でゐらつしやいましたつけ。」

人ちがひにしてはたしかに我名を呼ばれたが、と我が耳を疑ひ乍ら不審さうに和

子は素氣ない。

「私です、川島です。」

「あらつ、まあ！」

流石にはころびかけた口元を袖口におさへて、人込の中からついと横へ抜けて、

「まあ、すつかりお見せしました………思ひがけない方にお目にかゝるものです

わね。」

「お一人ですか？」

「え。今まで一高の學生に案内して、頂いたのですけれど、やつと一巡すみましたからもう歸らうかと思ひまして、貴方は？」

と白山に動く黒い瞳が口ほごに物を言ふ。

「ぢやどうです、少しその邊を歩いて見ませんか。」

「え、どうぞ。」

零れるやうな笑顔を見せて云ふ。兩人は東京と北寮の間を抜けて、また後の廣い草原へ出た。

「踏むのが惜しいようですわね。そつとお歩きあそばせよ、川島さん。」

絆の長襦袢がちら／＼若草の色にもつれる。踏んでゆく足元には黄白の蒲公英やベン／＼草やはこべや萱やげんげやが、丁度鉛筆に繪具をたつぶりふくませて、理山もなく打振つたやうに咲いてゐる。あちこちには一群づゝ寝ころんで語るマントの組もあれば、巾廣のリボンを蝶と春風になぶらせ乍ら一生懸命花を摘んでる可

愛い元祿袖の少女たちもある、

いつの間にか大學との間の道路に沿つた築地のきはにになると、瑞々しい落葉の芽出した櫻の樹蔭に三々伍々ベンチが散在してゐた。

「すこし休みませうか。」

兩人は端と端とに並んでかけた。和子は洋傘の先で地をほじつてゐる。川島は煙草の煙をゆるやかに吹き乍らまじく臆面もなく見つめて、

「大へん痩せましたね、和子さん、だがこの前逢つた時よりずっと美人になりましたよ。ハ、ハ、ハ、ハ。」

「あらー お化粧が上手になつたんでせうよ、年の功でね。」

和子もなかく負けてはゐなかつた。

「川島さん、お子様は？」

「まだです。」

と眞面目に答へる。

「奥様お幾歳？」

「廿三です。」

和子は耕の手柄に大きな丸齒の色の白い眼のパツチリした愛くるしい大柄な婦人を想像してみた。この男の愛情はきつと濃厚なものにちがひないと思つた。學生時代から絶世の美人でなければめとらないやうなことを云つてゐたこの男の、いよいよ引きあてた悶はどんなものだらう、といふ好奇心もあつた。兎に角餘つほどだしくなくつてはならぬ筈だつた。しかし川島は、

「仕様のない田舎者です。東京でなど人の前に出せたものぢやありません。義理で持たせられて了つたんで。僕は實に不幸ですよ。」

珍しくしんみりと聲を落す。

「あら、お氣に召さないほどならば何故お貰ひなすつて!! そんな方のとこへ嫁ら

夫人こそなほ御不幸ですよ。

「そんな事はない。僕は大きいに同情して貰はなければならないのですよ。」

「うそよく。私は奥さんのお味方しますわよ。」

「彼女は別に自分のことを不幸だなんて感じてはゐませんよ。どんな事したつて放
れまいと齒咬みついてるんだからやり切れない。ハ、ハ、ハ」

吸ひさしを遠くへ投げて意味ありげな笑ひ様をする。見え透いたその得意さがいやで和子は知らぬ顔して傍を向いたが、川島はその後の和子の戀愛事件の有無なぞをしつつこく追及した。

「ありませんわ、何にも。私こそちつと伺はして頂きたい。」

「だがよく波瀾なしで満足してゐられますね、殊にあんな田舎に。今が女盛りだのに……………淋しいとは思ひませんか？」

「だって仕方がないんですもの。」

「ちやどうです、相變らず純一君のことを想つてゐるんですか。あの世の、」

「いゝえ。ほゝちつとも。」

「ではどうしたんです。え、僕に對してまでかくさなくつたつて可いちやありませんか、純一君のことは。貴女のやうな人は一度思込んだら熱烈だらうからなア。」
 「どう致しましてー いろ／＼忙しいんですもの、私は健忘症ですからね。それに年齢と共に思想も變りますよ。變らないのが嘘ですわ、人間てさういつまでも同處に停滞してゐられるものぢやありません。」

「それや大いに僕等もさうですよ。變らないのは嘘だ、僕も變つたらうが和子さんも變つた!!」

和子は極めて冷淡に應答し乍ら、俯いて草履の底に若草を踏みにじつてゐた。白粉の濃い頸筋が傷々しいほど細く抜けてゐる。濃茶色の半コート、目立たぬほどな紋お召の一枚小袖に羽織なしの肩がすんなり優しい。有あまる黒髪は襟元におつこ

ちさうに無造作に束ねてある。頭上の梢からはまだ散り残つた葩が折を思ひ出したやうにひら／＼と舞ふてくる。

兩人は三四年前川島がまだ學生時代にしばらく交際してゐた。それは和子の亡くなつた戀人純一の友人であるといふ關係からであつた。その頃から和子は川島をちつとも好いてはゐなかつた。しかし川島は非常に自尊心の強いわく云へば自惚で嫌はれるなんてことは夢にも思つたことのないやうな男だつた。實際また郷里などにあつては風采はよし、辨舌はよし、運動界にも覇者であり、筆も立つし、光る君の再來のやうにももてはやされるのであつたらうけれども、より以上氣位の高い不通な和子にとつては、こんな男は五月蠅のやうなものに思はれた。惘然なものと嘲笑してゐた。で眞面目では相手にしたことがない。するうちに川島は學校を卒業後一年志願兵となつて入營した。

それを機會にいつとなく消息を絶つて了つたのは和子の方からで、川島は今その

事を云ひ出してうらんだけれども、わけもなく圓滿に丸めてしまふ辭令の妙を和子は持つてゐた。

川島も今では〇〇省のお役人さまである。年もとつたしぐつと沈着も出来、薄いろの派手なスプリングコートがしつくり身に合ふて、白い細面にズツリと短くつんだ口髭が涼々しく、眉も濃かつた。鼻も高かつた。和子はその高い鼻柱をポキリとへし折つてやりたいやうに感じた。

木柵越しに表通りを行く人の衣の影がちら／＼するばかり、静な樹蔭に兩人は一時間あまり語つた。川島はするぶん露骨に口がわるかつたけれ共、和子もだまつてはゐなかつた。二人の紅い唇は劣らずよく動いた。

和子さん、貴女は男を男とも思はないやうになつたねえ。」

「え。それや三年過てば三歳になりますからねえ。ほゝゝゝゝ」

「や、實際だ。お互さまに！ 昔ならこんな 櫻散る一高の校庭で、人なき椅架

に語るなんてことが、云はれぬ詩化され美的に感ぜられるんだが、何を云つたつて年の故！ 平氣なへのカッパになつたのは幸ひと云つていゝか不幸と申さうか
ハ、ハ、ハ、ハ、

「時に何時でせうね、わたしはこれから他家へ寄らなければならぬ約束がある。」
「僕も三時から會があるんだ!! ぢやそこまで一緒に出ませう。そろ／＼出かけませうか。」

「まゐりませう。」

ちりかゝる落花を拂つて立ち上つた。

遠くから人目を引くほど兩人は似合の一對だつた。和子はそれがいやで堪らなかつた。恥しさにはなく面が紅らむのである。川島は昂然とステッキを振りながら行く。

和子もまさか最初からさういふつもりでもなかつたのだが、あまり得々としてゆ

く小憎さについ弄かつてやる氣になつて、だまつてついと横へそれて人波の中へかくれた。

丁度そこには卓を控へて二三人の委員さんが大汗になつて、一同のもとめに應じてエハガキや寮歌集にセツセン紀念スタンプをおしてゐた。和子はこゝでいゝかげん暇どつて、もういゝ時分と出口に向ふとバツタリ先刻の學生に出會した。

「あ、今し方青崎君來ましたよ。玉川さんやつて來たかア、なんて云てましたよ。」
「あら、さうでしたの。お妹さんも御一緒？」

「否、一人のやうでした。」

「高生に知己や縁類を持つことを名譽のやうに誇りもし羨み合ふ一部の女學生連には、殊に役附のしるしである左腕の布がどれほど憧憬の的となつたか知れない。みなじろく〱と見ては行く。和子は痛快で、川島に見せつけてやりたくもあつた。でわざと學生を放ちもやらす矢つぎ早に話しかけつゝ、その艶麗に目に立つ姿を群集

の中に据えて微笑んでゐたが、ふと我ながらよしない行爲と心づくると急にげつそり淋しくなつたやうな氣がして、そこへにお禮を言つて別れた。其處らに川島が待ち合せてでもゐはしないかとびく／＼もので四邊を見まはしたけれど、いゝあんばい？ にゐなかつた。和子はいそいで校門前から電車に乗つた。

(二)

和子の職業は所謂女流作家といふもので、原稿紙の基盤目の中に苦澁しい／＼字を落して行くことだつた。大した頭腦もなければ手腕もなく取立てゝこれと云ふほどの物を書いたこともないが、不思議とわりあひに名が賣れてゐて原稿の依頼人も始終あるし、出版でもすれば相當にはけもする。つまり低級だから萬人向がするの

たと云へば云はれる。和子は我ながら自分を決して偉い人間だとは思つてゐない。生意氣で無學な意地張の仕末にならぬ女だから萬々承知してゐる。それなのに餘りわつしよい／＼かつがれると、足元のあぶないやうな氣恥しいやうな腹立たしさゝ迷惑を覺えて心苦しかつたが、いつとはなしに馴れて了へばうら若い身に不似合な先生稱をうけても平氣でゐた。二十二の今日までまだ獨身で、母一人子一人の、寂しい代りに何のこたはりもない氣樂な境遇である。東京の住居は費用が張るといふので田舎へ引込んでゐる位だから交際なども至つて少ない。従つて或一部には驕慢などいふ批難もあるし反感を持つ者も少なくないのだが、一度會つたほどの人はみなその初々しい媚びるやうな態度に魅せられて仕舞ふ。つまり八方美人で善が惡か處女が脱兎か、正體のわからぬものと目されてゐる。

近く春の落花と共に東都を見すて、歸郷した和子の身邊には、相變らず文机にかちりつきながらの平和な日ばかり續いたが、或日曜日不意と川島に訪ねて來られた

ので駭驚した。

しかし和子は笑顔で迎へた。焦茶がかつた地色のちみなネルの單衣に、黒地に紅で蝶々を絞つた羽二重の帯をそれでもきちんとお太鼓に締め、この四五日髪を結ふ間も惜しくて五六日持たせた銀杏返しの鬢の毛の亂れたのが心持顔を權に見せて、勞作に疲れたやうな少しやつれた頬をしてゐる。川島は立派な籠入の果物など差出して、すゝめられた座布團の上へどつかりとズボンの膝を崩して座りつくと、床柱に凭れてわざとらしいほど快活な聲など立てゝ笑つた。

細君を連れて來ただけれども、江の島の旅館に一人残してあると聞いて和子は杖をあげて打つ眞似をした。

「まあ、いけない方ね。なあせ？ なんばお大切な奥さんだつて取つて食はうた申しませんよ、そんなに見せ惜しみなさるものぢやありませんよ。」

「眞平〜。まあどうせ君には早晚お紹介もしなければならんが、君のお母さんに

あんな奴を見せたかないからナ。いゝさ、今度僕の家へ来るさ、そんなに逢つて見たければ……………。田舎出の花嫁さんのモデル位にやなるだらう、絶好の参考品だぜ。ハ、ハ、ハ、ハ、」

「お丸留？ 奥さんは。」

和子は自分の分の丸谷焼の湯呑を取上げて唇につけながら、ふと思ひついたやうに云ふ。

「飛んだことだ、彼女に丸留など結はれたら堪らん。人並にそんな生意氣な真似なぞしたがあればなぐりつけるまでのことさ。」

「なんてね、お口は調法なものですこと。ほ、ハ、ハ、ハ。」

「戯談ぢやない!! 實は僕、貴女にちつと訊いて貰ひたいことがあるんだ。それが

どうも流石にワイフの前では云ひにくいことだもんだから……………」

頭を掻くので、

「まあ、何を？」

和子は少し胸を騒がす。

「いや、もう僕もとう／＼中年の戀といふ奴をやつちやつてね。苦しかつた、苦しかつたよ、實に。君、痩せちやつたよ、一時は。やつと近頃満足に飯が食へるやうになつたんだ。大言を吐くにも似合はない、それ見たことかと笑はれるかも知れんが、笑つちやいけない、可かい、君。」

「大へんな御念の入りやうぢやありませんか。どうなすつたの、いつたい？」

「何と言つて愚なことさ。」

川島は兩手で後腦部を押さへてたえられぬ煩悶の表情などとした。和子は熱心に聞く様子をした。そんな場合の和子は相手を頼もしがらせるほどの屹とした眞面目になつて、伏目に耳をすますのである。

川島はやつと話し出した。しかしまだ三分通りまで進行しない中に和子の緊張し

た態度がガラリくづれて、輕侮の色があり／＼現はれた。それは川島の對象が素人でもない、藝者でもない、所謂「蠣殻町の女」といふものであつたからであつた。

それが何の悲劇、何の苦悶、何の權威、と和子は失望して、それにまだ三十にもならぬ男がさも悲痛さうに、中年の戀、中年の戀、と連發するのも氣になつてならなかつた。川島は衣囊から巻煙草を取り出したが、火もつけず弄んで吸口を噛み乍ら、

「溫和しくつて上品で教育があつて綺麗で若くなくつちや………僕のさういふむづかしい注文にびつたり嵌つてゐたがね、實にいゝ子だつた。聲の美しい！ ああの聲を一遍和さんに聞かせたいな。隣座敷になぞ來合せた客は、誰でももう襖越しに纏綿となつちまふ。先客の歸るのを待ちかねて直ぐ呼んで見るといふ有様なんださうだ。まあ類が少ないナ、あの眼！ あの聲！ だが、もうそれもみんな夢さ、僅の間面白い夢を見たんだ。あゝあ！！」

「氣樂ねエ、貴下は。わりあひに可愛らしい人！！」 それでゐて中年の戀も何もあつ

たのですか、笑はれますよ。そんな言葉はもう十年も過つてから有仰るものですよ。」

「だつて君、これからが問題なんだ。其奴は人の妻君だつたんだ。八歳になる子供まであるんだとさ。二十ばかりだと思つた女が戸籍をしらべたら廿九歳とあるぢやないか。幻滅の悲哀だねえ、僕も驚いちやつた。二つも年上の姉さん株にお兄さん／＼つて甘つたれられて、いゝ氣になつてゐたもんだもの。」

「へえ。まあ……。さうしてそれから、」

「どうもかうもあるものか。亭主が血眼になつて探しあて、連れ戻つちやつたんだもの、女の本意ではなかつたらうがね。そんな事情は後で委細解つたんだが、突然姿をかくされた時には僕も悲觀したよ。生れて始めてあんな深刻な物思ひをした！」

二日も三日も引き籠つて太息を吐き乍ら部屋の上のけそつてゐたのだと云ふ。

御心配があるならば何故私にも分けて下さらない？ とその細君が摺り寄つて泣いて怨んで掻き口説いたと聞いた時、和子は仕方なく苦々しさと傷々しさと可笑しさとががち合つた苦笑をした。何といふあはれな喜劇だらう、人妻といふものは何といふ悲惨な滑稽さだらう、あだし女に身も心も打ち込んで有頂點になつてゐた川島は、終にあらゆる手段を惜しまないでやつと突きつとめた結果は、女の良人は農學士で北海道に農園を経営してゐるものださうであつた。決していやしい身分ではなかつた……………。

「だから君、あゝいふ社會の女のやうぢやない。まるで何様のお嬢様かといふやうな點があつたね。例へば懷中鏡を出して一寸顔を直す時でも、彼方向いて目をつぶつて、頂戴、男の見るものぢやありません、なんてね。……………それに別に食ふに困つてそんな職業をやつてたわけぢやないんだから、我儘はひどかつたが……………」。

川島は今でもその女に十二分の未練と好意を失はない様子だった。白髪で有名な實業界の名士某氏を嫌って振った、客だとして氣に食はぬ人に對してはそれほど見識の強い女であつた、など、誇らしげに語つた。女は川島的美貌を愛でゝゐたらしい。お人好しと云はうか自惚と云はうか、川島も可加減にするが、いゝ。もとゝゝ虚榮の都に憧れて良人も愛兒も振りすてゝ出奔してきて、我からそんな女の仲間に投じたといふほどの女。どこに辯護の餘地があり、あからめもせず男子が口にするこゝとが出来るのであらう。女學校まで卒業してゐるなど聞けば聞くほど淺ましい、と和子はそんな種類の女を自分達と同格扱ひにして訊かされたことが悔しくてならないのであつた。母親の手前も恥しかつた。

娘の許に出入するほどの人間は、華族さんだらうが富豪だらうがみんな先方から敬意を表して、禮儀に篤く叮嚀なものとばかり思ひ馴れて來た母親は、川島の粗暴さに驚いてゐるしかつた。母親が川島を見たのはこれで二度目であつた。最初の

時は今から三年ばかり前で、その時分から生高慢な減らす口はきいてゐたけれども何處かおどくとして書生らしい可愛らしい點もあつたのに、今度の紳士振りと來ては鼻持がならなかつた。

人をそらさぬ和子の母親は、わりに白髪が多いもう五十ばかりの流紙色の中婆さんだが、何處かキリ、として昔を偲ばせる顔立を持つてゐる。若い時には娘より美人であつたらうと思はれる。如才ない調子で上手に家庭の様子なども訊ねた。

まだ都馴れず物馴れぬ細君のそのマダム振りを誇張して云ふ川島の話方の大仰さに、和子は苦しがつて袂で胸を叩いて笑つた。けれどもその談話の中にうかいはれる細君の性格は、川島などよりズツとしつかりした物の解つた氣の大きい、——女性らしい情味には乏しいかも知れぬが、——女性らしかつた。

「感心な方ねエ、超越してらつしやる——」
と眞顔になると、

「僕の感化のしやうがいゝからさ。」

「アラ、虫の好いこと有仰るなよ。夫人の方がよつほどしつかりしてらつしやる。」

「それはしつかりした體格さ。誰だつて「まあお丈夫さうな」とは賞めるが、間違つてもお美しいなど、云つてくれた人は一人もない。力づくなら僕にだつて負けやしないぜ。一言にしてこれをつくせば「還ましき」だね。鐵拳政策などは功を奏さない。仕方がないから或點までは、今夜ア何處そこだつて白狀しとくのさ。」

さうすると歸りはおそいと歸めてさつさと戸締をして寝て了ふ。

「罰があたりますよ、そんなに夫人をいぢめなさると。ちや貴下はやつぱり泣いたり笑つたり引掻いたりするヒス的の女がお好きなのね。」

「相手によるさ。繊細な美人——たとへば先刻話したやうな子、——なのなら何をしたつて一々美化されるんだが、悪女の深情と來ちやあたまらない。家の細君の様なのは、まああれで可さ「還ましき」が泰然と！」

和子は坐つたまゝ身をねぢつて、飲みさしの冷えた茶を縁側越しにパツと庭へあけた。

「あゝあ、人の奥さんになぞなるものぢやありませんね。」

「それで君は處女主義を通すのか。あんな主張は早く取消さないと後悔しますぜ。」

「ほゝ、御深切さまに！ 御忠告だけは有がたく……………」

「しかし結婚するなら今の内ですぜ、ほんとに！ 後日例へば三十代にでもなつて

いくら悶えたつて誰も相手にしてくれる者もないかも知れやしない。」

和子はむつとしたけれども去りげなく、

「さうなつたからつて私別に後悔なんかしませんよ。その時はその時のことすわ

ね、わたしはそんな未來の爲に、現在の主義や氣持を左右したかありませんも

の。」

「變だなア。貴女位の年配の女でそんな筈はないんだが、——早い話が男を欲しい

と思ひませんか？」

「思ひませんよ。つまらないこと有仰るわね、欲しい位なら何も物數奇にこんなまねしてゐるわけがないぢやありませんか。」

「さうだねえ、君は天才だからそれ等の點も天才で他人とちがつてるのかも知れない。時にもう僕は随分お邪魔しちやつた!? 何時です。」

銀時計を引き出してみて、

「どうです、和子さん、差支へがなかつたら僕と一緒に來ませんか、江の島で夕飯でも一緒にやりませう。」

「有がたう、いづれまたー」

「さうですか、御迷惑だといけなから無理にはおすゝめ出來ない。今日もね、日曜だから一高の學生でも來て居られはしまいかと内々心配してたんだがー」
お辭儀した手をすぐ突かへ棒にして立ち上りながら哄笑する。

「一高々々つて何です。私もうあんなお坊ちゃん達を相手にしてる餘裕はないんですよ。飛んだお門ちがひですよ。」

送り出す玄關に川島は手早く靴の紐を結びながら、

「すまないがそこまで路を見てくれ給へ。来る時や迷つて困つちやつたんだ。」

「いくら教へて上げても、物覚えのわるい方ね、ほんとに。」

あり合ふ履物突かけてつと格子戸をくゆる。和子はもう中つ腹である。川島はいつても送つて貰ひたがつてゐる。こんな厚かましい男はない、自分を何と思つてゐるのだらう、といまゝしい。折柄門前を通りかゝつたのは花やかな色彩を交へた男女の四五人連で、和子は「あら」と云つてお辭儀をした。

「誰？ 今のは。」

「富大路さんや八雲さん達！」

と和子は答へる。それは貴族の青年文士として知られてゐる人々の名であつた。

「あの人達がかー ふうむ、和さんはこの頃あんな連中と親しくしてるのか。」
 「親しくないけれど、夫人が可愛らしい方でわたし大好きなんですもの。今日も午前中家にいらしてましたわ。今のあの中では、引詰の分髪にして眼のバッチリした！」

「そんな女は氣がつかなかった。」

さつさと先に立つた和子は兩袖を掻き合すやうにして胸を反らした恰好が、恰度平假名のしの字に似てゐる。ふらりと袂がゆれる。

「ねえ、和子さん！」

「何ですか。」

「僕は君の眞の知己だよ。」

「あら、さうですか。」

願で云ふやうに和子は素氣ない。

「みんないろんな事を言つてゐる、君のことは、ねえ。君の耳にだつて入つてゐるだらう、君が純潔な處女であるといふ事實だつて世間ぢや決してみとめてやしない。それや無理もないや、純一君といふものがあつたんだもの。だが、しかしだねえ。僕は信じる。君は清い、尊い。それはまつたく處女の光輝だ！ この上とも自重したまへよ、ほんとに。普通の女に墮落しちまつちや不可！！」

和子は振り向いたがかうした男の口から處女推賞の言葉を聞くのを奇蹟のやうに思つてまじ／＼と見た。

「君の瞳が證據を言ふ。一度男性の影響をうけた女といふものは、決してそんなわけのものぢやないんだ。それや實に淺ましい！ 君は知るまいけれど、閨中の女なんていふものはね……………」

和子はその大きな眼を一人大きくして、知らず／＼手に觸れる道傍のぐみの葉を邪険に引きむしつた。指先には銀のやうな粉がついた。それを帶のところへなすり

つけ乍ら、

「まあ、随分ね。」

とつかぬことを云つたけれども、和子はまったく自分以外のことは何にも知らなかつた。だからその不可解な同性の秘密を、せめてはこの人の口を通してなりと覗いてみたい好奇心は溢れてゐた。和子は世の中の男の氣持よりも、女性の心理状態の方がよつほどわからなかつた。澤山の小説や戯曲に現はれる女でもみんな自分とはちがつてゐた。

川島も和子の案外なのに呆れて笑つた。

「驚いた人だね、ほんとかい。白ばつくてゐるんぢやないか？ ふうむー だつて君戲談ぢやない。缺けてゐるのか眠つてゐるのか、兎に角君はそんな刺戟の些ともない家庭に人と成つたことも原因してゐるんだね。それにしても生理學の一斑ぐらゐ心得てゐたつてよささうなものだ。僕が教へて上げやうか。」

「えい。」

「誰も今までこんなことを云つてきかした人はないの？　ハ、ハ、ハ、悪友だねえ、僕は。和子さん、氣持をわるくしてはいけない。僕ア嚴肅な醫學上の立場から説明するんだからねい。」

のぞき込むやうに顔を見ると、和子は別に感應のない様子をして冷やかに歩を運んでゐた。

「だがその位なことは純一君だつて云つたらう。え、さうぢやないか、ねえ、君！」
和子はうるささうに髪の毛を掻き上げて、

「でもあの人は貴下のやうな経験家ではありませんでしたからね。」

「経験家!!　いやこれやあ。」薄笑ひしたが、

「純一君がまだ無垢だつたつてことを君は信じてる!?　眞實かなア、あれは。そんな筈はないと思ふんだが!　あの地位であの手腕であの年頃で……………」

「それやどうか知りませんわよ、そんなこと。たゞさうだつて有仰るからわたしもさうだと思つてただけですわ。」

「うむ。それや純一君が突きつめて一途に熱し切つてた點を見れば、或はさうかとも思はれる。初心でなければやあんな真似は出来ないからな。純一君も融通の利かない人さな、女は君ばかりしちやなかつたらうに……その爲の藝妓もあれば……ハ、僕ならあんな戀はしないね。純一君だつて一度女の味を知つたら、もう君に對する熱度はすうつと下つたにちがひない。」

「さうでせうよ。」

和子はわびしい氣がした。生涯身體に觸れる戀はしまいと處女ごろに深く思ひ入つた自分を捕へて、強烈にその心身を要求してやまなかつた純一ではあるけれども、川島の云ふやうな、そんなそんな風に戀された自分だなどと思ひたくない。代りを求めたとて何處にあらうぞ、自分はそんな有ふれた女ではなく、純一の愛着と

熱情とは、そんな淺薄なものぢやなかつた。……………

「此邊も定めし兩人で散歩なんかしたんだらうなア。手でもつなぎ合つて……………」

「厭!! 貴下方ではあるまいし……………」

「あらお月様が! なんてそれやまるで珍しいものを初めて發見したやうに初々しい様子で空を仰いだ——その愛度氣なさつたら……………。芝浦あたりまでは連れ出したこともあるんだが……………一度あの子を連れてこんな處へも來たかつた。」

「眞にねえ、わたしも拜見したかつた。」

堪りかねて投げつけるやうに云つたが、

「貴下は神聖な孤獨! なんていふ趣味を御存じないのだもの。」

まるで調子を變へて艶やかに微笑む。四邊が静寂で綠蔭だけにその白い顔が眼に泌みるほどバツと榮える。

「スキートビーは平和の花。それにも似たる演莢豆よ、永久に——、演の平和を語

りて咲けやー わたしのお友達(ともだち)がね、この花(はな)のことさう云(い)ひましたの。その文句(もんぐ)だけが詩(し)の様(よう)でよく覺(おぼ)えてます。毎年(まいねん)今頃(いまごろ)になると思(おも)ひ出(だ)す。その人(ひと)はもう兩兒(ふたあり)のお母様(かあさん)になりました。」

和子(わこ)は小腰(ここし)をかゝめて摘(つ)んだ一房(いちぶ)を口(くち)にあてゝゐた。白(しろ)い滑(すべ)らかな葉(は)を持(も)つて沙(すな)地に這(は)ひ布(ふ)いた蔓草(つるくさ)である。一寸(すん)ばかりの花莖(くず)に紫(むらさき)色の花(はな)が群(むら)つて咲(さ)いてゐる。

「僕は草花(くさばな)のことなど一向(かう)に知(し)らんよ」

話(はなし)の鋒先(ほこき)を挫(くじ)かれたので川島(かはしま)は不機嫌(ふきげん)だつた。

「ですから覺(おぼ)えときなさいませうね。ほゝ、今度(こんど)は夫人(ふじん)といらつしやいましよ、眞(ま)正(ただ)の。そんな臨時(りんじ)やとひのでなく!! ね、」

眉(まゆ)をひそめ肩(かた)をふるはし小頸(こくび)を傾(かた)めて大(おほ)きく笑(わら)ふ。その自由(じゆう)な表情(へうじよう)は見る人(ひと)の心をほしいまゝにまどはす。川島(かはしま)は眩(くら)しさうに帽子(ぼうし)を冠(かぶ)り直(なお)した。その内(うち)に四辻(つじ)の分(わ)れ路(みち)へ來(き)たのでくると向き直(むきなお)つて、

「ちや川島さん、」

「すまんかったね、どうも。遠いところをわざわざ。」

「どう致しまして。お大事にいらつしやい！ 待つてらつしやる夫人によろしく……。」

わざと叮嚀にお辭義をしたが、見送るまでもなく一散に引返す。夕陽をうけた小松林は二齊に美しく輝いてゐた。和子は袖を抱いてその中の小徑を走つた。執筆物のことを思ひ出して矢も楯もたまらず書齋の机の上が戀しくなつたのである。そこには自分と戀人との間にローマンスを骨子にして綴かけた作品があつた。和子の愛人はもう純一ではなかつた。克巳といふ若い學生であつた。

(三)

七月の初旬和子は久し振りに出京した。

さうして或夜川島の家を訪ねた。その細君を見たいといふ好奇心が一番有力に彼女をそゝのかしたのである。かねて端書で通知しておいて夕方から念入りに風呂へ行つたり、襦袢の半襟をかけかへたりしてゐる中に、約束の時間は過ぎてとつぷり暮れ切つて了つた、けれどかまはず出かけた。

西片町の邸町は門並門がまへや生離の奥深い家ばかりなので、物を訊ねるにも便宜わるく、夏の宵ながらひつそりと人通りも滅多になかつた。探しあぐねて和子は歸らうとした。が、もしや此家かと思ひ切りわるく門のくゞりにおそるゝ手をかける、と、ちりちりとけたゝましい音に鈴が鳴つたので、はつと立ちすくみになつ

たとたん、玄關と並んだ格子窓の障子に大きな男の影法師が寫つて、

「何誰？」

と聞覚えのある聲がはづむだやうに云つた。和子はそれでもためらつてると、からり障子が開いたので、今はもう逃げることも出来なくなつた。

「私よ。」

と艶やかに笑つて見せる。

「おそい、おそい、おそいちやないか、どうしたんだ。あんまりだせ、僕、正門前の停留所で一時間半も待つちやつたんだ。電車を二十幾臺敷へた。客待の車夫があんまり不思議さうに見るんで先刻歸つて來ちやつた。」

鼻聲で甘へるやうに云ふ。

「まあ、御苦勞さまね。お願ひ申しもしないのに!! ですからあてになさらないでと、ちゃんと申上げといたちやありませんか。私もうよつばどすつばかして歸ら

うかと思つたんですけど………」

歩み寄つて右手に握つた麻手布できゆつくと額ぎはをこすつてゐる。

「そんな事されてたまものか、申談ぢやない、早く此方へまはり給へ。」

窓下を通つて庭へ出る。と、廣くはないが大きな櫻樹などが三四本あつて、夜目には真暗く空をおほふて青葉が茂り合つてゐた。白と紫をからみ合した二本鼻緒のバナマ草履が、可愛らしい内輪の歩みぶりの恰好に靴脱石の上に脱ぎすてられた。

川島はいそくと請じて、馴れぬ主人役を少し間のわるさうにもしてゐた。新家庭らしくもないお粗末な室だと思つて、和子はそつと周圍に氣をつけてゐた。翡翠色の玻璃にはまつた小さな置時計や、エヂプト模様の焼繪の筆立やマデヨリカ焼のペン皿などが緑色の被布をかけた机の上ののつてゐて、壁に繪圖書や雑誌の口繪らしいオフセット版が二三葉ピンでとめてあるきり、室内には何もなかつた。水々しい櫻實を玻璃皿に盛つて、細君は持つて出た。

背の高い大柄な女で、澤山の髪の毛を大きく束髪に取上げて涼しげなグキナスの簪などさして、紺の香の高い久留米の飛白に紅の入った白地めりんすの丸帯を高くお太鼓に締めた後姿はまだ娘々してゐた。口許のとがつた無骨な顔には白粉が濃くついてゐた。

女同士は慎しく挨拶し合つたが、川島がおとしめた様な田舎者には似ず、口の利き方などもハキ／＼してゐて、和子は割合この細君が好きになつた。川島は故意か習慣か自分の妻に向つては、和子に對するよりかへつて叮嚀な言葉使をしてゐた。これは夫人の権力が強い、お臺所附でもあるのであらう、と和子は内心可笑しかつた。

その夜の和子は紫紺縮緬を絞つた派手な單衣に、半襟にも帶揚にも袖口にも紅い花模様はなもようが零れてゐて、さうして鮮かに頬胭脂ほくあじをばかして割前髪に青竹のリボンはなを鉢巻はちまきの様にかけたところは、どうしてもやつと十七八の少女せうごとしか受取れなかつた。

細君は直きに襖の彼方へかくれて了つたが、主客はサイダーのコップをあげ乍ら、重に芝居や文學に關する談話をした。川島は得意であつたけれども、その言ふことは和子は一々輕侮の念を起させるばかりであつた。和子は面白さうにやりこめてはその底力のあるわざとらしい高笑ひをすると、しつとりとした夜の空氣と庭の青葉をゆるがせて遠くまで響いた。

ふと川島は自分が會遊の地であつて此夏また行かうとしてゐるといふ、日本アルプスの秀麗な山容や、その山麓にあつて風景絶佳な上高地温泉の話をしだした。山好きの和子はそれにはいたく心を惹かれて、地理や道順などを委しく訊いた。川島もその様子を見てとつたらしく、到底女性の身でなぞ行き得べき場所ではないことを、地圖や繪圖書など取出して來て詳細に説明した。

「ホラ、これによつて見給へ。北アルプス——これが即ち飛騨山脈で、木曾山脈を中央アルプス、赤石山脈を南アルプス——この三大山脈を引くゝるめて日本アルプス

と云ふんだ、わかつた? 僕の行かうて上高所はこゝだ。ね、霞澤、穂高、焼嶽の山麓北アルプスの登山口だ。この邊で海拔五千尺とある。夏なほ寒き仙境さ。實に避暑としては最上の地だ、それを世間の奴輩はみんなまだ知らないんだから痛快だね。高山のお花畑! 柔かい芝生!! 見よ雲は紫よ赤よ黄よ紅のよと入り亂れ立ちかはり、仰ぐ峻峰は萬古消えやらぬ雪をいたゞいて兀突天空に毅然!!! 惚れたの好いたの戀をしたなどゝ下界に騒ぐよりか、そのまゝお花畑に身をうづめて、神こもる靈氣の中に何もものかの囁きをきいて見たまへ。山よ、山よ、山よ山よ、いくら繰り返したつてつきやしない。お聞きなさい、私の眞のラブーは人間ぢやないんですぜ、五肢のものが五肢のものを戀したつて何になるもんか、もつと大きなものを抱かなくつちや……。ほんとに山ほど僕の心を狂はすものはない。君が克巳君とやらにやゝ夢中になつてゐるやうに、僕は山に憧れ狂ふてゐる。手紙を書くと、僕は彼地へ行つたら! 克巳君の方へばかり返事を書かずに

たまには僕ん所へも寄越すんだよ。ハ、ハ、ハ、いや、これや失敬。」

和子はたまらない嫌惡を感じながらも、だまつて扇子を弄ぐつてゐた。出し抜いて驚かしてやらうといふ意地のわるい考へが即座に成つて了つたので。

やがて座をすべつて暇を告げると、途中まで見送ると云つて川島はステッキ引搦んで庭へ下りた。和子も強ひて辭退もしなかつた。細君は門まで送つて出て叮嚀に挨拶した。和子は何だか細君にすまないやうな氣がした。

門外へ出ると川島は上高地温泉への同行を切にすゝめた。身に代へてどんなにも保護を加へると云つた。和子は内心笑止でたまらなかつたけれ共おとなしく頷いて「よく考へて見ますわ。」と俯いて足元の小石を蹴た。

暗い横町から明るい本郷通りへ出ると、バツと白い花の咲いたやうに行き交ふ夏の夜の男女はみな美しかつた。川島の白飛白に黒い髪がハツキリ目立つた。銀と青で大きく百合の花を出した白地唐織を、思ひきり派出に千鳥に結んでだらりと袖の

長い和子の後姿も人目を引いた。兩人はそれを憚かるやうに暗い植込に沿ふた大學の練瓦塙の隙を歩いた。構内の巨人の様な建築物からは灯が賑やかに洩れてゐた。

二人は赤門前から電車に乗った。銀座邊をぶらついて見やうといふ相談がまとまつたのである。川島の隣席に空席があつたけれども流石に和子はそこへ行かなかつた。すつと放れた此方側に腰を下して、小さな紫鹽瀬の紙入を懷中から取出すと、川島が回数券を振つて見せて目配せをしたが、澄して自分の切符を買つて了つた。須田町の乗替場に立つた時、和子の目は我知らずせはしく四邊の群集中を物色した。大久保に住んでゐる克巳は、始終萬世橋驛から昇降するからで、もしやと思ふ空頼みがあつた。

「和さんの戀人つて全體どんな人なんだらうなア？ だけれど君もひどいぢやないか、先日一高で逢つた時も過日君ん家へ行つた時も「何か面白い事件でもありませんか」と云つたら、ちつとも！ なんて澄まし込んだから、正直にそ

れを眞に受てゐた僕ア、突然にあれ（と云ふのは和子の作品のことであつた）をさしつけられて、散々にあてられちやつてもう何だか狐につまゝれたやうな氣がする。あれでゐて「私にはもう戀なんて若々しい氣分にやとてゝも」ぢや恐れ入つて了ふ。戀も戀、あれが戀ならすして何ぞやだ。」

「ほゝ、お氣の毒様。でも最初あてられたのは何方でしたつけ、御自分のことも考へて御覽なさいましな、私はもうあのあくどさが今でも胸に支へてゐますよ。ばかりしい!! 私達のはそんなお安くないのぢやないのですよ。」

「あゝあの子か!! 惜しい、惜しい、實に美しい聲だつたなア、思ひ出して身に泌みるやうだ。大層若く見えるもんだからよく髪をお下髪になんかして來たつけ、一緒に電車に乗つて今のやうに間が放れてると、遠くからその玉の様な聲で、お兄さん／＼て呼び立てるんだ、それにや困つちやつた。僕ア氣が氣ぢやなかつたこれで市中の電車ぢや人目もあるんだもの。」

チラリと咬い歯を見せて挨拶に代へた和子の笑みは險しかつたが、そのまゝ目を放つて一心に窓外の夜景を眺めた。張合がないので川島も買った夕刊をひろげた。

尾張町で電車を捨ると、

「ねえ、君……」

と笑ひ乍ら、先へ行く和子に追ひついて、

「美人を細君に持つ奴は奇體に自分が美くないつてねえ。さう云つて慰めてくれた人があつたが……氣をつけて見たまへ、成る程大概さうだから。随分一對も澤山通るが……」

「あら、さうなの。それで川島さんも……。ほゝゝゝ」

「うむ、僕はそれを聞いてからやつと腹の蟲が納まつてゐる。」

「ほゝゝゝ」

何とつかずに高く笑つた。口紅が青く光つて、あらゆる物を吸ひこますにはおか

ないやうな腫の潤ひが、灯影にきら／＼と一際豊かに黒い。

「だがねえ君、僕は君に一遍妻を見て貰つておきたかつたんだ。どうだ、君は何のかのと攻撃がましいことを云ふけれ共、彼妻を見たらば、成る程川島さんも氣の毒だ、道理だと合點が行つてくれるだらう。」

「まあ、どうして？ あの奥さんがさうお氣に入らないんでせう。」

「君は僕が彼女で適當と思つてる!!」

「よかないけれど……………」

困つたように身體をくねらしてすり抜ける和子の肩先へ、川島は笑顔をすりつけぬばかりにした。それが眩しい白熱の光りに映る、街路樹の柳の根元に培はれた花壇の花よりも活き活きと美しい。和子はわざと高飛車に出て、一刻も傍にちつとしてゐなかつた。ふいと群集の中へまぎれ込んだり、遙後の方でショーウインドウをのぞいてゐたり、雑誌店の店頭に立つたり買物をしたり、川島が見失つてまぎ／＼

するほど一人ではしやいで歩いた。さうして、

「アイスクリームでも食べて行かう。」

と入りかけるのに口もくれず、

「そんなら私の方へおつきあひなさらない？　ねえ。」

と云つて返辭も待たずさつさと自分の行きつけのカフェーへ引張つて行つた。澄ましてトン／＼と二階へ上る、その物馴れた様子を川島はたまげたやうに見てゐた。階上には小綺麗な婦人室があつて、切籠形の電燈が大理石張の圓卓やビンクマダーの色深い壁紙をやはらかく照らしてゐた。和子は川島に注文をきいたが、川島は此家は始めてだと言つてキョト／＼してゐるので、いゝやうに取計つて命じてやつて一寸圓鏡の前に前髪をつくらふ。煽風器の風が縮緬の袂をはためかす。こゝは和子にとつては思出の深い場所であつた。連中はよくこゝへ集つた。克巳と二人きりでも來た。

「此方の方が涼しいでしやう、川島さん。」

塗骨の扇子の先で指してうながす和子は、實は克巳が好んで占た席にこんな男をおきたくないからであつた。何にも知らぬ川島は柔順に隣席の椅子に移つた。その人の好きが氣の毒でもあつた。和子はむづかしい顔つきをして、冷たい珈琲を一口に飲んだ。

實を云へば和子は一昨日の晩、その戀人と別れて來たのであつた。もう逢はうとは思はない。少なくとも今少し自分が立派なものになるまでは、顔を合せやうとは思つてゐない。何に強ひらるゝともなくかうせねばならぬ二人の運命であつた。それらの事でむしやくしやしてゐる、何か眼の玉の飛び出すよみな思ひ切つたことでも云つて退けなければ氣がすまなかつた。それに川島に對しては、克巳といふ名が鋼鐵の櫛でも鋸でもあつた。わざと恍惚と戀しさに堪へぬやうな眸などもした。ダンスせまほしい隣室のオートピアノの音に指先の拍子と耳とをかし乍ら。

川島は熱心に林檎のバイをつゝき乍ら、

「そんな美しくもない人にどうしてさう君が打込んだものだらう。」

「戀は顔でしやしませんからね。」

和子は腹が立つた。この男は何處まで己の美貌を賣物にするつもりなのだらう。自分が克己を美しくないと云つたのは、そんな意味ぢやなかつた。自分は役者のやうな優男には惚れないといふ自慢の氣味もいくらかあつたのである。それが端なくも川島の取ちがへるところとなつた。唯一の缺點のやうにも貶める。和子は口惜しくてたまらない。顔——顔といふものはそれほど大切なものか、では克己さんは自分のどこを愛してくれたのだらう、と和子はそつと自分の頬を兩手で包むやうにおさへて伏目になつた。

「だが君等の戀は随分妙チキリンな戀だね、そんな一年も二年も愛し合つてゐながら握手一度したことがないなんて……もつともそれが所謂君の戀の尊いところ

かも知れない。……相手の人もまたよくそれで我慢が出来たものだ。そも／＼天地開闢以來！珍無類だ、群を超越した靈的の君等のその行爲は誰も眞似人がない。寧ろ一種これでは戀そのものが崇高にも感ぜられる。この點に對しては夥だしい敬意を表しておきます。しかしだねえ、もし君が、……………

克巳さん、わたしはお前の唇に接吻したい。

とサロメもどきに口を切つたらどうする！おそらく氣の小さい子供らしい克巳君、氣絶して了ふだらう。ハ、ハ、ハ、ハ、

「さうですともね、飽ちやあるまいし、附着いたり引着いたりして何かおもしろいんでしやう。そんな月並な戀ならしないわ。克巳さんはね、克巳さんは眞に好い人なんですもの。」

「僕のお多辯ちやなかつたんだらう。」

「えい、口の重い人でした。でも議論めいたことや何かで熱して來ればかなり雄辯

でした。それに西洋の詩だの小説だの、話がそれは上手だつたんですもの、眞熱のある口吻でね。」

「それですつかり君をチャームしちやつたんだねエ。僕は駄目だ、そんな方面にか
けちや全然門外漢なんだから。あの子がね、ミルトンの「失樂園」が何うと
か斯うとか云ひ出したことがあつたが、知らないとも云へず、うむ、うむ、さう
だつた、さうだつたとごまかしてゐたが、いや苦しかつたの何の。」

「莫加ねえー」

つと立つて開け放した窓際へ。バルコニーにはいろ／＼な鉢物の植木が並べてあ
る。なつかしい胸を抱くようにして、和子は白い柱に食ひ入るばかり身を凭せて空
の遠くを見た。

どうしてあんな事をしでかした自分だらう、別さへうれしいものに思ひなして、
生命に彩をつけやうとする、克巳さんも潔く立ち去つて了つた。もうどうすること

も出来ない、あゝ、どうすることも出来ない、その後姿の頸が眞白く抜けてゐて綺麗だった。彼女は背後に川島のあることを忘れた。

(四)

和子が田舎へ歸る日の午後、川島は何度も電話をかけてよこした。云ひ残したところがあるから是非今一度面會したい。ほんの一寸でよい、汽車の時間を救へてくれればステーションへ行つて逢はう、と云つた。和子はあやむやな返辭をして切つて了つたが、川島は根氣よくベルを鳴らした。

克巳からはあれつきり何の便りもない。和子は今までにない苛々しさと果敢なさとうら寂しさを抱いて、炎熱の東都を去らうとするのである。川島になぞ關はつ

てゐる心の餘裕はなかつた。ぢり／＼と疳の立つ顔をして西日眩ゆい新橋驛頭に姿を現はすと、もう待兼て婦人待合室に川島はゐた。

川島の用事といふのは、先夜すゝめた日本アルプス行についての注意などであつた。まるでもう自分と同行するものと定めて了つたらしい口吻である。

「云つておくがね、旅行中は僕は君を妹として見る。爲にならんことは遠慮なく叱るよ。決して克巳君やその何とか君のやうにハイ／＼と君の云分ばかり通させやしない。いゝかい、ラバーとは少しちがふんだからナ、手きびしいせ。まづ第一に白粉なんぞは一切用ゐちや不可!!」

「だから硫黄泉ならば厭だつて云ふのに、少しラヂウムと何とかを含んでるだけの玉のやうな温泉だつて有仰つたぢやあないの。白粉の塗けられないやうな温泉へなら行かない分のことだわ。」

「否、そんな意味ぢやない。そんな意味ぢやないが………そんな優良な氣持で登

れる山路ぢやないんだせ、君。服装萬端すべて男同様にするつもりでなければならん。まづ東京から信州松本まで汽車に乗る、十二時間餘りだ。松本驛から六里の所までは俵又は馬車で行く、そこが島々である。登山の旅装などはそこでとのへた方がいゝと思ふね、又不用品を持参した場合にはそこに預けておいた方が可。こゝまでは兎に角汽車と馬車の力で行くんだから！ それから上高地までまた六里だ、島々溪にそふてズーツとさかのぼつた處に徳本峠といふのがある。そこがなか／＼の險路だ、長い袂なぞをびらしやらさせてはゐられないのですせ、和さん、しつかり頼みますよ。」

「峠なんぞが何でせう、六里の山路が何でせう。川島さん、私を弱者扱ひにすることをやめて下さい。女だからなんて御斟酌は無用になすつて下さい、男だつて女だつて人間でせう、人間業で叶ふことなら、おめ／＼人後にはおちませんよ。」

「ヨシッ、わかつた!! 君の意氣とその雄々しさと勇氣とがあれば、僕が何も躍起

となつてやれ妹として見るの、やれ男性的になつて居れのと、この暑さに汗みどろになつて説法する必要はないんだ。僕アもう君を佐保姫や吉野の山でヘタばつた静御前のしなやかなヒヨロ／＼ものとして見ない。だから氣苦勞が入らぬ。おかげで少し涼しくなつた。」

「その代り私は我儘者です。云ふことをきゝません。自分の氣が向きさへすれば往も復りもおつれなんぞはおいてけぼりにして、さつさと自由行動をとるかも知れません。ですから、私をあてになんぞなさらないでおいで下さい。私はいつも孤獨であられる人間だけれども、貴下は柄にない寂しがりやだから。」

「厭だ、そんな事云つておどかしちゃア。實際君がゐないと話相手がなくなるから困る。行つたからには最後まで行動を共にしなくちゃ……………ナ、そこはお互に妥協しなくちや!!」

ねだるやうなこすりつくやうなその舌たるさに和子は我知らず長椅子の端の方へ

身を退らした。川島はいくらでも顔を差よせる。流石四邊の婦人客に高きを憚かるからである。

「可かね、君。」

「えい。」

和子は漆刷毛で撫でられるやうな、美しい小蛇にまとひつかれるやうな氣持がした。けれども機を見てパツと羽ばたけば、蛇は雉の翼に寸斷されると思つてゐる。それに引きかへ川島は氣がよかつた。甲斐／＼しう兩手に荷物を引提げてブラツトホームまで見送つてくれた。

和子の乗つた汽車が新橋を放れると、丁度こつくり鬼灯の玉の熱し切つたやうな色の大きな太陽が森蔭へ沈まうとしてゐた。和子は吹き入る夕風にはら／＼と前髪を亂させ乍ら、目瞬もせず頬杖突いて突の彼方を眺めてゐた。品川邊の埋立地や草原には白い浴衣の夕涼みの人が澤山出てゐた。熱い涙が胸元まで込み上げて來さう

になつた。和子^{かずこ}は先夜^{せんや}の羽田^{はねだ}の渚^{なみさ}のことを思ひつゝいてゐるのであつた。思ひは列車^{れっせん}の動搖^{どうぎょう}と共に斷々^{きんきん}になつて飛ぶ。

「自分は拙い出来損^{できそん}ひの藝術品^{げいじゆつひん}と血^ちも肉^{にく}もある戀^{こひ}とを交換^{かうかん}した馬鹿^{ばか}な男^{おとこ}だ！」

和子^{かずこ}は以前^{いぜん}に讀^よんだ誰^{たれ}かの作品^{さくひん}の中にこんな文句^{もんく}のあつたことを思ひ浮^{うか}べた。自分の心^{こころ}の底^{そこ}にもそれと似たやうな悔恨^{くわいこん}がつた。

けれどもあのまゝの状態^{じやうたい}を長く續^{つづ}けることは、到底^{たうてい}和子^{かずこ}には堪^たへ切れなかつたのであつた。その上^{うへ}もう接近^{せつこん}のしやうもなかつた。仕方^{しかた}がない、別^{わか}れませう、別^{わか}れませう、別^{わか}れてからどうなるかの自分^{じぶん}が見^みたい、と物狂^{ものぐる}はしう和子^{かずこ}は思ひつめた。

最後の會見^{さいごのくわいけん}!! とは自分^{じぶん}だけの覺悟^{かくこ}下^{くだ}たい然^さり氣^きなく、かりそめの別^{わか}れその間^{あひだ}にどんな事變^{じへん}を起^{おこ}さうやら知^しれませぬ、御歸省^{ごきせい}の前^{まえ}に今^{いま}一度會^あつて欲^ほしいと頼^{たの}んだ。克己^{かくし}の返書^{かへし}にはかうあつた。

二通のお手紙正に拜見いたしました。

一瞬一刻も小止みもなく、そうして嵐が吹きまくつてるのは、まことに結構なこと、思ひます。そりあお苦しいでせう。が、苦みはどうしても避け得られぬものと諦めなくては仕方がない、と私自身も思ひ返し／＼してをります。

しかし「克己」さんの形骸と角力とすることはおよしなさい。過去の尾を曳いてることが一番つまりません。克己さんも藝術と實際との微妙な區別を知つてでせう。克己さんは御作品に表はれた藝術を鑑賞したけれど、それによつて作者の人格を葛藤しやうといふやうな考へは毛頭ありません。作者がもつと強くなつて下さればいい。もつと藝術的意識を擴充して下さればいいと思ひます。私はもう過去の藝術にあらはれたその人ではありません。虚心平坦な一人格です。ラーベ論でもやれといふなら、もうあんな神秘主義をやめて、シヨウの所

謂^いライフフォース説^{せつ}をやるか、プラトンのエロース戀愛論^{れんあいろん}をやるか、そんなことはわかつたもんぢやありません。

明夕^{めいしや}は喜んでお目^めにかゝりませう、しかし何等^{なんら}のブリオツキエベーションを持たないで下さい。白紙^{はくし}のやうに虚心平氣^{きょしんへいき}でつき合^あつて下さい。私は今^{いま}までの、「克己^{かつぎ}さん」ではありません。必要^{ひつよう}があらば新しい目^めで觀察^{くわんさつ}して下さい。新しい克己^{かつぎ}さんにして下さい。

落ち合^あふところは東京驛^{とうきやうえき}の婦人待合室^{ふじんまちあひしつ}にませう。時間^{じかん}は午後七時^{ごごしちじ}、夕飯^{ゆふはん}をすまさないで來^きて下さい。

それから先^{さき}はなるようにませう。

この返事^{へんじ}の意味^{いみ}だつて解釋^{かいしつ}のしやうでどのやうにも解^とれば解^とられる！ 或^{ある}はその

人はもつと熱烈な自分の愛を欲してゐたのではあるまいか、自分は失望させたのだらうか。それから先はなるやうに……。なるやうにつて、何うなるつもりだつたのだらう。まつたく川島の云ふやうに、自分達の戀は不自然だつたのだらうか？ 克己さんは不満足だつたのだらうか。でも仕方がない、仕方がない。自分にはあゝするより外どうにも仕方がなかつたのだもの!! 和子は窓框に袖を敷いて突伏した。最初の戀人に死別したのは十九の夏で、以來去年の春までに云ひ寄つた人も少なくなはなかつた。權勢や富貴をかさに着てむづと手を引き寄せやうとした者も幾人かあつた。が、どれも――和子の一顧にだに値しなかつた。と云ふより和子はそんな間の消息をよく解さなかつたのである。何の會釋も同情もなく突き放して憤つてゐた。男性と云ふものゝすべてが呆介に見えた。

さうした和子も胸に克己といふ餘人の生れてから、大へんいちらしく濃やかな情緒を持つやうになつて、物の見方もちがつて來た。戀は人を盲目にするといふ格言

も和子の場合には反對であつた。それでもやつぱり結婚や肉といふものは絶対に斥けるのであつたけれども、克己もこの女にそんなものを求めてゐるのではなかつたから丁度よかつた。處女主義などといふ主張をきいても克己は笑はなかつた。

「貴女が機衣のほころびを縫ふ女になり終り給ふとき、僕等はお別れせねばなりません。」

眞面目でさう云つてゐた。兩人はつゝましやかに思ひ合つて、手紙と手紙、瞳と瞳で戀をして來た。たま／＼相會ふても小指の端すら觸れ合ふたこともなかつた。いつまでもそれでいゝ筈なのであつた。しかし和子はよくなかつた。第三者に云はせるとそれは無論「満たされざる性慾の悩み」だと云つた。或はさうであつたかも知れぬ。が、生來の爲我の強さと物に屈したことのない氣隨さとは、戀の力でも矯められなかつた。見す／＼自分の魂を人に奪られるのが見てゐられなくなつたのである。別に克己が取上げやうとするのではないけれど、抗すべからざるおそろし

い威力みりよくを持つてゐた。

和子わこはそれが妬ねたましい！ その人ひとに強つよく惹かかされ、ばされるほど、敵愾てきざい心がつた。愛あいは憎にくみと同じものだつた。さうして終つひにあんなカタストローフへ行いつて了しまつた。いま悔くひと戀こひしさがほろ／＼と心こころをせめる。

約束やくそくの當日さあひはお精靈しょうりやうのお迎火むかひを焚たく夕方ゆふぐただつた。風邪かぜを引き込こんで咽喉のどや鼻はながむづ／＼すると云いつて和子わこは泣なきさうに焦きれて、一時間餘じかんよもやり直しやり直してゐた髪かみを、突如いきなりめちや／＼にむしやぐつたりした。夕化粧ゆふびやうの濃濃い面かほには血ちの氣けといふものがすこしもなく頬紅ほべにのいろがわざとらしくて、隈くまの出来できたやうな大きな眼めが一際ひととき大きく据すはつてゐた。こんな顔かほの時ときは本統ほんとうにいやだ、いつそ断ことわらうかしらん、と和子わこは柱鏡ちゆうきやうの前まえで袖そでを抱かかいて立たつてゐた。身體中からだぢゆうに力ちからがなくなつて、手傳てづたつて帯おびを結むすんで貰もらふ時足元ときあしもとがふら／＼した。頭あたまも岑々しん／＼と痛いたんだ。

時間じかんはまだ早はやかつたけれども和子わこは、急心せきしん地ちに入口いりぐちの石段いしだんを登あがつて真直まっすぐに婦人待ふんどまち

合室へ行かうとした。と、聲はかけずに脊後から追ひ縋つた人があつた。和子は振り返つて立ちすくんだ。知らぬ間に落した紫陽花の花簪を拾つて克己が渡してくれゐるのたつた。白飛白の單衣に小倉袴を短かくつけて、相變らず眞面目くさつた苦味走つた顔に鐵ぶちの眼鏡をかけてゐる。つい數日前に學校を卒業ので、帽子にもう徽章はなかつた。

「まあ、ちつとも存じませんでしたわ、來てらつしやる事。」
相手の胸の邊をなつかしさうにみつめ乍ら和子は云つた。

「簪を落しなすつたのをですか。」

「えい。」

嘲られたやうな語調に聞えたので、蚊の鳴くやうな聲で返事して連れられて階下の食堂へ入つて後も、悄然と肩をおとして俯いて了つた。克己の顔が正面に見てゐられなかつた。四邊の視線もうるさかつた。みんな自分達二人を嘲笑してゐるやう

な氣がした。自分とはもあれ、克己はどんなに迷惑してるのだらうと思ふと悲しくなつた。そつとシトロンのコップに唇を濡らすばかりで、何にも食べられるどころではなかつた。胸がいつばいだつた。

其日に限らぬ。逢つても二人は言葉少なであつた。和子はいつもかたくなつてゐた。川島やその他の男の前で振舞ふやうな嬌態や嬌慢さは氣配にも見られなかつた。が、そのおとなしさの中にどこか分別くさい取澄ましたところがあるのである。年は下でもどうしても妹といふ柄ではなかつた。姉さまのやうなと克己はよく云つた。しかし「姉さま」ももう意久地がなかつた。消え入りさうに呼吸を沈めて伏目の腫が重たげに凝つて動かぬ。

毒己は男らしい太眉をあげて、毒々しいほど濃い紺青の夕空を仰いだ。

「もう暗くなりました。そろ／＼出かけませう。」

和子はだまつて椅子を立つたが、これからどうしやうと云ふあてもなかつた。克己

己に訊かれて、持った緋袂紗包の結び目を引張り乍ら鸚鵡返しに「さ」とためらつた。果しがないので克己はこのまゝ別れて了ひさうな氣配があつた。が、そのおどくどと憐みを乞ふやうな眸に見上げられると、少しいら／＼しげに、

「ぢやまた羽田の海岸へでも行きませう、いゝでせう。」

「えい。」

夏の日は明るさが長かつたから、暮れて間のないやうでももう八時近くである。今からあんな場所まで出かけては、と和子は一寸歸途のことが躊躇されたが、何かまふものか、何もかも今夜限りだといふ氣になつた。克己は急いで札賣場へ行つて切符を二枚握つて來た。

二人は風を切つて走る長い車臺の涼しい電車に乗つた。並んでゐたけれども互に物は言はなかつた。和子はたゞ影のやうに克己の後に隨つて立つたり下りたり乗替たりして寂しい夜の穴守の着くと、改札口を出る時克己は終電車の時間をきいた。

それまでにはもう一時間あまりしかなかった。

獻燈に明るいお稻荷様の境内は逃げるやうに足疾に通り過ぎた。月もない晩で海へ出る路は暗かつたが、案内を知つてゐる二人は迷はなかつた。けれど和子は幾度も松の根につまづいた。風はバツタリ絶へて了つて燃えるやうなむし暑さ。止め度なしに湧き出づる汗がたら／＼と、こんな鬱悞しい夜熱はまだ経験したことがなかつた。薄暗に蝶のひらめくやうにハタ／＼と扇子使ひの音がして克己も堪へかねたやうに、

「まるで焦熱地獄だ。こんなことならあのまんま院線電車に乗つて上野邊まで行つて了へばよかつたんですね。海岸は颯とした風が吹き通すやうな氣がしてたもん揺からー」

「何處へ行つても暑いんですわ、けふは。早く海の風にあたりませう。」
和子は左右の袂で額際を拭き／＼喘いで歩いた。素で着たモスが汗にまみれてチ

ク／＼と肌を刺すのが一層神經を苛立たせた。

やつと海岸の堤の上へ出た。が、そよ／＼と潮風は吹いて來ても生ぬるいので、期待したような涼しさに甦へることは不可能だった。克巳はボンヤリた／＼すんで、夜の潮に滲む汽船の灯のながれを眺め入った。和子も一間ほど離れた草の上に着くまで、雨の袂の先を引きずり乍ら矢張り沖の方を眺めて、啞の様にだまつてゐた。二人は窒息しさうな氣持になつた。地下では地蟲が啼いてゐた。

突然!!

「もう歸りませう。」

冷やかな聲が頭上から降つた。

「歸りませう。」

と和子は聲に應じて立ち上ると、克巳は疾足に歩き出した。和子は泣顔をそむけて後に續いたが、二三間おくれても見返つても呉れなかつた。和子は始めて克巳のこ

んな態度を見せられたのであつた。

和子の作に相手の男の面影がしつかり表はれてこず、緊張しきつた場面もなかつたことは自分の罪で、貴女にすまなかつたと云ふ感じが眞先に身を責めるけれどもそれは自分の小さいさかつたのと、種々の事情の爲にあれ以上出来なかつたのだから矢張り過去として堪忍してもらひたい。たゞ自分達の仲は自分たち二人のものであつた。あの神秘的なメールヘンを見るような、かわい、繪巻物を眺めるような——それで満足です、と克巳は慰めてゐてくれた。

けれど其晩の克巳はそれを不平さうにしてゐた。貴女は技巧が足りない、融通が利かない、あんなことでは仕様がなない。せめて某々女史位の手腕がなければ、などゝ語氣を強めて云つた。和子は柔順にそれを肯定してしまはれてゐた。

「だがそれはつまり僕がこんな人間だつたから不可んです。僕が今少し亂暴な男でいもあつたら可んでせう。」

和子は顔をあげて、あはて、追ひ離るやうに云つた。

「否、いけません、いけません。それならかうなるまでに疾にお別れして了つてゐます。」

「うむ、さうですか。………ぢやあ貴女の前にはどんな男があらはれて來ても、貴女の對度に變りがないかぎり、いつもかういふ結末になるんですね。」

「まあさうでせうね。」

二人はそれつきり何も言はなかつた。

和子は克巳が、自分をほげましてくる爲にこんな疑勢を張つてお芝居をしてゐるのだ、としきやとうしても思はれなかつた。だから克巳が冷淡なければ情ないほど、素氣なければ素氣ないほど、その心づくしがうれしくいぢらしく身に沁みた。何と云はれても口答へする氣にはなれなかつたが、發表した自分の作品、それはいかほど小さな物であるにせよ、眞實でさへあれば尊いものだ、何處か光つてゐる筈だ。

克巳さんにこんな事で叱られやうとは思はなかつた。自分にどうせよと云ふのならう？　あまりに幼稚な自分の藝術的才分に愛想をつかしたと云ふ意味か！　そんな物思ひに足元をとられてともすれば後れ勝な和子を、うながす様に克巳は時々立止つて時計を取出して見い／＼、元來た道へいそぐのだつた。

品川の八つ山下からはまた明るい市内電車の人となつた。和子は今まで袂の内へ入れてゐた袱紗包を膝の上で解いて、かねて克巳に借りてゐた書物を返へた。

「浅草橋まで御一緒にいきますよ。」

と克巳はさゝやいた。

「えい。でもこれは其方へお受取なすつといて頂戴！」

和子は少し憤つたやうな聲で云つた。

氣まづい二人の沈黙を乗せて電車は遠慮なく走つた。さうして來るところまで來て了つた。克巳は容赦なく立ち上つて挨拶したが、

「お歸郷のときには汽車の時間をしらせて下さいね。」

と定つて云ふ筈の克己が何とも云はなかつた。和子は片翼もがれたやうな寂しい氣持になりながら、後姿すら見送ることも得せなかつた。あの意地を悲しまずにはゐられない。そのまんまである、そのまんまである!! それが最後の別れとなつたのである。

和子は人目の多い汽車ながら、堪え切れずホロ、とした。思ひ出してはホロ／＼とした。人知れず顔を背けて!! 窓かまちに袖を敷いて強く胸と頬をおしつけながら。

(五)

青空にくづれる雲の峰から夏はむく／＼ひろがるかと思はれた。暑苦しい日盛り玄關のおとなひに、

「あらー」

と意外な面貌をしながらも、和子は書きさしの筆を投げて出て來た。相變らず零れるやうな笑顔になつて!! 背の高い夏服姿の客は川島であつた。

「さあどうぞ。堪りませんのね、外はほんとうにお暑かつたでしやう。」

「静岡まで用事があつて出かけたから一寸お寄りしたわけです。」

「よくね。」

と靴を脱ぐのを待つて立つてた和子は、ふとその手許に目をとめると、艶々しい赤革の面が薄白く埃にまみれてゐるばかりではなく、それは非常に大きなものであつた。ふつと可笑しくなつて袂を顔にあてるとくるりまはつて、またくるりと逆にまはつた。なぜならば瀬川と云ふ男がやつぱり川島と同じ様な服装をして來るけれど

も、その性格といひ容貌といひ、何から何まで川島とはいふコントラストだつた。

その人の婦人の穿くやうに少つはけたつた靴と、今日のこの化けさうな大きさを
見てもう堪らなくなつたのであつた。和子の心は子供のやうにころ／＼と弾むであ
た。一度はづみがつけばいくらでも笑へさうな氣持であつた。

川島は澄ましてつか／＼と座敷へ通つた。

「や。」

「先日はどうも。」

和子の聲は含み聲と云ふので、人を壓しつけるやうな響きがある。床の掛物が
躍り出すほど涼しい風が颯と吹き通すから、棒色の水團扇は取上げたけれども、た
い手まさぐりに弄ぶのみ。廣過ぎる庭園は女世帯に手入も行きといかぬらしい。雜
草交りの一面の芝生と小松で、處々に月見草が赤黄いろ／＼しほれてゐる。和子が
背にした北向きの縁には青麩起しに眞紅なダリヤやカーネーションの鉢植が、友禪

模様のやうに透いて見える。

見た眼か派手で近勝りがする——と云つても、一つ／＼に取立てれば和子は世に云ふ美人の類ではない。たゞ怪しからず妖艶である。咲き誇る牡丹の花の露を含むにも似て、細い頸や手頸の邊などなよくと花輪の重さに堪へられぬ風情がある。川島は見る度に新なる興味と誘惑を感じるらしかつた。あらい亂立綺のおとなし向きな吉野縮に、手摺れてはゐるが銀と濃納戸で鱗つなぎを浮かした白博多の六寸幅をきりと、珍しく何處にも紅氣のないさつぱりした浴衣姿が和子を大へん品よく見せた。

川島は飽かず眺めてその配合や嗜好の妙を讚美した。讚められるほど心を用ゐたわけではない、ほんの有合せを着けてゐたばかりである、と和子は云譯して暑さうに頬を染めた。それが一入艶であつた。器用さうな長い指を、——そのくせあまり器用にではなく扱つて、手づから瓜などむいてすゝめた。

「ねえ、お母さん、川島さんを一寸海岸の方へ御案内申してよござんすか。」
少女のやうにあどけない表情をして、丁度そこへ冷えた麥湯にコッゾと砂糖をそへて持つて出た母親を見返つた。

和子は流石に母親の前を憚かつたが、母親の方では和子が自慢で目をなくして可愛んでゐるばかりではない、誰よりも信用して、娘のすることにまちがひはないと思つてゐる。だから川島にも愛想よく軽い戯談など云つて、座をとりもつた。

和子は川島を外へ誘ひ出した。そこは小川が丁字形になつてゐた。一方は別荘の高い石崖で、一方にはすつと松林がついて、往還よりは少し引込んでゐる。葉越しに洩れる日光の鮮かな斑點を浴び乍らひらり和子が、低く水面にのぞんだ松樹の幹を天然の倚架にして腰を下すと、芳川は夏草を折り敷いた上に膝頭を抱へた。スラツキは傍に投げ出されてあつた。

和子は駄々つ兒らしく足をぶら／＼させ乍ら、つばめた青磁色の洋傘の先で目高

の群をつつゝいてゐた。水は浅くて底に寒天の様な物の影がちらちらとした。五六間上手には舟板を渡した橋があつた。海水浴に行く人の近路なので、ぞろぞろ通る經木帽や旅館の浴衣がけやがみな此方を見て行つた。中には立ち止つて臆面なしにちらちら眺めてゐるのもあつた。和子は平然と見返したが、川島はその美しい面をうつむけ氣味にしてゐた。

川島はジャバン、アルプス行の爲に八月十五日からの休暇を待ちかねて、月初めから休んで了ふとのことであつた。和子はやれ／＼と思つた。

「實はもう一人、僕のお供をしたいと友人を介して申込があるんだが………書家で小品文を書く人と云ふ、日本橋邊の木綿問屋の息子で二十八ださうだ。僕がかね／＼高地へ行くともみんなに話してゐたので、これを聞いて願つたんだらう。しかし今度は君といふ連があるから、僕はまだ何とも返事してはないんだ。どうしやう。」

「願つたり叶つたりぢやありませんか、わたし貴下と二人つきりぢや厭!! 是非さうしたい、それがいい。その方が御同行なさるなら私もいそいでそのつもりで準備しますわ。」

「ぢやい、ね、君さへ承知なら僕も結構だ。僕はまた君がそんな見もしらぬ人厭かと思つて……………」

自分は今日までまだ決答を與へた覺えすらないのに、何だか自分が二人きりを望んでいもゐたやうに妙なことを云ふ、と和子はつんと肩をゆすつて拗たが、いつそされるがまゝになつて見るのも面白いやうに思つた。川島は頻りに念をおして、なほ今後打合せの手紙などはなるべく自宅へよこすより、役所宛にしてくれと云つた。和子は返辭の代りに皮肉な眼をしてとがめるやうに見たので、川島はあはて、「それや僕の家では信書の秘密と云ふことはお互に尊重し合つてゐる。その點においては實に文明式だよ。君、けれどまだね……………」

「夫人にはないしよなの？」

わかり切つたことを不平さうに云ふ

「今知らすとうるさい。彼女も一緒に行きたがつて仕末に終へんからね。とても女なんぞに足踏の出来るところではないと頭からおどかしつけてあるんだから。それでやつと歸めてるんだから。たゞそれだけのことだ、他の理由は何もない。」

「それで先夜夫人の前ではあんなこと有仰つて………」

戸外へ出ての口吻のガラリ變つたことの胸惡さが、また新らしく和子の心の中に
甦つて來た。

「けれども變でせう、後でわかればなほ夫人が氣持をわるくなさるわ。」

「そんな事はない。ツイフは君を信用してるから。他の人ぢやなし、君となら安心してるさ。」

和子は莫加らしいのでだまつて了つた。この男は夫人の嫉妬を恐れるよりも、役

所の同僚達に自分との親しさ加減を吹聴したい下心であらうなど、も邪推された。川島は顔を膝頭に支へたまゝ、

「時に克巳君はどうかね。相變らず文通してゐる」

「旅行中ですわ、何處まで行くかわからないなんて云つてましたつけ。」

その手紙を讀んで泣いたのはつい數日前であつたくせに、他人ごとのやうに和子は答へて、松の葉を引切つちや捨てゐる。川島は急にむく／＼と身を起こした。

「ちや、乾度だね、君。いゝんだね、君。」

「えい。」

「それや一日や二日はまた君の都合でのばしても、何、かまはんけど。」

「大丈夫ですつてばね。」

しかし和子は小憎らしいほどおちついてゐて、一向目前に迫つた旅行についての興味や期待を惹起された様子もなかつたので、川島はひどく不安がつて、

「ね、君、その、……………女性には、例の月々の生理的の病氣なんかあるのだから。もしそんな場合にでもあたるやうなら、無理なんかしない方がいいから。」

「可ぢやないの、もう。一度うけ合つたら馬鹿念をおすものぢやないわ。」
と叱られた。

なほ川島は愉快なこの夏期中の様々な計畫などについてしばらくしゃべつた。和子は聞くでもなく聞かぬでもなく、たゞぼちや／＼と水をなぶつてゐた。

(六)

歸京後の川島の便りには、

「木綿問屋の人は性急でもう出發て了つた。どうせ彼地へ行つておち合ふだらう。」

とあつた。いづれそんな事であらうと思つてゐたので、和子は別に返辭もせず、追及もしなかつた。だまつてゐられて川島は焦慮つて、手紙や電報を續けざまによこした。

いよいよ出發と云ふ當日の早朝、和子は東京の叔母の家にあつた。さうして瀬川からの電話に答へて、もう時間がないからステーションで會はうと云つた。瀬川と云ふのは書肆と關係のある人だつた。和子は自分の出版物の件についての評判も訊きたかつたし、稿料を受取るべき必要もあつた。瀬川は随分あちこちで苦しい融通をしてゐた。

束髪、白地に藍で秋草を染めたモスリンの單衣、麻秩父の九帶、と云ふ身輕な旅行姿の和子が赤帽に何か命つけ乍ら待合室に這入ると、丁度中央の腰架に川島の白芙蓉の様な洋服姿が目に入つた。和子はつか／＼進みよつて聲をかけた。川島はうれしさうに迎へた。四邊の人はみな視線をあつめた。それほど川島の男振りは水際

立つてゐた。

和子は見まはすと同じく白リンテルの服を着た瀬川が一隅にたゝすんでゐた。つ
 へ行つて挨拶をした。川島も一緒に立つて来て背後を放れないので、和子は二人を
 紹介しやうかと思つたけれど、餘計な口を利くのが面倒くさいのでついだまつてゐ
 た。瀬川は金子入りの一封を渡し、なほ車中の徒然を慰める爲にと新刊の書籍や雜
 誌を贈つた。和子は何心なく應答してゐたが、ふと瀬川の言葉が妙に震へたり、顔
 色の變つたのに氣がついてまたかと思ふと厭になつた。疑ひもなく嫉妬である、瀬
 川は熱烈に和子を戀してゐる。それは和子も知つてゐる。また和子に克巳と云ふ戀
 人のあることも、瀬川は誰よりもよく知つてゐる。それでゐてあきらめられないの
 である。この迷惑な男の好意(?)を和子はいつも持てあましてゐる。で、何とか辯
 解しておかうと思つて川島の眼を避ける爲に、瀬川を送つて知らず／＼構外まで出
 た。瀬川はしきりに辭退した。和子も心づいてそのまゝ引返した。

瀬川はあんまり風采の上らぬ方であつたから、川島の方では全然眼中におかなかつた。何處の小使が使者に來たか位で昂然としてゐた。が、後で其名を聞いて始めて驚いて、紹介してくれ、ばよかつたのに、と云つた。和子は微笑しながら指環の光る手をあげて、被ぐやうに襟足を撫てゐた。八月一日午前九時十分、長野行の汽車は飯田町驛を離れた。

バスケットやトランクを間において二人は隣合つてゐたが、和子は川島に遠慮のない調子で話かけられるのが耳をおさへたい程厭だつた。彼女はまだ誰にだつてこんな風に取扱はれたことはないのであつたから。

第一の戀人だつて人前では師弟の威嚴といふものをつくらつてゐてくれた。克己は無論自分をもろい温室咲の花のやうに大切にかはつて荒い風にもあてなかつた。川島は無造作と云ふよりむしろ禮を知らなかつた。言語などもぞんざいなほど快活だと考へてゐるらしい、と和子は限りない屈辱を覺えてなるべく口敷をすくなくし

てゐた。

何時の間にか車中には太輪の銀杏返しに紫つばい夏コートなぞ着て、荒れたやうな顔の生地に白粉の濃い帝劇の女優なども乗つてゐた。この人たちは井の頭の辨財天へ詣るらしく吉祥寺驛で下りた。和子のちつと見送つたのは感慨に胸が痛かつたからで、紺青の濃い空の色が目にも沁みた。森の上にむくく／＼と白金のやうな光澤を帯びた綿雲も動かぬ、和子の睫毛も凝つて動かぬ。線路の左右には夏草が生ひ茂つて、棒色の百合や紅い撫子や瑠璃色の桔梗がチラ／＼と星のやうに咲き交つてゐる。蟬やキリ／＼スガ鳴きしきる。

それまで周囲を賑はしてゐた御嶽山行の若紳士學生連の一行が立川驛で下車てふと、室はガラ空となり、川島はやれ／＼と靴を脱ぎ上衣をとつて空氣枕を頭に長々と寝て了つた。その薄い夏シャツ一枚におははれた胸板の頑丈さ、隆々たる筋肉のたくましさを、打殺しても死にさうもない男の雄々しい肉體に對して、和子は何と

なく憎みと反抗の念がおさへがたかつた。

八王子へ着いた時川島はむくくと首をもたげて

「こゝで晝飯にしやうぢやないか。辨當僕のも買つてくれ給へ。頼みますよ、これからさういふ方面の世話は君に―」

和子はむつどしたやうに

「わたしまだ欲しかありませんの。」

列車は青葉の峽と峽との中を行く。赤茶けた岩壁に直射する日光の烈しさは、焰がめらめらと燃え立ちさうで、だんぐと雲もはげて、空の色がますます濃くなりまざる。殊に有名な山また山のトンネル、一寸顔を出したかと思ふとすぐまたトンネル、和子はウエールをすつぱり頭から冠つてしまつた。何處からともなく冷たく臭い風が吹き入り、耳に突き入るやうな音響。キビ／＼キビ、ドン／＼チン／＼、ゴツトンゴツトンと宛然暴風雨の荒れ狂ふにも似る。いらむし暑さとおそろしさに

婦人客などは大抵半病人のやうに俯伏しつゝけてゐたけれど、被いだ羅を透して暗い洞の中での電燈に透す彼女の顔は、平常よりも幾倍か神秘的の美しさがあつた。

四時近くに甲府へ着くと川島は

「和さんに逢つちやかなはない。ひどい目を見ちやつた、晝飯食ひそこなつて!!

仕方がない、まるで米國式だね、これも淑女に對する義務か。」

なごゝ云ひ乍ら賣者を呼んで和子の分も取次いでくれた。

「有がたう。ほゝ、實は私も少しお腹が空いた。」

「つまらない瘦我慢張るからさ!」

「水晶の產地、葡萄の產地、生絲の產地! つて云ふと甲斐の國の山乙女達は大へん

素林で美しくありさうな氣がする。素肌も瞳も黒髪の艶も……………」

つぶやくやうに云つて籠入りのその一房をつまみ上げて懷紙に種子を吐く。

「和さんの眼も葡萄みたいだ。」

「まあ、川島さん、お鼻の穴からお耳の中まで真黒よ。但しお口のまはりのはお髭

——よ。ほ、ほ、ほんとにこんなきたない厭な汽車に乗つたのは始めてだわ。

先刻から何度手と顔を洗ひに行つたか知れやしない。何しろ四十幾個のトンチルにはあきれますね、これ、こんなの！」

薄黒くよごれた白麻のハンカチで自分の膝の邊をバタ／＼拂つて見せる。袖にも肩にも帶の結び目にも座席にも窓がまちにも、細かい煤煙の粉が黒い雪片のやうにふりかゝつてゐる。

「至るところで和さんは實に衆目環視の的になつてゐるね、僕迄飛んだお相伴さ。」

「いゝわ、見られたつて滅りやしないでせう。」

東京から乗つて來たほどの人は兩人の外にもう一人も残つてゐなかつたので、和子は少し心安く物を言ふやうになつた。川島はそれが自慢であつた。

列車は諏訪の湖畔を走る、折柄の夕榮美しく、和子は半身を乗り出して興じた。

(七)

やう／＼松本驛に着いたのはその夜八時半であつた。驛には川島の舊友が迎ひに来てゐた。直ぐと三臺の俵をつらねて浅間温泉に向つた。

夜道の車上はむしろ風過ざる位で、螺鈿のやうな星月夜、行途に黒くくつきりと空の色よりはやゝ濃い連山の輪廓、その中に無數の燈が輝いてゐる。つい眼の前に見えてゐながらなかく行きつかぬ。俵は廣い／＼野道を走つた。好い氣持に揺られて和子は眠くなつた。

何處も變らぬ温泉場風、路をさしはさんだ兩側の温泉宿より賑やかに狂歌湧く。湯煙はの／＼と立ち迷ひ、夜のことゝて何もかもが美しい。女饅頭などゝはやさ

れ乍ら脱きこまれたのは高い坂の上の旅館であつた。

井上の轉旋で一行の爲には三間つゞきの立派な二階座敷が取つてあつた。温泉は單純泉で氣持がよかつた。和子は湯上りのほてゝと、寶玉の光りを薄絹に包んだやうな顔色をしてくつろいだ、伊達巻姿のまゝ一開張の餉臺を前に正庭に据えられた。夜風はあんまり冷え過ぎるのでみんな陣子を閉てさせて了ふと、灯影を慕ふて集る蛾どものパラ／＼と紙面を打つ音が雨のやうである。庭には絶えずしやら／＼と涼しさうな噴水の音がしてゐた。川魚づくめの料理が廣蓋で、櫛がけの下男の手によつて運ばれた。

程もあらせず、

『今晚は。』

と割合に艶な聲を先に立てゝ藝者が三人入つて來た。

總髮の銀杏返しで丸顔の願のふつくりした、三十あまりの年増は一寸成駒屋に似

てゐた。もう一人は神經質らしい顔立の横のある、洗ひ髪を下げたまゝにして紺縮緬の羽織なぞ着てゐた。一番若いのは十六で、つい二三日前一本になつたばかりだと云ふ。まだ面白味も何にもない妓で、容貌も三人の中では一番まづい。でも紫つばいすきやの裾を引いて、仇な桃色ちりめんの長襦袢などちらちらさせてゐた。

一しきりはさゝめいたが一座はあまりはづまなかつた。一つには和子をはゝかる故もあつた。たゞさへ女客は扱ひにくいところへ、まるで肌合のちがふ打とけにくい固くるしい和子では流石彼女等も取つく島がなかつた。さうして三女の眼が絶ず和子の動作に注意された。殆ど無意識の間に吸ひよせられて了ふと云つた風に、かうした場所のかうした女達にもつといろ／＼の興味を惹かれてゐた和子は、少なからず失望した。しやうことなしに林檎をつまんだり、泡立つシトロンのなかにほつちりビールを滴らしてもらつて、なめるやうにしたりしてゐた。井上は日本酒とビールをちやんぱんに飲んで直き苦さうに、赤くはならないで蒼白くなつた。

川島はわりに平氣だつたが、妓達も酒は強かつた。唄も三味線もあまり上手ではなかつた。むやみと酌を強ひたり、巻烟草に火を點けたりばかりしてゐた。勢のない酒宴は十二時過ぎまで續いた。

(八)

翌朝朝餉の用意の出来た室で三人は顔を合せた。井上は昨夜の醉態を恥ぢてしきりと恐縮してはにかんでゐるのが憎くはなかつた。

食事中の雑談の間にも、和子は井上がわりに常識の發達した小ぢんまりととのつた人間であることを知つた。年は川島と同年配でも、職業柄飽くまで沈着で物優しく老成なところがあつた。風采もそれにふさはしかつた。井上は醫者であつた。

最初川島の親友といふ點でその人格を頭から安く見積つてゐた和子は、自分の早計を氣の毒にも恥かしくも思つた。それにつけても友をえらぶと云ふことは大事なことで、自分も川島など、かうしてゐる爲めに人にどんなに誤解されるかも知れないと焦々した。そんな時ほど川島の美しい面貌の間の抜けて見えることはなかつた。お電話がかゝつてまゐりましたと呼ばれて井上が一寸中座した後、和子は縁側へ出ると川島もツイと關際へ立つたが、兩手をのばして長押を差上げるやうに突張り乍ら、

「昨夜の若い妓がね、今度は貴郎お一人でいらつしやいな、なんて云つてゐたよ。」
「さうを。」

和子は相手を物足らなからせるほどの素直さで答へた。さうしてひとめ得られないほどの、軽い微笑が唇邊をくすぐつた。あんな無口な案山子みたやうな女でも、男に向つてはそんなお世辭を吐くのかと思ふと惘然でもあり笑止でもあつた。

ぐるりと淺間平を取かこむ近くの山々の肩から、白雪を輝かせた乗鞍や鎗ヶ嶽、所謂日本アルプス連峰の一部分が思はせぶりにのぞいてゐた。川島はそれらを指し示し乍らうれしくつて堪らないと夢中になつて、腕を輪のやうに打振つたり足踏などして燥いだ。

和子は欄干に腰かけて慎しく笑つてゐた。

「貴下は仕様のないロマンチストねエ、羨しいわ、私も今一度そんな時代に返つてみたい。」

その内に命じておいた俣も來た。地方とは云ひ乍ら宿ではまるで此一行を華族様の御微行か何かの様に掬躬如として取扱つてゐるので、和子は氣恥かしく氣の毒らしくてならなかつたが、實際だまらせてさへおけば川島的美貌と氣品は四邊を拂ふ程に見えた。

此宿を立つて途中井上に別れたのは十一時過ぎであつた。午に近き日は赫々と照

るけれど、向ひ風だから車上は涼しい。かわいて白き一條の坦途蛇々として島々村まで五里つゝ。時々むつと面を打つ草いきれ。それに信州に養蠶の本場だけあつて部落々々の軒並、盛んに夏蠶をやつてゐるので、桑の葉の青くさいのと蠶糞のむれた様な臭氣が風のまに／＼漂ふて來た。

川の瀬に馬洗ふ人、障子のかげにはた織る乙女も手を休めて、物珍しさうに兩人を見迎へ見送る。「新婚だ新婚だ」なんと云ふ聲も起るので、川島が俤の上から振り返つて苦笑した。和子は澄まして小さな金扇をかざして眩しい日を避けてゐた。幌の内にも日光が胸の邊までさしこんで來て、日の當るとこだけ焼けるやうに熱いのである。車夫のハツビの背中にもだん／＼と地圖のやうに汗が滲み出す。濛々と立つ砂塵は宛然火事場の灰のやうに生ぬるく咽せつぱい。廣い野原や松林が左右に展開する。水の清冽な部落の茶店にも休むだ。眞黒な壘の上に女房はあはて、花ごさなど持ち出して敷いてくれた。壁にはサイダーやビールの廣告繪の美人がくすぶつ

てゐる。その一葉から抜け出したやうな和子は、恐々座りつき乍ら後髪など掻き上げた。どうしてもてなしたらいゝか云ふやうにまご／＼して無暗とお茶ばかりさしに來る女房は、菓子皿のあんばんに群る蠅の群をお愛想ぶりに團扇で逐ひ拂ひなどした。バツと飛び散つた、それは忽ち川島の顔に移つたり和子の肩にとまつたりした。長々と寝そべつて上半身をもたげ乍ら愉快げに巻煙草をふかす川島の表情を、和子は敵意を含んだ眼に一舉一動見てゐた。

山の麓を美しい川に添つて再び揺られ／＼行くと、道の傍の立塙茶屋めいた家から肥つた女房が飛び出して來て行途に立ちふさがるやうにして、この先の橋がかかへ工事中で通行止めだと教へた。車夫は梶棒握つたまゝ立ち停る。店に居合せたほどの客はみな車上の二人に視線を集めた。居たゝまれなくなつて和子は自分から膝掛掻いやつて下り立つて了つた。

俤なら別の道を一里あまり迂廻しなければならなかつたのだと聞いて、川島は車

夫の不^ふ注^{ちゅう}意^いを責^せめたけれど今^{いま}更^{さら}仕^し方^{かた}がなかつた。それに和^わ子^こを乗^のせて來^きたのはあま
り人^{じん}相^{さう}のよくない不^ふ愛^{あい}想^{さう}な漢^{やまと}だつたので、何^{なん}だか薄^{うす}氣^き味^みわるく若^{わか}い兩^{りやう}人^{にん}は強^{つよ}い言^{こと}も
云^いへなかつた。和^わ子^こは少^{すこ}し川^か島^{しま}を便^{たよ}りにしだした。

車^{しゃ}夫^ふは荷^に物^{もの}をかついで供^{とも}する。あぶなつかしい崖^{がけ}路^{みち}をすべり下^{くだ}りたり、朽^くちかゝ
つた丸^{まる}木^き橋^{はし}をたどくしい足^{あし}どり乍^なら和^わ子^こは人^{ひと}手^ても借^からず上^{じやう}手^{てう}に渡^{わた}つた。河^{かは}原^{はら}の砂^{すな}
は眞^ま白^{しろ}で大^{だい}理^り石^{せき}の粉^{こな}の樣^{やう}に美^{うつく}しかつたが、上^{じやう}下^げから照^てりつけられる苦^く熱^{ねつ}に汗^{あせ}は瀧^{たき}の
やうに流^{なが}れて目^めに入る。長^{なが}い裾^{すそ}が脛^{ひざ}にからみつく。息^{いき}もつまりさうな氣^きがして、和^わ
子^この肩^{かた}は急^{せき}しく波^{なみ}打^{うち}つて來^きた。大^{おほ}きな蛇^{へび}のうねるやうに。品^{ひん}よく踏^ふむキル^きク草^{くさ}履^りの
足^{あし}許^{もと}も亂^{みだ}れて。

渡^{わた}し舟^{ふね}は彼^{かの}岸^{きし}から此^{この}岸^{きし}に張^はり渡^{わた}された太^{ふと}い針^{はり}金^{かね}を傳^{つた}ふて往^{わう}來^{らい}するのであつた。淺^{あさ}
いけれども石^{いし}に激^{げき}して白^{はく}泡^{そう}のたぎる急^{きう}流^{りう}は、水^{みづ}嫌^{きら}ひなものなら眼^めをまはして了^{しま}ひさ
うな勢^{いきさ}ひだつた。和^わ子^こはゆらくと洋^{やう}傘^{さん}を擔^{かつ}ぐやうにして乗^のり移^{うつ}ると、上^{じやう}流^{りう}の橋^{はし}梁^{りやう}

に工事中の工夫達がこの様子を見て口々に何かはやし立てた。

乗機のガタ馬車が一臺待つてゐたのでそれをつんだ。ところがめちや／＼な動搖方で、うつかりすれば車體の外へ身體ごと投げ出されて了ふほど、腰掛から絶えず二三尺づゝもはね上る。和子は隅の方に小さく片寄つて袖を膝に重ねてゐた。究窟な車中で向ひ合つた川島の差寄せる笑顔が、恥かしいより厭はしい。きたならしい日覆を洩れて正面に夕陽を浴び、煎らるゝやうな油汗ジク／＼と、道は川沿の山腹、かなりな景色乍ら氣がおちつかねば目にも入らぬ。やがて島々村の清水屋についた。

今日着くといふことは川島から前以つて通知してあつたので、直ぐと二階の一室に通された。和子は熱し切つた懷中から時計を取り出して眺めると、車中の震動の烈しさに、三時十五分前でとまつてゐた。

「あゝ、とう／＼こんな山の中へ來て了つた。これからまだ六里も奥の上高地へー

いざと云つたつてとても親の死目にも遇へやしないのね。

汗とはこりに塗れた紅粉を冷たい山清水に洗ひ流して、まだ火熱りの失せぬ紅玉の様なつや／＼しい頬をおさへながら和子は、かごとがましくさう云つて唇を壓する山々を見上げた。

篋の水音シヤラ／＼と、傍に鬼百合が赫と咲いて。こけらぶきの屋根に石のおもしを載せたのや、家のつくりも暗く黒く、いかにも山家めいて、裏の物置小屋のかげから柴を抱えて出て来た大丸髷の若嫁は、裁附様のものを穿いてゐる。それが髪の手柄とお太鼓の友禪の帯とに對して、いちらしいやうな滑稽さを見せてゐた。

颯と吹き下す風の冷やかさ！ 一つのまにか空も曇つた。

夕立でも來さうなあんばい。サア一ツサ一ツと木の葉がそよぐ。

流水に盃を浮かした手拭地の浴衣姿になつた川島は、男ながらも異様の艶かしさがあつた。折柄丁度隣室へも四五人の連中が着いてどや／＼と賑はしくなつた。御飯だと呼ばれて和子は障子を閉めて室内へ這入つた。

くづれかゝつたやうな魚の肉の味噌汁に岩魚の鹽焼、和子は何にも食べるものがなかつた。それよりも男と二人きりの差向ひなのが食物の味もないほど厭だつた。そこ／＼に膳の前を離れて、今でなくともいゝ荷物の整理などに忙しさに取かゝつた。

かうなれば役りにされるのは上高地へ先着してゐる筈の、木綿問屋の息子のことであつたが、川島はその人の姓名もろくに知つてはゐなかつた。たゞ繪を描く人で三十恰好の日本橋邊のとばかりで女中達にも訊きたゞしたけれども、無論解らう筈がなかつた。

わたしは厭だ。そんな筈ぢやなかつた。いつたい貴方はどうなさるおつもりと和子はびつたり襖の際に身をすりよせ乍ら突かゝるやうに云つた。

「どうもかうもないぢやないか。何に、世間の奴等が何だ、云ひたい者には云ひたい事を云はせておくさ、自分等さへ公明正大ならば、何の滞るところもない。」

「理屈はさうでも、そんな事は通りませんよ。世間／＼て有仰るけれど、世間は私達にとつて大切なものです。いやな誤解なんぞは出来るだけ避けなければならぬ。それに貴方は殿方のことですからさうでもありますまいが、女は損な立脚地です。」

貴方より自分の方に名譽がある、と云はぬばかりの露骨な口吻だつたけれど、川島は氣にもとめぬ様子で、名前を知られてゐる爲に目をつけられやすいと云ふなら宿帳を假名にせよとすゝめた。後めたいことでもしはせまいし、そんなやましい行爲は出来ぬと和子の語氣は烈しかった。

川島は處女の様に優しく惡女の様に執念く、いろ／＼にだめて百方辨解もしたり、彼地へ着けば宿の主人とも相談して、屹度適當な處置を執ると云た。もとより和子も最初から川島を信用してゐたわけではなし、いはゞこの位なことは覺悟の上で切角こゝまで踏み出して來たものを、むしろ好奇心は愈々挑發されたのであつたで、可加減なところの條件で機嫌を直してやつと笑つた。

さうして思ひ出したやうに手提袋の中から、昨日瀬川から受取つた鼠色の状態を取出して封を切つた。中には五圓紙幣で五十圓入つてゐた。その内の幾枚かを引き抜いて川島にあづけた。川島は和子の大嫌ひな會計の役をすつかり委任されて了つたので、小さいな手帳に支出の度毎丹念に一々記入してゐた。

夜、ちつと散歩しないかと川島は誘つた。和子のはげしく頭をふつた。川島は苦笑したが、それでも一人で出て行つた。あとに繪端書など取散らして黄いろい釣洋燈の灯をみつめ乍ら、和子は茫然物思ひに耽つた。

「貴女のことだから何をなすつても安心だと思つてゐます。」

いつもよく云ふ克己の言葉が、この場合一番力強い味方だつた。女のくせに國に乘つてあんまり非常識な行爲ではあるまいか、など、娘らしい謙やかさに責められもするけれど、

「何、態度一つだ。正鵠な理解と批判の頭腦さへ持つてれば……………」

女の自活と云ふことには兎角社會の壓迫が多かつたので、和子はひがんでさうした自分の境遇に對する不平が始終滿々としてゐた。時々突飛な行動に出るいはその腹いせなのであつた。それに常人のなすべからざることまでも、勝れたものには許されてゐる自分には觀照の力——藝術の力があるのだからどんな運命に逢つてもおちついてゐられる、といふ風な誤つた考へ方も、いつとはなしに和子を思ひ上らせてゐた。和子は意地になつても自分のしたことを悔ひたくはなかつた。

やがて川島は明日の人夫の雇人などもすましたと云つて報告に來た。川島は室を

別にすることになつてゐた。わざと隣室へ聞えよがしに、

「ちやおやすみ。明日は早いんだせ、可かい、君。」

「さよなら。おやすみなさい。」

手を鳴らすと老婆が來て寢床をのべて、洋燈を小さな有明に代へて退つた。和子の室は廊下の一番端で、さうしてすぐ襖一重の彼方からは、見もしらぬ男達の齒軋りや軀の聲が高く響く。度々一人で旅行もしたがこんな事は曾てなかつた。何だか心細く、雨戸を立てぬ山家の慣ひも物におそはれさうで心もとなかつた。ともすれば氣になる空模様を見やうとして欄に凭るけれど、あまり尾廂が低く深いので星も見えない。たゞ一つ山裾を行く提灯がふら／＼と狐の嫁入の先ぶれめいてゐた。

(九)

島々村の宿の曉は朗らかな鶏聲に目が醒めた。和子は臥床の中から手をのばして枕上の障子を開けて見た。天も地も茫とした水色の中に山の輪廓だけがくつきりと黒く、やゝ汗ばむた額に心地よい黎明の風！ 手さぐりに懷中時計を目の前におしつけて透かしたけれども、またその薄明りでは針のありかも見えぬ。寢ながら山の容を眺める。折々泉水で鯉のはねる音がしてゐる。

洗面にと階下へ下りてみて、和子は始めて氣がついた。音もなくしめやかに驟雨が炸つてゐるのであつた。いつまでも明け切らぬ筈で、四邊は濃霧のために咫尺を辨せぬ。

室に戻つて欄干に凭れて、和子はボンヤリ戸外を見てゐた。山も樹立ちも跡なく
 消されて、だん／＼雨脚が疾くなつた。大空より水晶簾をかがげし如く、瀧
 ともまがふ雨だれの音。降れ、降れ、降れ、いつそ断念のいゝやうにドントと降れ
 と彼女は袂の先で掌を叩いた。

川島がのこ／＼と起き出して來たのは、それからもう餘つ程経つてからであつた
 「おい、雨だせ、雨だせ。和さん、悲観だなア、悲観だなア。」

「知つてますわ、三時半から空と眺めつこよ。あくびの二三百も嚙み殺してますわ
 ……」

「僕も疾に目が覺めたんだけど、天氣がわるいやうだから落膽しちやつてね。困
 つたなア、實に悲観だなア。」

「やり切れないのねえ、こんなところに終日籠城と來ちや。」
 「降仕度でもいい。出かけやうぢやないか。」

「さうねえ。」

流石に煮え切らぬ返辭をして空ばかり仰いでゐるうちに、幸ひ少し明るくなりかけたので、この分ならば大丈夫と宿でも保證してくれるし、頼んでおいた荷負ひの人も來たと云ふので、朝餉もそこへ。急に勇み立つて仕度した。

膝の上まである黒の靴下の上から更に足袋を履き、カシミヤの袴を膝切に着けてペールですつかり顔を包んで、衆立を着て金剛杖持つて、店先に腰かけて草鞋を履かせてもらふ間も、近所の頑童達が黒山のやうに集るのを、見るものではないなといと宿の若主人が追ひ拂ふさわざ。和子は澄んだ眼を贈つて無心のやうにこの光景を眺めてゐたが、川島は一人やきもき世話を焼いた。やがて立出づると、白骨温泉へか上高地へかと島々村の狭い部落は軒並和子の評判でもちきりであつた。

案内は丸々とした顔の、日に焼けて赤く光つた人のよささうな男であつた。名前は佐山平内と名乗つた。和子はふと思ひ出して、先日かう云ふ大阪の新聞記者

が来たのを知つてゐるかと思ねると、

「あゝ、橋本さんの案内は私がしましたよ。」

「あら、左様な。それは奇遇ね、あのおちさんあんなビール好きみたいで、よく歩いてね、上高地まで何時間かゝつて？」

「この大將、橋本さんとは仲好しなんだよ。」

と川島は傍から云つた。

「はア、さうかね。」

あせらずにユサリ、ユサリと行く。和子は糸立をゆり上げ乍ら、後になつたり先に立つたり、花を摘んだり、草笛吹いたり。島々溪の奔流をさしはさんで、兩岸は雨後の翠緑の滴りさうな山々。卯の花は白く、庭々に芽出し風の真紅なる、秋びの彩にも似たる若葉の光り、老鶯が啼く、恰も晩春の頃のやうな風物である。一里半の間は山奥から伐り出した材木で積るためのトロソコの線路が引いてあつた。

だん／＼空は晴れて、紺青の袴の色と同色になつた。折々ボタリと梢の平がおちるのを、キヤツと云つて和子は飛び上つた。毛蟲とまちがへて。

うね／＼と縁にけぶる山腹の小徑にたま／＼行き合つたり、道づれになつたりするのはみんな荷を背負つた男たちばかりであつた。十六七の少年上りもあれば、五十以上の老人もゐた。知ると知らぬに關はらず必ず

「ヤアお疲れー」とか

「御苦勞さん。」とか

とか挨拶し合ふ。これが一服の清涼劑で、彼等同士にとつては實に何と云へぬ親しみと慰安を覺えるのださうである。荷の重量に丸くなつて可笑しいほどのろ／＼と歩いてゐるが、わりあひに道ははか取つた。みな腰には天狗の羽團扇のやうな恰好の毛皮を一枚づゝぶら下げてゐた。それは休む時臂の下に敷くのであつた。が、一寸した休息には荷物の後を杖で支へて立つたまゝ上手に肩を休めた。

奔瀧に更に怪石を噛み、奇巖と戦ひ、白泡を湧かして、飛瀑ともなり淵ともよどみ、樹隠にも地の震ふやうな水音が絶ない、岩から岩へ架けた橋も幾つか渡つた。が、足下に遠い時には下りて抱むべきやうもないので、木蔭の苔清水と珊瑚々と天女の纓絡のやうに山の根から岩壁を傳つて進みおつるのを見るたびに和子は馳せ寄つて、淋漓の汗を絞つた手布をひたしたりした。佐山は木の葉で盃を造つてくれた。アルミニウムの水呑よりもそれで飲む方がうまかつた。辨れるやうな冷たさに咽せ返りつゝ和子は息もつかずに仰ぐと、飛沫が髪の毛を真珠の様に輝かした。

しかし水には直き飽いた。路傍の茂みの中に木莓が真紅に熟れてゐた。和子は相手もないのに争ふやうに、大急ぎでむさぼり食べた。が、いくら探してもくつきなかつた。野葡萄はまだ青くつて小さかつた。崖の上には樹も葉も紫陽花にそっくりで、それよりはやく寂しい花をつけたがくや樺色の百合に似た草が咲きつゝいてゐた。路はおびたしい車前草の上を踏んでゆくのだつた。

島々から三里半で岩魚止の茶屋についた。それはやゝ小高い塙所に眞黒にくすぶつた一軒の家があつた。家の後には大きな桂の木が空一杯に枝葉を張つて、その下の竈には白玉を碎いたやうな水が躍つてゐる。閉爐裏端には五六人の人が休んで食事をつてゐたが、和子は見返りもせず、家の前を通り抜けてしまつた。

峠までは岩魚止から四十町の登りと云ふ。その三分一もゆかぬうち、和子はへとくになつて意地わるく無暗に咽が干いて來た。行きすりに見た茶屋の清水が切に義しく思ひ出された。何故あの桶のふちに口をつけて思ふさまかぶりつかなかつたらう、人がゐたとて何をあんなに取澄まして了つたのだらう、と取返しのかめこのやうに口惜しく自分をせめた。だん／＼歩調がゆるくなつた。たえがたく呼吸が追つてふら／＼と氣が遠くなりさうであつた。一時熱し切つた頬のいろも蒼白に變つて來た。佐山は見かねて、

「では、こゝらで飯にしますか。」

「清淨な清水のあるところてどこなのよ。茶屋からもうずぶん歩いたぢやないの茶屋で休む筈だつたのに、まだくつてこんなに引張つて来るのだから。いくら引張られたつてもう動けやしないわよ、牛や馬ぢやないんだから。」

一句一句、息を切り乍らも口は減らない。

「さうだ、く。和さんはお腹が空いたんだらう。空腹のあまりはよく卒倒なんぞするもんだ。僕等も行軍なんかで覚えがあるがね。」

「人ぎゝのわるいこと有仰るもんぢやないわ。」

「此方がえゝづら。」

佐田は草を掻き分けて河原に下りて、程よい埒所を見立て、糸立などひろげたけれど、和子ば身動きするのも物倦く、しばらくは俯いてボンヤリ地上を見つめてゐた。川島は急流の中の石をひよいくと飛んで行つて、對岸の岩の上に笑つて見せた。

渡された經木包の握飯を大切さうに膝の上でひらくし、胡麻鹽をまぶした赤兒の頭はどのが二個、他には何もなかった。

「虐待だわねえ。」

とつぶやき乍らそれでも隅からむしつては口へ入れた。だん／＼むしつてゆくと中から梅干が出て來た。い／＼だけ食べて了ふと和子は水の上へ顔を伏せて兩手に掬つて思ふさまのんだ。そのせいかひどく惡寒がして、向ふ岸からしきりに話かけられても、水勢にまぎれてよく聞えぬし、返事も出來ぬほど胴震ひがする。あはて、風蔭へ引越して日向ぼっこ、蓬の露がはら／＼散つてい／＼匂ひを立てる。川島は實の吸口を噛みながら、

「和さんの登山自慢もあてにやならんね、だから云はない事ぢやない。もし／＼龜よ、龜さんよ、だ。あんまりおそい鬼さんだ。」

「最初の中はえらい威勢ぢやつたが、これぢやノウ、どうも、途中で日が暮れるづ

ら。」

佐山は銅色の人の好い顔に笑ひを浮べて眞白な齒を日に光らせた。

和子は澄まして、

「何、ちつとも困らない。どうしても歩けなくなつたら、私佐山に負つてもらふから、川島さんはこの荷物背負つてくれれば可い。」

「おい、呆れた心がけだね。これだからお姫さんは困ると云ふんだ。徳本峠にさしかゝつてまで、お振袖着てする／＼と裾を曳きすつてゐやうと云ふのだからね。」

「申談は申談として、實際くやしいけれど仕方がないわ。今日はどうしたんだか苦しくつて堪らない。こんな筈ぢやなかつたのにね。」

まだ胸の鼓動が静まり切らぬ微白い顔をして、裾や袂にへばりついた朽葉を拂ひ乍ら、それでも杖を引きすつて立ち上つた。と、丁度下山して来る婦人に逢つた。

若い學生と二人づれで、二十ばかりの品の好い美しい女で、髪を引詰の束髪にして紺飛白の單衣を甲斐々々しく端折つて、紅い黼出しに紺の脚絆をつけてゐた。双頬が蔷薇色に輝いて、いかにもにこ／＼とうれしさうだった。元氣もよかつた。和子は理山のない妬みを感じた。佐山は

「オウ、今日お歸りですか。」

と挨拶してゐた。それがどうした女であるか訊いてみる氣力も和子はなかつた。二間行つては立ちすくみ、三間行つては渴を訴へる。しかしもう九十九折の峻坂は溪流と離れてゐた。仕方なく一生懸命杖に縋つて歩を運び乍らも、ふと氣がつくとわざとそれを横抱きにする。一寸立ち停つて息を入れるのにも「まあ綺麗な花。」「おい、景色——」など、何も見えないのにごまかした。草鞋の中にもよく小石が入るそれを取除るのにかこつけるのである。

それがだん／＼烈しくなつて、終には一步も前方へ出なくなる。やたらとそこら

へ腰を下して了ふ。川島と佐山はもてあまして、左右から手をとつて引立てぬばかり、和子は怒つて手強く振り拂つた。

「でも實際酷いからねえ。えらいよ、女にしては。無理もないさ、ねえ、君。」
「さうぢやね、どうしてなか〜」

「ふふふ莫加にしてるのねえ。あやしたつて駄目ですよ、三歳児ではあるまいし。」
和子は苦しくて笑ひも出来なかつた。

「アア、さら彼處に篋の桶が見える。馳足ッ!! さア、早く〜、和さん、こゝだこゝだ。」

美味さうに手で揃ふ眞似までされて、勢ひづいて痛い足を早めて行けば、木の根が恰好その様に遠くから見れば見えるのであつた。佐山は傍に笑つてゐた。

履きなれぬ和子の草鞋はともすればすりおちて、馬の脊の様な恰好に丸まつて了ふ。その度に兩人の前に、そのあらびあ産の驢足のやうなおそろしく細長い黒靴下

の脛を遠慮なく突きつけるので、一々身を屈めては結び直してやり／＼せねばならなかつた。が、五六歩も運ぶと直ぐ駄目になつた。

「いやよ、川島さんはへたくそだから……もうこんなになつちやつたわ。」

「ちれつたいなア、和さんが不器用だからだよ。歩き方がわるいんだ。」

「さうですよ、そんなお品のよくない育ち方は致しませんでしたからね。一向に慣れませんで。」

「和君、見たまへ。そら、もういよく絶頂だ。」

「また木の切株でもあるんですか。」

「は、先刻は實に怨しうな顔をして……化けて出さうだつた。ねえ、佐

山、」

「あんまり罪なこと云つてだまかすんですもの、實際死にさうだつたわ。あら、駒鳥が啼いてるわ、ね。」

耳をすまし乍ら振り返つて見れば流石に、遙々と來ぬものかなと領かれる。遠く見上げてゐた峰がだん／＼眉に迫つて、頂きの方から日が射して來た。

しかし漸々上りつめて、頂上に達した時も、それほど嬉しくはなかつた。これまでの勞力に對して當然のやうな氣がした。袂で風を入れながら、前面に峙つ穂高連嶺の雄姿を仰いでも、眼下に展けた眺望に對しても、もつと何か變つたことがありさうなものだと云ふ、皮肉に納つた顔をしてゐた。目的の上高地は四方山嶽に取りかこまれた藥研の様な谷地であつた。梓川の流れや宮川の池といふのがしら／＼と光つて見えた。

頂上は幅のせまい馬の背みたやうな塙所なので、直ぐともう峻しい下り坂にかゝらねばならなかつた。和子は急に脚も軽く氣も軽くスタコタ／＼、止め度なしに馳け下りては後の二人をふり返つて遙に笑つた。急げば急ぐほど下りではガタクリ／＼背中荷が躍るので、佐山は閉口して

「あやまりますだ、あやまりますだ。」

「ほ、ほ、ほ、」

まるで別人の様にはしやいで、快活な笑聲が森のこだまに高く響いた。路は樅や樅や榎や落葉松の大樹の茂った森林帯へ出たのであつた。和子は殊に白樺の樹を珍しがつた。時々大きな牛に逢ふ、岩かと思ふのがふいに動き出したりした。人の香をかぐとなつかしさうに寄つて來た。

「先刻の女、ひともうれしかつたんだわねエ。下りになれば誰だつて元氣づいてよこんな路ならまだ四里でも五里でも歩ける。」

と度張つて金剛杖などに薙刀もどきに引抱へて「ヤア女武者」。など、川島にはやさせた。

霜降の制服に糸立を着、背囊やうのものを背負つた十八九の青年が、同じ様の服装した十三四の弟らしいのをつれて、すた／＼と後から追ひ抜いて行つた。それは

馬小屋の手前の橋の傍であつた。馬小屋から温泉場まではもう一里弱だつた。路は山裾についてゐて、眼の下はひろい河原。對岸には穂高の三山が嚴かに人の心を壓して聳えてゐる。

いつか林の中に入つた。それはまるで一大公園の——それもよく給端許などにある西洋の——内を行くやうであつた。花岡岩の川床を流れる溪流は似るものもなく清らかで、青い絹でも敷きつめたな芝生には、黄に紫に名も知らぬ花が天鵝絨のやうな艶に咲き交つてゐた。空氣は澄んで、しら／＼と梢を洩るゝ光線の外、仰いでも空の色を見ることは出来なかつたが、ちつとも陰氣ではなかつた。白樺の幹が雪の様に白かつた。流石の和子も、

「いゝわねえ。」

と幾度となく立止つては讃歎した。

「だから和さん、來てよかつたとは思はないかい？」

「思はないほどなら来やしませんわ。けど實際豫想以上の仙境ねエ、わたしこんな美しい清浄の地が、この世にあるとは思つてませんでしたわ。」

「ハ、ハ、ハ、まだ／＼こんなことに驚いちや不可。ハ、ハ、ハ、ハ。」

たつた一軒しかない温泉場の繁昌につれて近年新に建築たといふ二階建の粗末な旅館が路傍にあつた。この邊は殊に河原の景色が勝れて、相變らず水は美しかった。兩岸には柳と白樺が低い林をなして、優婉繪のごとき風趣であつた。河童橋といふ木造の釣橋は乗るとゆらく揺れる。

霞澤岳と穂高岳を左右に、下流に向つて路は草原の中に細く續いて、女郎花に似た黄いろい花だの赤い柳草だのがやゝ丈高くぬきんでゐた。白樺の切株がいくらかあつた。和子はその中の一個に腰を下して了つて、そつと懐中鏡をのぞいて見ると、少し前髪は亂れたけれども、髻に玉のやうな綺麗な顔してゐるので安心したふと先刻の學生が引返して來るのに行き合つた。突然先方から一禮して、

「失禮ですがあちらへはもう御通知でもしておありですか。それでないとい入らして
もむだです。満員ださうで。」

「あ、可です、可です。」

川島は無やみにあはて、痰口で云つた。

「いや、それなら結構ですが、どうかと思つたものですから一寸御注意までに。」

「有がたう。」

氣の毒らしいので和子も會釋した。それは帽子をとると眉目の秀麗さが口を驚かすほど美しい青年だつた。弟の方はいたづららしい丸顔に眼がくり／＼してゐた。やがて温泉宿の屋根が見え出した。小さな獵犬が門口で火になるやうに吠え立てる。暗い土間の内は何やらこた／＼して、正面の板のまには大きな爐に太い丸太が赤々燃えてゐた。古今な洗足盥に汲んでくれた生ぬるい湯が、疲れ切つた足に快く泌みた。

「わるくないぞ、あんなのと相部屋なら、此方から志願しても。」

こんな聲も聞えた。丁度登山期で山岳會の團員などといふ連中に、どの室も充滿だつたけれ共、二人の爲には特に八疊の一室が明けてあつた。しかしそれとてもほんの疊の上で雨露がしのげると云ふばかり、普請なんぞも荒壁のまゝ、湯槽には鐵のやうな毛脛が入り亂れてゐた。

峠で憊んだあとかたもなく溢れた前髪に櫛の齒を入れたり、湯上りの化粧をすまして和子は食後の散策がてら、土間に轉がつてる重たい宿の貸下駄を引かけて、佐山の案内で焼緑山麓の大正池を見に行つた。

宿の前から更に青草の原に一筋ふみつけられた徑が十町あまり密林の中についでゐた。それは飛驒の國の方へ抜ける道であつた。大正池はその年六月焼緑大爆發のとき凄じく崩落した土砂や大押出の爲に、梓川の一部がせきとめられて、細長い湖水みたやうなものが現出されて了つたのである。またの名を「白樺の池」とも云

ふ。なせならば白樺の林がそのまゝ、池中のものとなつてしまつて、滿々と溢へた水に青い梢や白い幹の影を落してゐるさまは實にたとへやうもない奇觀であつた。池の水は綺麗に透き徹つてゐ乍ら凄いほど真青だつた。まるでエメラルドを溶かしたやう。見ても見ても見あかない。

けれどもまたその四圍の慘狀は目もあてられぬ。火事場とも地震の跡とも云ひやうがなかつた。灰汁のかたまつたやうな地上は、まだいくらか硫黄の匂ひもして、ねとくと下駄の齒に吸ひつく。小家ほどもある大石や白骨のやうに焼けこげた樹々は灰泥に埋まつて散亂し、對岸の山も四合目あたりまではその慘害をかふむつて樹木の枝と云はず熊笹と云はず、被つた灰の重量に得堪へず、生き乍らしつくひ細工のお化のやうになつて垂れ下つてゐる。

足下までだん／＼濃紫の夕暗に傾せられてゆくのも忘れて、和子は池畔に立ちつくしてゐた。夕風が冷々として來た。

「暗くなるでね。」

と佐山は注意した。歸途にはもうとつぷりと暮れてしまつて、潮の音のみ高かつた。温泉宿の燈火は遠くから妙に花やかに寂しいものに望まれた。和子は室内に入ると羽織を引かけた。

この混雑の中では別々に室をとることの叶はぬのも知れてゐたし、もうどうともなれ、自分を守るものには自分があると、心をきめて了つたので、和子は川島のなすまゝに任せた。川島は宿の主人にだけ事情を打明けて、表面は兄妹といふ體裁にしておいたと云つた。

「兄妹に見えるつもり。いゝ氣なものね、ほゝゝゝ。」

眉を寄せて自嘲つたが、

「みんなさう思つてよすから御心配なくつて宿の主人も云つたよ。」

「正直よ、川島さんは。」

でもそのまゝいそがしく繪端寄に萬年筆を走らせて、その中の一枚を瀬川へもあてゐた。

(一〇)

翌日になると別の座敷が空いたと知らせて來たので、和子も早速檢分に行つて、氣に適つて其室へ引きうつることにした。

それは浴室の前かり亘傳ひになつた新築の二階の取つきの六疊で、欄は梓川の清流に臨み、霞澤岳の翠巒と相對して、西側へまはれば荒涼たる燒嶽の山容も一日に見渡される。座敷も宿中では一番上等で小綺麗らしく、和子はまるで天女の降臨でもしたやうな取扱ひを受けてゐた。

床の間には原稿用紙だの、書籍、雜誌類を積み重ね、びか／＼光つたニツケル臺の卓上鏡や白い細い針金で編んだ綺麗な化粧函や、ハイカラなバスケツトや衣裳袋や、袖疊みにしたお召の羽織や緋の帯揚などが、その雜風景な一室に不似合な濃艶の氣をみなぎらせた。瀬川からの贈物である二萬分の上高地地圖に壁に貼りつけて、通つて來た路とこれから踏破しやうと云ふ區域とに、紫と赤鉛筆でしるしをつけた。手欄には市村格子の意氣な濡手拭がかけられた。

廊下一つへだてた向ひ側の室には、中學生の五六人づれがゐた。それがまた人のわるい生意氣盛りだからかなはないのだつた。面白く事が始まつたと云ふやうな顔して和子を見てゐた。

川島が少し晝寝をするからと云ふと、女中達は心得て命じもしないのに二人分の枕や掻卷を抱えて來た。川島は苦笑した。和子はふいと縁へ出てすつかり障子を開け放して了つて、川島が風過ぎるからといくら歎願しても聞かなかつた。おそろし

く侮辱されたやうな氣がして、二度と室内へ這入るのが腹立たしかつた。たとへ男と同室でないまでも、和子はそんな不行儀を毛蟲よりも嫌ふのであつた。

川島は和子の不機嫌を取直すのに骨が折れた。結局誰か友達をこしらへて来て上げやうと云ふので階下へ物色に行つた。さうして眼識に適つて連れて來られたのは高師附屬の制服を着た、恐ろしく鼻の高い凛々しい顔をした學生で、十七だと云ふ年齢よりもませてゐた。流石は都會育ちだけあつて、若い女性の前だとはにかみもせず、和子の質問にも男らしくぎ／＼とよく答へた。白馬嶽の殘雪の大偉觀やお花畑で採集たといふ珍奇な高山植物の押花などをノートの間から取出して見せたりした。その學生に對しても、川島のいやに先輩ぶつた尊大な口吻が和子の氣に入らなかつた。學生は秀でた眉の邊を頻りに掌でこすり乍ら、

「貴女のことです、僕の方——地理の先生ですが、今朝洗面所で若い都の婦人をお見かけしましたつてね。えらい元氣だつて、あれでなくつちやと賞讃してゐ

したよ。」

「あら、恐れ入りましたこと。あのお爺さん!! あの方ですか、道理でいやにちろ

く御覧になつて!! はい。」

「そんなお爺さんぢやありません。」

と學生は辯護するやうに云ふ。

「だつて、頭顧がつるくでしたよ。」

「あれは禿頭で名高い先生なんです。けれどもまだそんな年輩ぢやないんですよ。」

眞面目なので和子は失笑した。

そこへ晝飯が運ばれて來たので、學生は辭し去らうとした。

「また!! 直していらいつしやいな。ね、ちと他の方も御一緒に!! お待ちして居りま

すよ、退屈で困つて居りますから。」

菓子紙包を手渡し乍らさゝやくやうに云ひ添へると、學生は薄く面を染め乍ら

「有がたうございます。今夜僕の方には茶話会がありますからいらして下さい。何
 誰でも歓迎するんです、先生にも云っておきますから。」
 などと云った。

夕方になるとどや／＼八十人あまりの團員が山登りから歸つて來たので「ア、ヨ
 ウい／＼」などと足踏みする度に、家屋は地震の様にぐらついた。天井のない廊下
 の梁からは塵が雨のやうにゆれおちる。便所も浴室も満員で、和子はうつかり室外
 へなど出られなかつた。萬緑叢中の紅なれば――。

(一一)

その夜から空模様が変わつて、翌日は雨の晴ないばかりか、風さへ強く加はつた。

す。梓川も定めし出水いたしましたでせう。丁度恒川君の萬龍に於けるが如し
ですか。御歸途をお案じ申上げます。

雨が晴れますと、小生もお伺ひいたすかわかりません。いえ決してお邪魔に伺
ふのではありません。日本アルプス寫眞帖を計畫して居りますが、山岳會にあ
る寫眞だけでは、どうも満足できませんから、寫眞師をつれて新たに撮影に参
りたいのでございます。

併し、かなりにひどい山ださうでございますね。寧ろ幸ひですからいのちをか
けて見たいと思つて居ります。

ルベックやブランドやリチスのやうな最後でも得られたら痛快だと思つて居
ります。無事に下山できたなら今ひとつの願ひ、深刻な小説が書けるかも知れま
せん。どちらにしても痛快でゲートルが唸つて居ります。

どうもこのごろ殘忍性が活動したがつて困ります。」

けれども、大概な人達はもう寫眞などで和子の顔を見知つてゐた。

「和子ぢやないか、玉川和子ぢやないか。玉川和子が來てゐる。」

「えゝあれがゝ。」

「あの女か。」

などといふ囁きは風が木の葉を鳴らすやうにざわめき渡つた。と、同時に侶伴の男の何者であらうと云ふことが、それ以上大きな問題になつた。丈の高い眼の大きな容貌魁偉な、丁度ヨカナンのやうな男だなどと尾にひれ添へての評判だつた。和子は全身が蹠神經の様に鋭くなつてゐた。何にでもビリ、ビリツとよく感じた。

彼女も今更後悔してゐた。なぜ最初にもつと強硬な態度を執らなかつたらう、これでは人が何と見る。些もやましい點はないやうなものゝ、和子は人口がまぶしかつた。面を見らるゝを厭ふた。夜などわが影法師の障子に寫るのさへ氣にした。湯殿へも深夜人知れず下りて行く。これではいよく疑惑をますばかりと承知しながら

ら、それも隙勢で仕方がなかつた。和子は世間が一尺四方ほどに縮まつて了つたごとく感じた。

避ければ避けるほど、人には少なからぬ反感と憎嫉の念を起させた。尊い山霊をけがすものであるの、天變の原因はこの男女の爲であるのと益々騒ぎを大きくしたわざと和子たちの室の前の廊下を集つて、景色を賞する風をしながら、無涼慮にいろ／＼なことを云ひ合つたり、室をまちがへたふりしてカラリ障子を開けたりするのもあつた。あんまりばかり／＼しくて、和子は鼻氣に取合つても居られなかつたが川島は一人頭髪を掻きむしつて憤慨してゐた。

さても高山の天候のきはまりなさ。やう／＼山の頂きから晴れはじめると見えても、忽ち中腹を羅のやうな白雲が迷ふ。一寸室内へ物など取りに入つたまに、もう一面の濃霧におほはれて了ふ。簑笠で網を打つ人が文人畫の趣である。切角友達になりかけたあの學生も、僅の晴間を見てはズボンをたくし上げて下駄ばきでよく

庭の池で釣なぞしてゐた。欄干から見下すと先方でもふと見上げて、眼を見合すことがあつても、見ぬふりにそらして丁ふのが可愛らしかった。澤山の仲間もゐる中で、問題の女と無意になつたなどと評判たら迷惑であらうと云ふ思ひやりから、言葉をかけることも得せなんだ。

或時もこんな事があつた。和子がふと縁側へ出ると、丁度階段を下りかゝつた若い男が足をとめさま振り仰いだので、はからずもバツタリ顔が合つた。先方では透かさず、

「貴女はもう何處か山へお登りになりましたか。」

「いゝえ。」

「ぢやこれから――、否、何ですか、上高地へいらしたのは登山のお目的ぢやないんですか。」

「どうなるかわかりませんの、まだ。」

和子は愛想氣のない調子で應對してゐると、

「和さん、誰？ 此方へお入りなさいと云ひ給へ。」

と川島が障子を開けて出て來た。よいいなことをと厭な氣持がしたけれども、そのまゝ男を請じて室内へ入つた。荒い棒縞の宿の浴衣をつんつるてんに着た、色の赤黒い丸顔の活々としたその男は、

「私は山岳會の一員で來てゐます、大阪の小學校の教師です。」

と名乗つた。さうして丁度壁に和子の袴がかゝつてゐたのに口をつけて、

「貴女は？」

などと氣にした。

「わたしは女教師ぢやありません。ほゝゝ」

と和子は笑つてうつむいて、茶器など引き寄せた。

話相手にはおもに川島がなつた。和子は傍に皮肉な顔してゐたが、たま／＼質問

の矢が自分の方に向けられても、おちつき拂つて應酬した。乗せられてべらくとしやべる川島が齒がゆくて堪らなかつた。客は無遠慮に室内を見まはしたり、頻りに兩人の名前をきゝたがつた。

「それは一寸言へないんだ、君。」

自分は名乗るべき名を立派に持つてゐる。何もこんな肩身の狭い思ひをする必要は少しもありはしない。我物顔する川島が憎い。と焦々體内が震へたけれども、和子は隠忍してゐた。

「二階の噴火口は猛烈焔にして近寄るべからず。」

やがてその男はそんな報告を持つて歸つて、一同を笑はせたりした。

こんな中で瀬川の手紙はまた堪え切れぬほど和子をいやがらせた。胸がむか／＼した。

「雨が降つてお楽しみでせう、天變地異は人と人との心を強く結びつけるもので、

す。梓川も定めし出水いたしましたでせう。丁度恒川君の萬龍に於けるが如しですか。御歸途をお案じ申上げます。

雨が晴れますと、小生もお伺ひいたすかわかりません。いえ決してお邪魔に伺ふのではありません。日本アルプス寫真帖を計畫して居りますが、山岳會にある寫真だけでは、どうも満足できませんから、寫真師をつれて新たに撮影に参りたいのでございます。

併し、かなりにひどい山ださうでございますね。寧ろ幸ひですからいのちをかけて見たいと思つて居ります。

ルベックやブランドやリチスのやうな最後でも得られたら痛快だと思つて居ります。無事に下山できたら今ひとつの願ひ、深刻な小説が書けるかも知れません。どちらにしても痛快でゲートルが唸つて居ります。

どうもこのごろ殘忍性が活動したがつて困ります。」

署名も何もしてないのが、卑怯なと一層憎みたくもなるのであつた。自分に對して何の權利も持つてゐる筈のない男が、どういふわけでこんな失敬なことを云へるだらう、何といふ厭らしさにみちた文面だらう、引裂いても噛み破つても足らなかつた。和子はその手紙を川島の方に投げやつて憤々した。男はそれを讀んで失笑しながらも、和子の意向を知らうとつとめた、その頃東京の諸新聞はいち疾く「玉川和子女史は日本アルプスに新婚旅行中。」と報じてゐた。

(一一一)

それもこれも一時であつた。こんな連中は天氣さへ回復すれば、早朝からそれぞ目的の山々へ向つて出發して丁ふから、晝間は大風の風いだ後のやうな静けさ。

陽炎が湯殿の羽目板にちらちらと躍つてゐた。

川島はそれは／＼優しくかつた。どんな無理でもわがまゝでも通してくれた。和子
の個人主義は完全に發揮されて行つた。宿の女中は不思議がつてひそめいた。

「あれや旦那様より女の方のほうがえらいんぢやな。」いつもお膳を下げにゆくと
飯櫃が旦那様の方にある。女の方のお給仕をして上げなさんぢやらうか。

女中は五人ゐた。山國の女はみんなきめ細かで色が色い。手束ねの銀杏返しに
赤い袴などさして、筒袖でバタ／＼と腰を抛り乍ら見得もなく馳せて歩く。和子の
一舉一動は悉く彼女等の驚異の的であつた。

「川島さん、わたしのことをさう和さんとさん云はないで下さい。あんまり馴れな
れしいやうで氣持がわるい。」

「それや僕だつて氣になるんだけれども、他に適當な呼稱もないぢやあないか。」
それでも流石に潜越だと自認してゐたらしく、いつとはなしに姓の玉川の一字を

とつて「たあ君」と呼ぶやうになつた。しかしそれよりも和子を嫌がらせたのは、他の人に話す時「大將」と云ふ代名詞を使はれることであつた。何から何まで氣に入らなかつた。たまらない不快さによくつけ／＼とたしなめもした。

殊に彼女はたくましい男の肉體に對しては、殆ど病的に憎惡の念を感じた。さうして纖細な自分の體質を誇らしう思つた。事實彼女の手首などは細々としてゐて、柳の葉のやうに青白く、どうしてこんな女にあの高い峰を越えて、かうした山の中へ來られたかとみな驚きの眼を臨むほどだつた。いつも好んできちんとお太鼓に結んでゐる帯が、蚊ばそい胸のあたりを苦しうにさへ見せた。誰も和子の服裝や居すまひを崩してゐるのを見たことがなかつた。

朝も四時過ぎにはきつと目をさました。風雨の晩でないかぎり雨戸を閉めないの
で、朝は早くから室内が明るくなつた。女中が焚きおとしを十能に盛つて火鉢へ入
れに來る頃には、ちやんと髪を結つて了つて洗面所へ下りて行つた。さうして綺麗

に化粧をすました和子の浮き出すやうに白い顔は、毎朝縁側の欄に見られた。彼女は男の寝像の浅ましさを見るのが厭だつた。川島はわざわざ七時頃まで眠りつけた。

朝夕はあんまり露が深くて散歩にも出られなかつた。朝寒に震へ乍ら懷手をしてあちこちする目の下には、薄紫の紫苑がしほらしく、咲いてゐた。こゝへは朝な自分^{じぶん}が濃い白粉^{せうこう}の溶水^{とうすい}をすてるので、きつと今に白い花と咲き變るであらう、などと詩の様なことを和子は思つた。

屋根からも川面からもほのくくと水蒸氣が立ちのぼる。それが對岸の山や林を微妙な物にして見せる。潮の音もまだ眠りから醒めぬやうにやはらかである。薄絹のやうな露の底を、眞珠のやうな底光りを帯びて水が流れる。しなやかな川柳は繪のやうになびいてゐる。

来る時道で行き合つたあの美青年の兄弟が、養老館に宿つてゐると見えて何處へ

行くのか、身輕ないでたちで朝霧を分けて出かけてゆくのも一二度見かけた。和子はそれをも昔馴染のやうな氣がして、なつかしく見送るのであつた。

やがて白金を磨き上げたやうな太陽が赫と面を打つて、燒緑に映すると、噴煙が金色を帯びてきながら金龍ののたくる如くである。燒緑は地獄のアルプスの様な活火山だつた。赤黒い醜怪な地肌を露出して、たい枯木の幹ばかりすく／＼立つてゐるのが遠くから見ると、恰と老人の禿頭にちよろ／＼と髮の残つてゐる通りなので和子は可笑しくて仕方がなかつた。今一つおまけにこのおちいさん、藥罐頭の方々からやたらに煙を吐いてゐる。幾條にも分れて天に冲する。末は薄れて雲に入る。靑大空に行方も知らず……………。

日の上るにつれて川瀬は銀の小波を立て乍ら流れた。この邊は河原の幅もかなり廣くなつてゐるので、一方にはきれいな石底を目にもとまらず追ひかけつこするやうにして水が走るかと思へば、白い砂洲を中にしたその一方はあぶらの如く湛へた

深潭、微動だもせず樹木の影を寫して色は緑に悠々。鶯が啼く、蝶が舞ふ、つばく
 ちも屑を掠めてつい〜と飛ぶ。

家のまはりには夏草が茂つてゐると云はうより、家屋が草の中に埋もつて了つて
 ると云つた方が適當なくらゐ。釣鐘草の薄紫や毒草だといふ鳥兜。つはぶき、虎
 の尾、百合、あざみ、いちばん多いのが例の柳草。八千草が咲き亂れ、古の物語
 か繪巻物にでもありさうな場面。薄も穂に出て！ 白晝でも虫が啼いてゐた。

淺茅生の草がくれ、思ひがけないところに水音がする。蛙のあまりがちよろ／＼
 と流れて池にそ／＼のであつた。水際には根芹がいつばい生へてゐる。温泉は池の
 傍の山の根から湧く。それを桶もて湯殿に引いてゐる。

川島が午睡をしてゐたりして屋外へ出る時、和子は裏の柴小屋の前に鶏をあつめ
 ては楽しんだ。黒い雌鶏が五六羽にたくましい金色の雄鶏と、まだ若々しい眞白な
 とさかの美しいのが一羽ゐた。白い雄は羽色のちがふせいか仲間からのけものにさ

れて、いつもたゞ一羽でボツネンと寂しうにしてゐた。和子はこの鶏と一番仲よしになつた。菓子だのうで鶏卵だの投げてやるとよろこんで食べた。けれどもいつかこの鶏がくびられて食料に上る時節があるのではないかと思ふと可哀想で、殊に西洋人の泊り客などあると胸をひや／＼させた。

山家の犬は日本種の獵犬故、身體が小さく耳が狐のやうにオツ立つてゐて、すこしも可愛氣がなかつた。見知らぬ人さへ見ればよく吠える。だからその聲がすると和子はすぐ縁側へ出て見る。新しい客人の背後から人夫が山のやうに荷を背負つて従つてくる。知人によく似た人の姿に、ハツと胸激かすこともあれば、あらぬ人ちがひに落膽することもある。それでなくとも夕方郵便物や新聞が手に入るのだからうれしい、人夫の到着を戀人のやうに待ちわびる。

和子は毎日／＼あてもない克己からの手紙を期待してゐるのであつた。送りわけで女中が持つて來るのを待ちかねて川島を帳場まで取りにやる。けれど、戀しい人

からのなつかしい消息には一度も接したことがなかつた。失望のあまり口を利くのもいやになつて、涙ぐんだ顔をそむけることもあつたが、また氣を取直しては明日々々と新しい望をかけた。

いつか花やかな夕榮雲も影をおさめて、晴れた日には川面が薄小豆いろに、曇つた日には鼠色になつて暮れてゆく。げに温泉場の夕暮ほど人の心を何となく甘い哀愁と寂寥にそゝり立てるものはなかつた。室々の障子に灯影が赤く映つて、いたづらに水聲のみ高い。慣れない間はおびえ勝な夜半の寢覺の折々に、この石走る水の響を、いつも大雨の音とまちがへた。

佐山は大概隔日毎に登つてくる。まるでたおりの梭のやうだと川島は笑つた。夜になるときつと機嫌をきゝに顔を出すので、時々呼び入れて夜長のつれづれに興を添へた。一枚看板の印半纏が汗くさく粗悪煙草の惡臭のするのには少々閉口だつたがウキスキーの一盞に酔つぱらつて我亦紅のやうな色になつたり、たこだらけ

の掌へあけてもらつた甘納豆などを一粒々々口へ運び乍ら、眼を丸くして事毎に驚歎する。年は三十六で、家には子供が六人もあると云つてゐた。二人は佐山の口を通して僅に下界の出来ごとを知るばかりだつた。

夜な―十二時過ぎに和子は湯殿へ下りてゆく。薄暗い箱ランプが一個、高い場所を終夜今にも消えなんとしてまたゝいてゐる。六疊ばかりもある廣い湯槽の隅々には、湯煙立ちこめて朧々。あふるゝ湯口の音ばかりしやらゝ、燈影の落ちたのがちら―と、金糸のもつるゝやうにさゝゆるゝ。

するりと脱げば、薄らやみにもほの白き裸形。湯ぶねのふちに頭凭せて、ちつと目をつむつてひたる。

湯は無味無臭眞に玉の如き單純泉、湯槽の底などはぶく―と朽ちかけて、滑らかな青苔が生えてゐるけれども、その透明さはあんまり身體が透き徹るので恥かし位なのと、石鹼や白粉の液汁にしばしなりとも濁すことの心元なく、いつも入浴

は未明か深夜ときめてしまった。それに別に女湯と云つてないから、入つてゐても氣がおちつかぬ。いづどんな人間がやつて来るかわからない。出るも引くも出來ず泣きさうになつたことも二三度あつた。肌にも生じてゐるのだらうなどい、つまらぬ評判まで立てられるほど、和子は裸體に人目を恥ぢた。知らずや處女の矜持であると思つてゐる。

恍惚と想は飛ぶ。………深更の風呂場ばかりは自分の領地になるのであつた。煩はしい男の傍を放れて、純粹の自分にかへるのである。いろ／＼と物を思ふのである。遠く生別た人の上を偲ぶのである。一年前の今日此の頃も痛切に思ひ出された。

「何といふ悲しいことだらう、私は、私の心にうつるこの大自然をつかまへることが出來ない。萬有の意味をよむことが出來ない。私は何にも分らない。はてしない空も、高い山も、星の輝きも！ 只怖ろしい、さびしい。」

切り放しの大きい窓がそこだけ、黒布でもはめたやうに暗い。冷たい夜風が頻と吹き入る。若い處女の魂はよく物怯むをした。何とも知れぬ恐怖に、湯につかつてる身體中がぞつと縮毛立つこともあつた。

暴風雨の晩など、紫電が閃めく。ぐわーつ、びゅー、びゅー、びゅー、びゅー、と立木にうなる風、パラ／＼と板廂打つ雨の音。眞黒な山や杜は大きな魔のすむやうにも思はれて、何かの亡霊が出さうだ。おゝこはい。

星光りに微白い脱衣場に軽い長湯のつかれと、ほてつた頬をおさへて……………。

和子はそいろに口ずさんだ。

ゆあみして泉を出でし柔肌

ふるゝは惜しき人の世の衣

お向ふの中學生の五人づれは教科書なぞうんと持ち込んで來てあるが、コン／＼と小やかましく大正琴を叩いたり、朝起きるから就寝まで一高の寮歌ばかり歌つて

ゐる。中にも「戦はむかな時機至る、戦はむかな時機至る。」それが口ぐせなのでいつか「戦はむかな」といふのがそのニツクチームになつて了つた。最年少が十七で年長者が十九とやらかいた。感心に一同始終袴をつけてゐる。浴室へ行く間も取つたことがない。年中食事とお菓子の話ばかりしてゐる、女のやうに甘へたのや、老人のやうにしやがれたのや、梅干でも頬ばつたやうな含み聲のや、五人五色の聲を出すのが面白かつた。

一室おいての隣室には第一高等學校の生徒が二人ゐる。この人たちもよく察歌をうたふ。流石は向陵仕込だけあつて何とも云へぬ——居ても立つてもゐられぬほど魂を引きむしる、男らしい美しい聲である。始めての晩など和子が惚れぐと聞き惚れて、どんな人かとわざぐ覗きに行つた位だつた。逢つて見ると些少幻滅の感じがするけれども。和子達とは時々いつしよになつてトランプをやつた。和子はいつもツーランジャックで持ち切りなのでみんなに笑はれた。一人は度の強い近眼鏡

をかけてゐた。二人とも獨乙語の三部にゐると云つた。しかし双方とも名乗合もしなければ、住所も知らぬ。また知る必要もなかつた。かげでは二人を區別するため「おでん君」「蜜豆さん」と呼んでゐた。それが好物だときいたからである。

この二人は先日錦ヶ嶽へ登りかけて、途中あの連日の降雨に出逢ひ赤澤小屋に降り込められて、終に歸途が危険にさへ瀕して來たのでやむなく引返したのだと残念がつてゐた。和子は憧れの眼を可愛く輝して、熱心に根ほり葉ほりした。徳本峠越えの苦しさが忘れられず、もう／＼登山癖なぞ眞平だと内心怖氣立つてゐた彼女も、またそのやうな話をきくにつけ、野心勃勃と頭を持ち上げておさへ切れなくなつた。

けれども上高地へすら女の來てゐることは人目をそばだゝしむるに足りるのであつた。まして峻険な山々を跋涉するなど、云ふことは、——ウエストンと云ふ横濱の英國宣教師——日本アルプスをひらいたのはこの人であつた、——の夫人が錦ヶ

獄への先鞭だけはつけられたさうであるけれども、日本婦人の足跡はまだ何處にも印されてなかつた。

「一つわたしは卒先して、立派に巾着界のレコードをつくつてやるわ。」
さういふ和子の風にも得堪えぬやうな風姿は、川島が幾度宿の老主人に相談してみても、何しろ前例のないことだからと徒らに首を傾げて危ぶませるばかりであつた。

(一三)

穂高明神ヶ嶽の山麓宮川の池畔には、嘉門治といふ本名よりも山の「ぬし」で通つた一名物爺さんが住んでゐた。その小屋を訪ふとある日和子達は早めに夕飯す

ませて出かけた。

歸途の用心にと提灯ぶら下げて、高々とドララの裾を端折った川島を先に立て、大正の南郷と辨天小僧のやうだなど、笑ひ乍ら二人は森林中の道を行つた。途中鎗ヶ嶽からの登山歸りだと云ふ十人ばかりの一行に逢つた。和子は地面をみつめ乍らすれちがつた。その後から顔馴染の中谷と云ふ若い人夫が、荷を背負つて上つて來た。

「後で迎ひに來てくれ。」

と川島は云つた。

一里の道程は近かつた。例の馬小屋の傍から左のヤブの中へ分け入るのであつたまもなく河原へ出た。

「オ、ウイ、オ、オイー 嘉門治さあん——」

川島は盤膝張り上げて叫んだ。もし出て來たら和子を背負つて貰つて、川を渡ら

うと云ふのである。

いくら立ちつくしてゐても人の氣配はしなかつた。和子はぢれつたくなつた。

「ぢや待つてたまへ、僕、先へ行つてお爺さんを探して来るから。」

「渡りませうよ、かまひませんわ。」

とはだしになつて、下駄をつまんで川島の後に從いて入つた。

きいてはゐたがその冷たさは言語に絶して、想像も及ばなかつた。宛然針の鋭氣に刺し立てられる様で、一時は川の中央でどうしやうかと思つたが、水勢の激しさはそんな餘裕を與へず否應なしに對岸によろめき上る。膝から下は紅のやうに染まつてゐた。が、四邊には小屋らしいものも見えなかつた。どつちへ行けばいいのかわからなかつた。

川島はまた

「オ、ウイ、嘉門治さあん。——」

をどなつた。

と、

「オ、ーイー」

と老人らしくもない、清く優しい返辭が聞えて、やがてガサ／＼と熊笹をおしわけて、ひよつこり眼の前に現はれたのは、思ひきや漆黒の美髯、凛々しい眼鏡をかけた、腰にびくを下げ釣竿を持つて、カーキ色の獵服も、その半ズボンもうボロ／＼に破れて了つてゐたが、人品いやしからぬ四十前後の紳士であつた。意外だつたので二人は一寸照れた。

「やつぱり婦人の方でしたね。實は先刻から見てもましたが、川をお越しの様子があまり勇しいので、とても女性とは思はれなかつたですよ。けれど帶らしい幅のひろいものをして居られるし、頭の工合がどうも………いつたい何者か知らん不思議な人間だと一心に眺めてゐたのですよ。」

三人は聲を合せて笑つた。

この紳士に導かれて小屋の方へ向つた。和子達の渡つた場所を通路ではないのであつた。今少し上手に道があつたのだと紳士は教へた。この紳士は毎年暑中休暇を嘉門治の小屋に来て過すのださうで、はじめて上高地へ足を踏み入れてから十三年にもなると云つた。さうして今日はたつたいま鎗から歸つたばかりだと云ふ話の様子で先刻の連中と同行であつたことがわかつた。

丁度小屋の前で「ぬし」なる老人に行き逢つた。矢張り釣竿をかたげ魚籠を下げて、池から歸つて來たところだつた。來意をきくと莞爾々々して戸をあけて爐端に請じやうとしたが、暮れぬうち池を見て來たいと云ふと、それもさうぢやと再び引返して案内してくれた。

獵と漁との天才で、幾歳の時からかもう五十年もこの山中にこもつてゐると云ふ老人は、少なくとも七十にあまるのであらうけれど、なほ饒饒壯者也遠く及ばず、

人跡絶て萬象積雪に埋もれる嚴冬となつても只一人、小屋に籠城して過すのだときく。紺の股引筒袖の上に暖かさうな毛皮の袖無しを着、笑ふと服の細い、口の耳まで裂けたやうな、憎氣はないがビリケンそつくりの顔立をしてゐた。

深い笹原の路は間もなくつきて、突き當りに小さな祠と丹塗の華表があつた。これが穂高大明神と名だけはいかめしく呼ばれてゐた。

祠の裏は大きな池になつてゐて、池の向側はすぐ山で、重くらしい暗褐色の若壁がすつくと眼界をさへぎつてゐるのを、かうまざくと近くで仰ぐと今にもものしかゝられさうな氣がする。冷たさうに透き徹つた水のいろは翡翠の羽によく似てゐた。老人はガサ／＼と熊笹をおしわけて、踏めばじく／＼水の出る朽葉の路を更に二の池へ導いた。和子はたゞもうだまつて目をあげて眺めるばかりであつた。

池中には幾つかの中島も浮いてゐた。老人の乗つて釣るといふ筏も汀の水草の中に漕ぎ寄せられてあつた。樹木も繁つてゐた。捨石のさま／＼、岩石の配置、池の

邊にはわざとの作意を以つてされたやうな、心憎いほどの取合せて見事な庭園を形づくつてゐた。茶人がよろこびさうである、小細工だといやしむ築山術などもやつぱりかうした自然の技巧にもとづいたものかと、つく／＼感心させられて了つた。丁度日暮時の、奇しいまでの静けさ。眞青な池の面には漣も起らず、身も心も消え入るやうな寂寞たる境地である。引き入れられたやうに和子はぶる／＼と身ぶるひした。

小屋の内では先刻の紳士が爐に火を焚いて待つてゐた。小屋と路との間には可なりな深い流れがあつて、その危げな一本橋を和子は下駄履きのまゝ、上手に渡つたので老人にはめられた。すゝめられるまゝに二人は上り込むと、

「けふはお客様への御馳走に一つランプをつけませう。」

と云つて紳士は笑ひ乍ら、くすぶつた三分心の釣ランプを持ち出して吊した。

「この爺さんはランプといふものを非常に恐がつてましてね、手をつけたことがな

いんですよ。え、老人一人の時は焚火の明りで澤山なんです。よく／＼の時は蠟燭を用ゐますしね、は／＼／＼／＼。

ぼんやりと照し出された屋内は、脂と煤で名残なく黒檀造りのやうに光つてゐた。無論一方口で窓もなければ天井もなく疊もなく、一隅の棚のやうな場所に布団や家財が露出のまゝ積んである。爐は大きくて一間あまりもあつた。爐邊にだけ蓆が四五枚敷かれて、夏ながら太い丸太はとろ／＼とその灰が雪のやうに降りかゝる。川島はかねて用意のウキスキーの一瓶を贈つた。

酒類は一番の好物で、嫌ひなのは女と貰ちやと老人は呵々大笑した。紳士も笑つた。川島も笑つた。和子はひとり妙な顔してゐた。

雑談に花が咲いて乞はるゝまゝに老人は、熊の頭蓋骨の眞黒にくすぶつたのなど取出して見せた。それは見事に黒光りして、おちくぼんだ眼窩をクワツとみひらいてゐた。和子は華車な指先を輪にしてはちくとコン／＼と鳴つた。雪中の熊狩の話

なごも出た。老人はウエストン氏から贈られた最新式の獵銃なども持つてゐるけれど、矢張り昔から手馴れた種が島の方が手頃の得物なのださうで、若い時分に熊と掴み合ひまでしたと云ふ。打とめた数は六十頭以上に上るさうである。

「骨のソツプがうまいでな。」

と老人の云つたとき、その木彫の面の様な唇からソツプなんて云ふ言葉の出たのが不思議だつた。が、日本アルプスの名と共に日本人より外國人の間に古くから廣く知られてゐる山の元老だと思ふと、一種の尊敬の念が加はつて和子は眞摯な態度をくづさなかつた。

「熊と云へばつい先日にも奴さん、明神の池の傍まで出て來ましてね。」

「まあ、御覽なさいましたか。」

「否、正體は目には入りませんでしたかね、たゞ時々ビシリ、ビシツつて枝を折るやうな音がしてたんですよ。氣にもとめませんでしたでしたが後で老人に話すと、それ

は熊が櫻實を食べに來たんだと云ふんですもの、少々恐くなつちまひましてな。

それからはあんまりその方面へは近づがないやうにしてゐますよ。」

上高地名物の岩魚はおもに高瀬川の溪谷だの明神の池などで釣るのであつた。その焼干しが梁から釣るした籠の中に一杯たくはへられてあつた。

「僕ももう七百尾から釣りました。」

と紳士はうれしそうに含笑んだ。

「いゝお土産でございますわね。」

「餘り美味もないもんですけれどね……………」

「さうして毎日／＼釣魚ばかりなすつてゐらして……………。お飽きになりはしませんの。」

「倦きませんね、ちつとも。毎年歸る時は實につらいですよ。あの峠の頂上から此方を見返りますとね、悲しくて僕ア泣きます。」

この紳士は感情家だと思えて、まづたくその聲が情に迫つて亂れてゐたのに和子は驚かされた。老人は紳士のことを先生、先生と呼んでゐた。戸外は漆のやうな闇となつて、雨さへポツリ／＼落ちて來た。

やがて紳士は自分の魚籠から八寸あまりのまだびちびちしてゐる岩魚を掴み出して、ナイフで腹を裂くとその胎卵をつるりと食べて了つた。和子は思はず聲を立てた。さうして鹽にまぶして太い竹串につぶつぶと刺されたのが幾本か次々と灰の中に植られた。老人は小さな鐵鍋に醬油を注いで自在竹にかけ、懷中から取出した紙包を大切さうにひらいて、味の素か何かのやうなものを一掴み入れたので、

『それは何です。』

と川島が訊くと、

『けふ養老館でちつとばか砂糖を買つて來たでね、お客様への御馳走ぢや。』
から／＼と笑つて和子の度磨を抜いた。

大鍋の蓋をとると、真白の餛飩が澤山うでゝあつた。それを屋外の流れでさらして來ると、老人は松明に火をうつし、蓑を着鍋を下げて出て行つた。

岩魚が焼けた。

「一つ如何です。美味ですよ、話のたねにね。」

大きなのを兩手に持たせられて和子は困つた。

「かうするのです。」

と紳士は笑つて、串のまゝ横嚙りにした。骨から頭までむしやゝと飛べて了つた川島も早速それにならつた。

老人は一同に餛飩を盛てくれた。が、生醬油を煮つめたようなその汁は我慢にも口の曲るほど辛かつた。和子は堪りかねて水を一杯乞ふと、紳士はすぐと小桶を取つてくれた。それには汲みたての清水が満たされてゐたけれども、柄杓もなければ茶碗もない。

「可です、直接にお上んなさい。小屋の生活はさうした生活なんですよ。」
「だって……………」

ためらひ乍らも果しがないので、顔のかくれるほどなその小桶のふちに口つけてぐつと飲むと、冷たさが齒に泌み渡つた。かうして順々に飲みまはした。香の物は樽ごと座中に持ち出して、自由に箸を突込んで食べるのだつた。それは老人が前の畑に手造りの菜を鹽漬けにしたもので脆美な味を持つてゐた。

何といふ素朴な單純な生活であらう、何んにいらない。ほんとうに何んにも——
たゞ火と水と鹽と小屋さへあれば……………神さまのやうだ。物價が高いの安いの生活難だの就職難だのと青い顔して暗いでる都人士に、この有様を一目見せてやりた
いと思つた。なまじひな貧乏をする位なら自分も深くかうした山中にかくれて了
ひたいと思つた。

この原始的な食事のすんだ頃から、雨は沛然と覆へすやうに降りそゞぎ、一時は

狭い小屋の内の話聲も聞取れぬほどだった。紳士は昨夜赤澤小屋の野營で大雨に逢つて困つた話をしはじめたので、和子は自分にも鎗ヶ岳へ登れるかどうかと云ふことを訊ねた。老人は燃えさしの薪をつくらひ乍ら煙を避けるやうに頭を傾けて、

「さうさノウ——まあ人が二日なら三日も掛るつもりでな、無理をせずとやつて見るかな。なアに大したことはねえで！……」

「不可能なことぢやありませんよ。貴女のお元氣なら……」
紳士も優しく云ひ添へた。和子は満足さうに嬌差を含んだが、

「穂高と鎗ではどつちが易しいんでしやう。」

「穂高は嶮山ぢやでな。」

言下に答へる。なほ二人などは代る／＼登山についての心得や山上の様子を話してくれた。

太古のやうな深山の孤屋の爐邊の圍樂はかくして靜に更けて行つた。眞黒な暗い

大空にはいつのまにやら三つ四つ雨雲の絶間から青い星が煌き初めて。

(一四)

嘉門治老人の助言を得てから和子は急に氣が強くなり、いよいよ錦ヶ岳登攀を決行することにした。案内者には氣心の知れた佐山と、せめてもう一人強力をつれて行つたらと宿の主人などはすゝめたけれど、

「人と同じやうにして行きたい。わたしばかりが特別の準備で登つたなど、云はれては疳癪の蟲が承知しない。行かれなかつたら途中で引返すまで。總て然らずんば無、だわ。生ぬるつこい中庸は厭!!」
厭と云ひ出したら聞く女ではなかつた。川島もあらがひかねてその意に任した。

當日は婦人の初登山と云ふので、どんな様子かとおさへかぬる好奇の眼を輝かせてみんな視きに來たが、和子の化粧は相變らず濃く長い袂を朝風にひら／＼させ乍ら、金剛杖を恥しさに持ち扱つてゐる様は、効々しいより傷々しかった。佐山は二日分の食料品や防寒の用意一切を背よりも高く脊負ひ上げて、もう門口に出て待つてゐた。川島は糸立を巻いて肩がけにして、洋服脚絆に身を固め、手頃な白樫の枝をステッキ代りにしてゐた。

まだ朝靄深く冷氣身に泌み、旭に映する川の面は白光爛々、眩ゆさに口も向けられず。一天磨ぎ出した様な好天氣、恰も春の曙に似て、單衣一枚の肌寒いけれど秋の寥々さではない。

途中で一行は嘉門治郎さんに行き逢つた。肩と腰には例の釣竿と魚籠があつた。「お出掛か子、ホーそれやえらいこつて――まあしつかりやつてくらつし。顔中皺にしてにこつき乍ら更に佐山をかへりみては、

「御苦勞さんちやノウ。」

と云ふ。和子はうれしさうに頭を下げた。大變幸先がいゝやうに思はれた。

河童橋を渡つて養老館の前にさしかゝると、

「これやお早えい。」

「お歸途かね。」

など、言葉をかけ合ふ。

「いんや、鎗ちや。」

と答へる佐山の語調にも誇らしさうな響があつた。するとみんな目を睨つて和子の後姿を見送つた。和子は躍るような步調で先登に立つたゐた。草鞋の足音が苔に泌み入るやうにしとく。

道は馬小屋の傍から左の森林中に入る。晴やかな林であつた。白樺の幹は西洋蠟燭でも立てたやうに並んでゐた。馬よりもこの邊は牛の放牧場になつてゐるので、

あちこちの樹がぐれに白や赤や黒まだらの大きな圖體が隠見する。なまめかしい老鶯や元氣者の駒鳥が歌つてゐた。折々朗らかな時鳥の聲も聞えた。

一里あまりで林を出はづれると、一行の立つ斷崖の下は廣い河原で、その一部を水が眞青に輝き乍ら流れてゐた。和子は緊張しきつた、むしろ蒼いほどの唇に笑みも浮べず、沈痛な眸をして重なり合つた水上の山々を眺めた。前途の勇躍と不安とに淡く胸が震へた。

いつか路は河原へ下りる。和子が一番氣にかけてゐた川の渡渉はこれから始まるのであつた。案内者はざぶ／＼と踏ん込んで渡つて行つたが、向ふ岸へ荷をおいて今度は和子を背負ひに來た。細い手がしつかり佐山の頸にからむだ。足は水とすれ／＼の邊にあつた。

柔くて重いこの生きた荷物にともしれば佐山はよろ／＼となつた。和子も胸を壓迫されるのが苦しくてならぬし、今にも二人ともおし流されさうで、なか／＼脊中

に安閑^{あんかん}としては居^ゐられなかつた。

次の川岸^{かわぎし}にさしかゝつた時和子^{ときこ}は云^いつた。

「私は一人^{ひとり}でいゝ、自分で渡^{わた}る。人の厄介^{やくがい}になぞなつては自慢^{じまん}にならない。お願いだからかまはずにおいて貰^{もら}ひたいわ。」

それは非常^{ひじょう}に疲勞^{ひらう}を増^ます原^{もと}であると佐山^{さやま}も二度^どはとめたけれども、さしては満^{まん}らはなかつた。彼^{かれ}にとつては重荷^{おもな}の半分^{はんぶん}が減^へるわけであるから。川島^{かわしま}も半ば不安^{ふあん}なやうな半ば賞讃^{しょうさん}するやうな面貌^{めいよう}で、水^{みづ}に入る女^{をんな}の仕度^{しど}を待^{まち}つた。袂^{たもと}は結^{むす}んで肩^{かた}に掛け^かけ、高^{たか}くかゝげた袴^{はかま}の下^{した}からは西洋婦人^{せいようふじん}の穿^きくやうな眞白^{ましろ}なブロースのレースの端^{はし}が見^みえる。さうして勢^{いきほひ}よく佐山^{さやま}の後^{あと}につゝいた。覺悟^{かくご}してゐた水^{みづ}の冷^{つめ}たさは越^こしのせい^{せい}かそれほどでもなかつたが、たゞいかに水勢^{すゐせい}が激^{げき}しいので、うつかりすると足^{あし}をとられる。見^みる／＼よろ／＼と三四尺^{しやうせき}はおし流^{なが}される。底^{そこ}の大石^{たいせき}もゆらめいた。その引力^{いんりよく}の恐^{おそ}ろしさに和子^{わこ}はや／＼舌^{した}を巻^まいた。

何處までもこの溪流につかず離れず沿つて行くので、巖石や山の根に阻まれては右岸から左岸、左岸から右岸へ幾回となく渡渉しなければならぬ。いちど和子は足を踏み込まして、ぼちやんと水中へうつぶせに両手を突いてしまった。あなやと馳せ寄らうとした兩人の手を借りるまでもなく起き上つたものゝ、

「濡れぬ先こそ露をもだわ、もうかうなれば平氣だわ。」

苦笑ひしながら水震ひする様を見て、白猫の浴みしたるが如しと川島は冷かした事實川よりも山よりも和子は積の石に歩きなやんだ。濡れた着衣がびつたり股にまとひついて、喉の垂れる袴の裾がやたらと重たく、強い日光に晒されて身體中からは湯氣がポカ／＼立つのであつた。感覺まで氷り切つて了つたやうな足は、冷たい水にひたすのが却つて和やかに心地よかつた。

とある河原には楊柳の大樹が多かつた。ふら／＼と雪片のやうなものがおびたくしく空中に亂れるのは、その實が散るのであつた。向ふ岸にちらりと人の姿を見出

したとき、和子の胸は躍るほどうれしかった。

「下山の人だらうか。」

と訊くと、

「いんや、ちがふ、今朝先發した二階の中學生の客人の組でゝもあるづら。」

「あら、あの「戦」さん達の御連中も今日なの!! まあ、さう、些つとも知らなかつた。それや痛快ね。」

元氣が十倍したのであつた。すぐにも追ひつけやうと氣ばかりあせつたが、間もなく見失つて了つた。

「氣をつけなさんせ、こんどの川は一番深い。」

佐山がふり返つて云つた。熱心に下ばかり向いて歩いてゐた和子はふと顔をあげると、對岸に三人づれでヘルメット帽を冠つたり、登山用の大きな塵除眼鏡をかけたりした一行が、中の一人は矢張り川で轉んだのであらう、全身ぶよ濡れになつて

少し蒼ざめた顔をして石に凭りかゝつたまゝ茫然と此岸を見てゐた。この觀客を前にしては川島は流石にためらつたが、和子はかまはず飛び込んだ。水深は腰切まであつた。颯と水中に紫の彩が亂れる。飽氣にとられたやうな人達を後に残して少し行くと「磯はむかな」の連中が樹蔭で辨當をつかつてゐた。

両手をかけて岩にも越つた。石にも上つた。深い淵も飛び越えた。幅五寸とはない懸崖の路を雜木の枝に身を釣つて進まねばならぬやうな場所もあつた。眞下には絶ず水流が鳴つてゐた。けれども和子は少しも逡巡しなかつた。あの高い荷を脊負つたまゝの案内者が平氣で先に立つてゆくうちは、單身の自分の續き得られない筈はないと思つてゐるので。

徑らしいものが水を離れて細い登りになつてゐた。一名林叢と稱する灌木や熊笹等の生ひしげる中を、ざわざわがさゝ猛烈な葉ざはりの音立てゝつゝ行くのである。あるところでは大木が倒れて道を横切つてゐた。

「わしらもこゝらで飯にしましすか。」

佐山は荷を下した。和子は遊動圓木でも渡るやうに面白がつて、する／＼とその幹を傳つて枝を交した梢の方へ行つて腰をかけた。ぶら下げた兩足の下は青葉に埋もれた崖だつた。

辨常は相變らずの鹽握飯に、しらす干しの佃煮が添へてあつた。佐山の辨當箱は、きりだめの様な長方形の二重ねで、一個が空くと一方にいれこになるのだつた。高い場所なので飲料水もなしですませたが、しばらくすると中學生達が追ひ越して行つた。續いてヘルメット帽の一行も、倒木を乗り越えて進んで行つた。和子ももう我慢してはゐられなかつた。立つて行途を望む晴やかな眉に縁の影がさした。

赤澤はもう近かつた。川島は今までのステッキが華車過ぎると云つて、屈竟なのと取代へる爲め佐山から山刀を借りて、伐りたての生々しい小枝や青葉を拂つてゐた。和子は元氣よく急な坂を一氣に駆け上つた。

その邊のすべては荒涼たる赤褐色を帯びてゐた。赤い肌にはもう一本の木も生へてはゐなかつた。赤い岩山も怪偉なものであつた。澤の中の石まで赤かつた。まづたく赤澤の名に背かなかつた。赤い岩石は水を眞白に噴き出してゐた。

赤澤の小屋といふのは山麓にある窟のことで、比較的間口の廣い奥行の淺い、丁度天然の棚の様にゑぐれた、成る稱十人や二十人の雨露はしのげさうに見えたが、焚火の跡や空罐や古草鞋や紙屑が汚ならしく散らばつてゐる外、何一つ人工の手入はほどこしてなかつた、先刻のヘルメット帽の一行と、中學生連についてゐた人夫の一人がこゝに居残つてゐた。學生連は今日の中に絶嶺を極めて、赤澤小屋まで引返す豫定であると云ふ。

路はまた流れの中に入つた。案内者の草鞋の痕の濡れたのを唯一の便りにして、澤の石から石へ飛ぶのであつた。危険に馴れた和子はもう平氣で、お轉婆などといふ境地は疾に超越してゐた。だん／＼追つてくる雨側の山腹には、すばらしい雪露

がおそろしい崖をなしてゐて、その洞の下からチヨロ／＼と融けて流れ出す水が梓川の水源なのであつた。

鈴澤の流れがつきると雪田の上りが始まつてゐた。盛夏の雪の上を歩くと云ふことが、和子には堪えがたいよろこびとあこがれだつた。きら／＼と煌き渡りつゝ這ひ上るその白い傾斜面は、風の工合で巧妙な波紋が印されてゐた。雪とは云へど堅く凍つてゐるので、それを僅の足が／＼りとして踏んでゆくと、おきに爪先の干切れゑるやうな感じが草鞋や靴下を透して、頭のでつべんにまで沁みて來た。さうした邊に山神愛惜の珍草名花が簇々と群り咲いてゐた。まるで岩にへばりついたやうに丈が低く、芝に似た青草に交つて桃色や白や黄や紫や、それがまた極めて清淨な強い光輝と色彩を放つてゐる。その高潔さはいつそ冷たさうで、生暖い現し身の人間の手になど觸れるのは惜しい。けれども和子はそんな石の質や植物の種類などに氣をとられるほどの餘裕はなかつた。もつと昂奮してゐた。一步步々力をこめてたど

った。

「坊主はこゝちやがね。」

「へえー」

今夜の宿といふ小屋の内を和子はのぞいてみた。大きな石を積んでこしらへた岩室で、廣さはおしつめたら十人近くは這入れさうに見えた。狹い入口には白骨の様な燃えさしの焚物や、汚れたまゝの鐵鍋や茶碗が轉がつてゐる。四邊はもう偃松の低い緑色のほか、磊々たる礫の様な岩石の強勾配の堆積の上には土らしいものも蔽ふてはゐない。

ほら、彼處を「戦はんかな」が行く、と指呼された方に踵を凝らすと、成る程、鼠色に見える制服姿が小指ほどの大きさで、うごめくやうに登つて行く。鎖ヶ岳の名によつて來るところの斷崖鉾の如き鉾は、行途に突兀とコバルトの天空を突いてゐる。

嘉門治老人は、

「獵師まで行けれやなほえ、が、獵師にぬ焚物はなし水はなし、小屋も狭いで……
……まあ坊主の方が安心ぢやな、赤澤に泊ると翌日がエラいで、ちつと無理しても
その日の中に坊主までは是非行かつしやい。」

とすゝめてくれたのだつた。その坊主までもう來てしまつた。まだ太陽は青空に
高く輝いてゐる。

「これからどうするの。」

と和子はきよとんとした顔をして二人を見た。

「さうぢやノウ——。」

と佐山に川島を見た。

「いつそ今一奮發のしたらどうだ！ 駄目かい。」

「時間はあるがノウ、——それに天氣も申分なしぢや。山にこんな快晴は珍しい。」

獨りごとのやうに云ふ。

「なら行かうぢやないの、ぐづ／＼してゐるうちにおそくなる。」

和子はあの學生達にどうしても負たくなかつた。そんな問答してゐる間もまだるこしく、履きつぶした草鞋を新しいのに替えさせてもらひ乍ら、内心の危機や不安の念はおしかくして勇み立つた。小さな心臓はコト／＼とすでに破れさうにはづむであたが、自分の脆弱な肉體が、いかほどまで自然の慘虐に堪え得るかと云ふ事實にも興味を持つたのであつた。

しかし佐山がこゝに荷をおいて、身輕になつてのそり／＼先に立つので大變心丈夫であつた。踏んでゆく足元の角石が、一步毎に瓦羅々々とかくづれさうなのは怖くてならぬ。雪田も幾つか越えた假松帯に住む雷鳥は人を見てもさして逃げやうともせぬ。和子は雪の束ねたのをハンカチに包んで、食ひ乍ら歩いた。片手はしつかり金剛杖にすがりついて！ 疲勞てくると、反比例に咽喉の灼けることもおびたゝし

かつた。狂氣になりさうだ、と和子は思った。仁丹を嚼んでも唾液がないので呑みこめない。冷たい汗がほろりと髪かみの根から散る。本當に涙交りの、血を絞るやうな汗であつた。

その邊はまたお花畑で、雪溪と岩石の間々を、幽幻な高山植物が日も影に咲き綴つてゐたけれど、そんなもの目に入るところではなく、のんきらしく蝶々などの飛んでゐるのも癪しやくにさはつた。高原の蝶々は妙に干からびた、枯葉のやうなのが多かつた。ヘルメット帽の一行はともすれば、和子達に後れ勝であつた。追ひ抜かれまいと和子は氣を張り、女に負けてはと先方も氣競ひ立つて双方に傍目もふらなかつた。

餘りはいち行かぬの上を見ると脈になるから、地上ばかり見つめて歩く、勢ひ身體を屈めて海老の様になる。それでもエツチラオツチラ、いつのことかと思はれた鎗の肩へと辿りついた。

眺望は眼下に豁然とひらけて、川島は躍り上らんばかりの歡喜であつた。何がそんなにうれしいんだらう、いゝ年をしてと和子は可笑しかつた。そのくせ自分は少々眼がくらみかゝつてゐたので、一天たゝ晦あく見えたのである。金剛杖も何もそこへ投り出してどつかり横座りしたまゝ、もうく二度とこんなところへ来るものか、誰が爲にかゝる辛酸をする、ばからしい、とてこでも動かなくなつて了つた。が、傍の岩陰には例の中學生の一行の杖たの雜糞たのがおいてあつた。さうして盛んに天邊で「戦はむかな」を唱つてゐる。姿は見えぬが聲が響いて来る。「おゝうい」と川島は風に吹き散らされ乍ら呼びかけると、

「オ、ウイ！」

と、一齊に答へる。それが「早く登つて来いよう」と云ふやうにも聞える。和子はむくくと頸をもたげた。

「もう一息ね。さあ、」

「大丈夫かね、たあちやん。」

川島は今更のやうに掛念に堪へぬらしく鎗の穂を見上げた眼を女にうつした。和子は同じ様に振り仰ぎつゝ、頷きを返辭に代へた。

やかて活潑に登攀はじめた。高さは二百尺あまり、直三角形の一角に沿ふた――無論通路らしいものなどのあるのではない。岩角に取着きつゝ、壁の凹線を攀ちる。

這ふと云ふほど身體を横にする餘地はない、殆ど垂直に近い峻しさであるから。機械體操でもする様な恰好でぶら下る。過つて踏み崩す岩塊は彈丸の様に止度なく落下する。

かくてこの峻峻突破時間、二十三分かゝつてやつと頂上へ吐き出された。男子としてもまづ中の部であると佐山は慰めた。和子はよろめくやうにしてその絶壁の絶巔に立つた。さうして先着の中學生連と顔見合せるや、寂しい笑みを僅に洩らしたその時の顔色と云つたら生きた者とも思はれぬまで、疲勞と恐怖と限りない満足と

誇りを蒼白の唇邊に浮べて、亂れ亂るゝ髪の毛を吹きなびかせつゝ、凄、また慘!!
 しばしは一同語をのんで聲もなく、そこに有合ふ石の上に凭れかゝると、頭腦が茫
 となつてしまつた。一萬四百餘尺の高峰、一つには空氣が稀薄の故かも知れぬ。烈
 しい睡魔におそはれて、思はすうとくと夢路に入つた。

大膽な人だ、とみんな笑つた。その實和子はそれどころではなく、もう見得も得
 もなく眠かつた。たゞ中學生連の元氣が羨しかつた。流石は男見だ、やつぱりちが
 ふ、女の身はかよはいものと、つくゞ悲觀せずには居られなかつた。

彼處此處と指呼されて物倦い眼をやつと擧げた。川島は夢中になつて、あれが白
 山、これが立山と説いてきかせた。和子はどれがどれだか見分けがつかなかつたけ
 れども、たゞ頷いてゐた。脊面の脚下はまるで摺鉢のやうでその展望は實に驚歎す
 べき鮮かさであつた。雄大と云はうか、混亂と云はうか、美觀と云はうか、紫に赤に
 青に黒に紺に茶に、遠近それゝの特色を持つた山の肌の色彩ばかりでも意想外な

観物であつた。和子はその眞正中へ身を躍らして飛び下りて見たいやうな氣がむら／＼とした。これは和子の病癖であつた。だから自分でも用心して、高い場所へ上ると決して端の方へは出なかつた。石にかちりついて、——その石さへも今にもごろ／＼轉げ出しさうな氣がして恐かつた。ちつと見つめてゐる中に、イブセンの所謂「自然の復讐」と云ふ言葉を思ひ出して、何となく肩先寒く覺えた。まつたく山靈といふものはあるかと疑はれる。そして人間の手に神秘の鍵を握らるゝのを厭ふて、相いましてゐるやうにも見える。さしづめ自分は第一の憎まれ役であらう、「女にさへ登れた」と云ふと鎗の資格は、この後大へん下落することゝなる故、などと思ひつゝけた。表側の方に眼を轉ずると、毎日上高地から仰いでゐる燒嶽などは、あはれなほど貧弱なものに見えた。その噴煙も香爐から立ちのぼる位にしか感じられなかつた。自分達の通つて來た道にはそれでも一々見覚えがあつた。坊主小屋はあすこちや、と佐山が教へた。赤澤の山も赤い一つの岩にしか見られなかつた。

偉大な穂高の三山に鎗とは遠く尾根つゞきになつてゐる。この山容ばかりは鎗の穂の威嚴にも蹴落されなかつた。その他常念、蝶嶽、乗鞍、御岳、笠岳、蓮華、藥師赤牛、鷲羽、などといふ山系が幾重にも重疊して取巻いてゐるのである。

すこしおかれてヘルメット組の一行も登つて來た。ツボン下も何もズタ／＼に破れてゐる人がある。大分苦しうだと和子は大に同情した。氣息奄々たる體で唇の色まで變つてゐる。

頂上は狭いので、中學生連は別れをつげて、一足先に出發した。取殘されて何だか心細くなつた。水を含んだ様な風が吹く。和子はいつか胸震ひか出てゐた。時計は五時に近い。川島はノートを引つ裂いた紙片に記名して宮に納めた。何様かは知らぬ。片手で提げられさうな小さな祠が東の端に安置してあるのである。

誰も登る時は一生懸命で、歸途のことなんぞ考へてはゐない。またそんな取越苦勞をしたら、一步も進めるものではなかつた。たゞ刹那々々を無事に切り抜けさへ

すればの一心でおし通すが、いよく下口に立つて見ると今更のやうに足許が慄ふ
眼下を見ちや不可々と川島が聲をからしたが、見たいほどの好奇心も起らない。
こはいので和子はおとなしく背向きになつて下りる。すると足場かわからない。岩
壁に取絶つた手を外したら最後、真逆様のような場所もある。僅に片足の爪先をさ
へへた凹處に、全身の重量をよせかけねばならぬ場合もある。指環が傷だらけにな
つてしまつたり、袴の裾かやたらとそこらへ引かゝつたり、ほんの氣長に一步步々
探るやうにして四十五分後に、やつとこのデレンマから脱し得た時には、心弱くも
和子の眼には涙が輝いた。命びろひをした様だと云。双肩の責任を下して川島も佐
山も太息を吐いて額の冷汗をぬぐつた。

(一五)

跛足引き／坊主小屋へ戻り着いたのはもう七時近くであつた。山の日暮れやすかつた。薄暮の幕が四邊を包んで、汗に濡れた着衣が脊中でひや／＼とする。夕餉の支度をすべく佐山は一人先へ走り歸つたゐたので、すでに石のかまごに偃松の枝折りくべつゝ濃い鉛色の煙を低くまつはらせてゐる。

和子はすつかり疲れ切つてゐた。目を開いてゐる氣力もなかつた。石に凭れてうと／＼と夢心地である。川島は林檎をむいてくれた。林檎は甘く冷たかつた。回生劑だとウキスキーを少し飲まされる。

その内に鍋飯も炊け味噌汁も出来、僅に焚火の光りで箸をとる。が、和子は胸が

むか／＼して食物なんぞは何にも欲しくなかつた。たい安らかな睡眠のみが欲しかつた。耳元で兩人の語り合ふ高聲や、美味々々と汁を代へ、飯を噛む音のみ、遠い／＼世界の出来事のやうにきいてゐた。

ゆり起されてハツと目を開くと、もう真暗で星が三つ四つ物凄いいほご光つて見えた。小屋の内へ入るのだと云はれて立ち上つても、足が重くて／＼動かなかつた。やつと奥の方へすり込むやうにしたが、佐山は肝要な提灯と蠟燭を忘れて來たと云つて、マツチの光りでやう／＼用意を調へた。窟内には假松の枝が一面に敷きつめてあつた。それを程よくならした上に糸立を敷いて寝るのであつた。和子はチルの單衣を着衣の上から掻取のやうに羽織つて、なほ佐山の着てゐた印半纏を一枚貸して貰つて重ねた。すゐぶん可笑しな風姿であつたけれども笑ふどころではなかつた。實際過度の疲勞から來る睡眠と云ふものは前後不覺！　むしろ人事不省に陥つたといふ方が至當であつた。

ふと目を覺ますと、背にたつた一口噉つた味噌汁が胸につかへてゐて、吐きさうでたまらなかつた。草鞋を脱ぐと足から風を引くと云ふので濡れたのをそのまゝにしてゐた膝から下がしびれたやうに固くて、のばすこともちやめることも出来なかつた。懷中の懷爐ばかりがボカ／＼とあたゝかい。

起き返らうとすると石ころが、ごろ／＼と脊中にさはつて痛かつた。それでも無理に身をもたげやうとしても自由にならないので焦れて、よく／＼見ると、自分と川島とは一枚の糸立の上に一枚の毛布と桐油紙とを引張り合つて、さうして男の呼吸は嵐のやうで、火のやうに熱い息吹を頸筋に近々と吹きかけられてゐるのであつた。和子はびつくりした。

漸々意識がはつきりしてくるにつけて、この人寰を離れた岩窟の深更をどんなに恐ろしく感じたらう。氣味がわるいのではない、現實のおそろしみであつた。しみ／＼と自分の無謀が悔いもされた。こゝらでもしや二人の男に暴力を持つて向はれ

たらどうしやう、和子は懷中に深く秘めたナイフの柄を握りつめて、半睡のふりのまゝ息を凝らしてゐた。男は麻痺したやうに寢入つてゐたが、山の夜は長かつた。いつのまにか岩窟の一角が白み初めたのを發見して、かぎりなくよろこんだのは和子だつた。甦つたやうな氣がした。曉の寒氣は一入強く、桐油紙も髪を包んだベールも夜露に打たれてびつしよりだつた。古い軍人用の外套にすつぱり包まつて二人の足の方に眠つてゐた佐山は、起きて火を焚きはじめた。

「雨が降つてゐるでね。」

「何だか知らないけど煙いわ、佐山。狐も狸も居やしないのに、かういぶし立てられてはたまらない。」

煙は窟内に充滿した。風邪を引き込んだか咽が痛い。和子はあがらつぽさうな空咳を苦しげに咳いてゐた。川島は和子の袴の端に頭を埋めて、食事の仕度の出来るのを待つた無事に過せた昨夜がうれしかつたので、和子はそれをとがめなかつた。

やがて三人車座の中央に昨夜の残飯が鍋のまゝ持ち出された。和子は福神漬を力に、雪を溶かして湧かした白湯をかけてやつと一膳流し込んだ。男たちは氷豆腐をつかみこはして入れた熱い味噌汁を、山海の珍味にも勝ると舌鼓打つてゐた。なほ残つた飯は佐山の辨當箱につめられた。

きのふの高晴に笠の用意はなかつたので、和子は有合ふ紫めりんすの風呂敷で頬冠りをした。色が一際白く見えた。七段目の力彌のやうだと川島は笑つた。窓外の風は寒かつた。颯と糸立の端を吹き上げて、刃の様な氷雨が面にしぶく。ふり返つても鎗の頂きは濛々たる雲霧にかくれて見えなかつた。

白皚々たる雪田の上は杖もとまらずつる／＼三つて、和子は三四度も尻飽ついて掌をすりむいた。忽ちの間に後れて了つて、遙か下の方へ行く佐山の荷を負つた後姿は、醜くうごめく蟲か何かのやうに思はれた。

鎗澤險路のガラ／＼石は登りにもまして下りが危険、和子の歩行ははかどらなか

つた。最初の二三町はそんなでもなかつたが、だん／＼足が重くなつて、地からやつと五六寸しか持ち上らない。赤澤小屋まで前日二時間でのぼつた路を、四十分も餘計に費やしてついた。もう小屋の内には人影もなかつたが、昨夜中學生連とヘルメット組はこゝで泊つた筈である。まだ焚火の残りがとろ／＼と燃えてゐた。

佐山が先頭に棒もて打ち拂ひつゝ行くけれども、林叢中の露は雨にも勝つて……殊に糸立が引掛つたりして切角の雨具も何の役にも立たなかつた。

また川岸へ出る。寒いので今日は思ひ切つて水中へ踏み込むのが随分辛かつた。嵐と和子の顔が唇の色まで白くなる。冷たくはない、骨の髄まで込み徹るやうな疼痛を覺えるのである。

やつと裾からしたゝる雪の切れた時分にはまた次の川を渡る。弱りはてた足には濡れた着衣の重さをさばくことすらが一大努力であつた。おそい／＼とはげまされるのに腹を立て、拗て石の上にしよんぼりと佇めた姿が白鷺の様だつた。笑はうと

思つても泣聲が出て了ふ。かうなると足許も亂れ勝で、石角木の根にけつまづく度
ビリビリッと電撃狀の疼痛が腦髓に響くので、眉をしかめずには居られない。二重
に穿いた足袋も破れて、コッソ／＼と突く金剛杖の音が寂しい。

最後の川を渡り終へてから、磧に散亂してゐる枯木を拾ひあつめて來て焚火をし
た。雨中乍ら火は炎々と燃えて、和子は身體が焦げるやうに熱くなつた。濡れた着
衣もすつかり干いてしまつた。罐詰の口は山刀で上手に開けられた。

「よく洗つて詰めたでね。」

さう云譯し乍ら佐山は辨當箱の一個を渡さうとした。

「いやよ、鍋飯の残飯なんか豚や鶏の食べる物だわ。」

とキヤラメルをしやぶつて口をむぐ／＼させてゐる。

「玉川さんは些つと人間離れがしてゐなさるね。飯を食はねえでよく命がつなげる
と思ふだ。わしら鬼とも取組む氣だが、腹が空つちやから意久地はねえ……」

「實際だ、お菓子で三度々々の御飯がすむんだもの。たあちゃん胃袋の工合を解剖して見た。奇天烈、コッポ博士も蘇生つて飛んで来るかも知れないぜ。」

「人間の體力と云ふものは食量に正比例するものなのね。だから仕方がないわ、男の人達の強いのは、御飯を澤山食べるからなんですよ。」

憎まれ口ばかりきく。平素は寡言な和子だけれども、何故か川島に對してだけは理を非にでも云ひこめすには置かないのだつた。雄辯を以つて任ずる川島がいつも黙らせられて了つた。權高な減らず口の絶す自在に轉び出づる紅唇を佐山は奇蹟のやうに眺めてゐた。

いゝあんばいに雨もはれた。笑つたり怒つたりし乍ら一行は、柔らかな森の下草の踏心地が、かたい岩石や礫の爲めに灼熱感を起した足の疲労の大半を癒して了つた。

いつか馬小屋の近くにさしかゝると、

「おうい。」

と呼びかけて、道もない崖の雜木をおしわけ乍ら登つて來たのは、先日嘉門治の小屋で逢つた紳士であつた。相變らずの破洋服に草鞋ばきで、柄のついた手綱を頭上に冠つてゐる。

「いまお歸りですか、大へんお早いですね。如何でした、お出掛のことは昨日暮るんにきゝましたか……。」

「おかげさまで！」

と言葉すくなに和子は嫣然する。

「おう、それは。お手柄でしたな。婦人の身で鎗へ日着といふ點だけでも、レコードをつくるに足りますな、僕はまたあんまりお早いから、今日のこの天候で中途から何かと思ひました。それにまだくお元氣ですね。實におえらい!!」

あんまり賞讃られたのに、和子ははなじろんで、急に膝足を引くことをやめて了

つた。さうして一生懸命に正しい足並で歩いた。紳士は途中までつれたつた。さうして岩魚を釣るところを見せるとて、道々奔湍に釣竿をふりかざしつた。それは短かい三尺ばかりの釣糸の先に毛針のついたもので、浮もなければおもりもなく、絶す手に持つてあやなしてゐなければならなかつた。ちら／＼と銀の柳の葉の閃めくやうに魚は姿を見せるけれど、生憎針にはかゝらないので紳士はあせつて彼方の森の下だの此方の岩の蔭だのに二人を引きまはした。釣つた岩魚を肴に今夜は老人と養老館で一杯くむ筈になつてゐると笑つてゐたが、腰の魚籠はまだ空だつた。

そんな事に手間取つて、温泉場に歸りついたのは二時半であつた。飛び出して來た老主人の歡聲に迎へられて、どつかりと上り框に腰を下し乍ら見合した三人の顔それは「勝利の疲勞」の微笑であつた。靴下を脱ぎすてると和子の足には青豆の様な肉刺や、草鞋に食はれたあとが傷々しかつたけれども。

(一六)

和子は燒嶽から歸つて來た。

川島は階段の下口まで出迎へてゐた。そして室内へ入るや否や「待つてゐた。」と抱きすくめやうとした。和子は颯と惡感の全身に走るを覺えて一間あまり跳退いた。しかし男はよろこんで、下にもおかぬほど煩さくチャホヤして、靴下を手傳つて脱がせやうとする。脱つた袴を釘に引かけてくれる。汗を拭けとて手拭を取つてくれる。和子は失笑さすには居られなかつた。

「可愛いたあちやん、好きな好きなあちやん、戀しいたあちやん。よく歸つて來てくれた。逢ひたかつたよ、心配してゐたんだ。一人で出すんぢやなかつたと。」

何にも縫事はなかつたかい、案内者の奴隷者でもあつたら大變だと思つてね。」
 「そんな馬鹿な、少年でしたよ、荒唐會釋もなく足が早いで弱つて了つた。でも
 待つてくれなご、云ふのも癪だから、一緒になつて鹿の様に走つたの。ひどい路
 ねえ、滑つて、滑つて……。」

登山行の着物に定めて了つた縞モスのや、汗臭いの、緋と黒の非盤縞の伊達巻
 一つになつて兩足を投げ出したまゝ、兩手で爪先を揉んでゐた。川島は何のかのとき
 つはりついてゐて放れない。和子は隣室の客に對しても冷汗が流れた。そして征服
 せらるゝまでの女達や戀女房などと云ふものはみんなこんな風に扱はれるものだら
 うかと思ふと可笑しかった。事實男が先日一高の生徒たちと燒嶽へ行つて半日留守
 だつた日、和子は久しぶりでせい／＼してのんきに晝寝をしてゐた。二時頃男が歸
 つて來て室の障子を開けたのと、和子の目をさましたのと同時であつた。和子はね
 むい眼をこすり乍ら起き上つたが、男のためにお茶一杯汲んでやらうとはしなかつ

た。いくらうながされても嘘にも待つてゐたなんて空々しい言葉は出なかつた。そんな風に待遇はれた男が、けふのこの體裁は何であらう。

「あんまりお天氣がよ過ぎるんで、暑くつて堪らなかつたの。何しろ禿山だから日蔭と云つてはこれつばかりもない。流石は焼嶽だと思つてよ。見る／＼手の色の焦げてゆくのが見えるやうなんですもの。これ！」

すつきりした手頸を突きつけて見せる。その二の腕から先が薄すり狐いろを滑びてゐる。川島はつと捕へやうとした。が、その威壓するような高笑ひは素早くもう障子の外にあつて、縁側の椅子をギチ／＼こいでゐる。

川島は和子の人格を尊重し、その處女主義を崇拜すると口癖のやうに云つてゐたそれがまたいちばん和子に接近する手段でもあつたのである。その代りさうした口實の手前、これ以上指一本さしやうがなかつた。

和子は川島と共に戸外へ出ることをかたくこぼんだ。それはいつぞや嘉門治の小

屋を訪ふとて出かけた夕、道で行き逢つた鎗ヶ岳歸りの一群から、

「彼奴等何しに行くんだ。」

「あれは君、例のタゴールの林間哲學の實現に行くのさ。」

「うん、生意氣な、撲つちまへ。」

さういふ熱罵の聲の洩れたと云ふことが、いつとなく耳に入つたからであつた。

最初の中はうるさく誘つた川島も終には心づいて、

「妙な人だナ、君は。散歩つていふと恐い顔するよ。厭なら厭でいゝぢやないか。」

媚びるやうに笑つても、

「不可つたら不可！」

傍へでも寄られさうになるとついと、弾かれたやうに飛び退く。川島はまた面白半分執念くまつはらうとしたり、しれ／＼と笑つたりし乍ら、

「そんなにしなくつたつて可ぢやないか。君の處女主義もするぶん究屈だね。握手

位が何だい、それほど薄弱な根底の君の思想でもなからうと思ふね。」

何と云つてもきかないので、それでこそ感心だといふやうなことから機嫌をとりはじめて、和子一人を賞讃する爲には、いろいろ他の女性の欠点を云はなければならなかつた。細君がよく引合に出された。それから自分の経験した女たちの睦言までしやべつた。小待合の様子なども委しくきかせてくれた。そんな時和子の瞳は人形のやうに黒う凝つて動かなかつた。なにがしの博士夫人だのくれがし伯の令嬢だのと云ふやうな人たちの燃えるやうな情話や奇怪な不倫の戀物語や、彼女は一々嫌惡に戰慄した。女を辱しむるものは女子なりとまですべての同性達が憎くなつた。その極端な潔癖性は、年長の婦人達が、妊娠やお産の話をしてゐてさへ、慎みのないと腹の立つて耳が覆ひたくなるほどだつた。ましてこのやうな話題はまつたく堪へがたいのであるけれど、こんな機會はまたとあるまいと思つて、忍んで聞いてゐるので、その総合的智識から推知し得たところによれば、彼女が未知の領土には

醜惡な怪奇な獸のやうな現實ばかりが残されてあるらしかつた。今までとても多少は察してはゐた事だが、今更のやうに男女間の關係や、人生の裏面と云ふものを、いやしきずにはゐられなかつた。

境遇上周圍からは様々の經驗を強ひられはしても、知らぬと云ふはいゝことだつた。感應性がなければ石佛の頭上に蜻蛉である。自分達をその強烈な肉慾の手によつて抱擁しやうとする男性の手がどれほど強いものであるか、恐ろしいものであるか、和子は考への中に取入れやうとはしなかつた。處女の光輝！わが權威はいかなるものをも絶對に膝下に跪つかせずにはおかぬ、と常に高言してゐる。世の中の暗い秘密や法則といふものを知らねばこそ無智單純さとも云へば云はれるが、事實處女ほど冷酷で心強く大膽なものではなかつた。而憎いとは思つても、それを打ちしぐ程の勇氣を川島は持たなかつた。

川島は女の代りに大きな謎を抱かせられてゐた。火も吐く、灰も噴く、煙も吹く

うかと傍へも寄りつけぬ活火山のやうな女かと思へば、また或時は、

「たあちやん。」

と呼ばれて、

「なアに。」

と邪氣もなく見上げる眼には憎んでも憎み切れぬ愛々しさがあつた。自身でも殆ど無意識の間に、指で突いたほどの片ゑくばから汲んでもくつきせぬ愛嬌の濁が湧くので、あらゐ紫綺の緋裏の羽織など着てゐる時、肩揚げのないのが不思議な位だつた。前髪を割つて水いろのカチウシヤリボンなど巻いてゐる時は一入あどけなかつた。その人の妹かとも見えた。川島は打うめくやうに、

「たあちやんを見るにつけても、あの女が戀しくつてくたまらない。」

などと云ひくした。

「失禮なことお言ひになるもんぢやなくつてよ。そんな女といつしよになどされち

「やたまりませんよ。」

「さう一々言葉とがめをしなくつたつて可ぢやないか。氣むづかしやのお嬢さん、かあい、たあちやん、好きなたあちやん。僕の好きなくたあちやん。」

「莫加有仰い。」

叱られても怒られても懲りずに川島は、よく克巳のことをも云ひ出した。

「克巳君は利口な人だね。ねえ、その點が君の氣に入つたのだらう、が、たゞそれだけのことだ。うまく君の機微をとらへてゐたんだ。ね、さうぢやあないか。だが僕ア何も君に對してそんなにまでつとめる必要はないから、思ふまゝに振舞つてゐる。さうして馬鹿な串談を云つたりしてるが、これがもし少しでも君をどうかうつて野心のある者だつたら、頼まれたつてこんな眞似は出來やしないせ。まあ、考へてみたまへ。」

「さうかも知れませんが、でもどうだつていゝぢやありませんか、よけいなお世話

よ、わたしの克巳さんは私のものなんですもの。」

うるさうに前髪をかき上げ乍ら云ふ。

萬事がこんな工合なので、和子の舉動はだん／＼暴君的になつて行つた。男を自由^{びよ}に驅使^{くし}することに興味^{きうみ}を覺えて來た。一方が強く出れば出る程、一方は益々身を謙遜^{けんそん}つて仕へて、踵^{かかと}に接吻^{せつぶん}もしかねなかつた。和子は若いシリア人に對する王女^{わうきよ}、(サロメ)の様の態度^{たいど}にいつしらす慣れてしまつた。

(一七)

和子の好んでゆく田代の沼は宿から十三町、美しい笹原の奥にあつた。

密林の中の徑は洋傘なぞさしては歩けなかつた。また暑いほどの日もあたらな

緑色の光線が刷いたやうに煙つてゐて、たま／＼綺になつて梢を洩れる幾條かの金
 箭が、きら／＼と輝く黒髪の上を這つた。和子はいつもうなだれて歩いた。白樺の
 芳香や草の薫りや、その甘やかにおしつけるやうな匂ひは彼女の心に悲しく溶けこ
 んだ。

白樺の丸太を並べて、針金でつないだまゝの橋はこはかつた。下には奔流が石に
 激して眞白に湧き返つてゐた。和子は下駄を脱いで足場も定まらぬやうにゆら／＼
 渡つた。山ではあれほど男勝りの特色を發揮する彼女が、かうした平地だと意久地
 のないほどしほらしい。

燒嶽噴火の降灰のために田代の景色はそこなはれたと云はれてゐるけれども、そ
 の池水の清麗さ、さながら敷きつめたやうな芝生、大小いろ／＼の岩石の配置、庭
 木の様な樹木、小丘、中島、流れ出づる溪流の屈曲、それはもう「艶麗無比」とひ
 と口に云つて了へば云ひ分のない風致をもつてゐた。ちろ／＼と日光に輝いて清い

ゆるぎを見せてゐる水面には細かい水蟲や、藻草が眞白な可愛い花を一面に浮かせて、築山の茂みに眞紅な紅葉が一枝、鮮かな色彩を點じてゐるのや、石楠花の薄桃色や、深山の奥のこの平和！ しかし幽邃などと云ふ境ではない、もつとおだやかな明るい女性的の優しみがあつて、心を惹かれずにはゐられなかつた。大正池は遠望の美を以つて勝り、宮川の池はあんまり寂がつき過ぎてゐたが、田代の沼はなつかしく近勝りした。しんとした眞晝の静寂、鳥の聲と絲々の音のみ幽に、それは樂しい不安とも云へば云はれた。

思ひ疲れ歩み疲れて瑞々しい青草の上に兩足を投げ出すとき、和子はいかにも遠い夢の國にでもゐるやうな氣がした。仰げば樹がぐれに霞澤や穂高が望まれて朗らかな碧空には靜に燒獄の噴煙が立ちのぼつてゐた。

王様の馬の頸の鈴

ちんからかんと鳴り渡る

日はあたゝかに風もなく
七つの峠が晴れわたる

山のふもとの七村に

青亚麻の花咲けど

人に別れた若者は

今日も今日とて涙り泣く

それは晴れた日ほがらかに空をゆく銀の鈴の音をきゝ乍ら、青亚麻の花蔭に亡き
戀人を偲ぶ若人のこゝろを歌つたものだと言ふ。悲しい小唄は傷んだ胸の空虚にし
みじくと響いて、和子は自分の聲が林間に反響して微妙な震動を發するのを、ふし
ぎなものでも追ふやうな眼をして見やつた。恍惚としたその面上には堪えがたい悲
痛と憧憬の色が雲のやうに漂ふた。

山をめぐれど戀人は

青亞麻の花かくれ

夢と消ぬべき銀の鈴

おぼろ／＼にゆくときも

日はあたくし七村に

別れしひとを忘れねば

晴れて悲しき胸の鈴

ちんからかんと鳴り渡る

ほんとうに鈴の音でも聞えて来さうであつた。ホロ／＼と涙が頬を傳ふた。別れ
てからの和子の胸には克巳の姿が理想的に育まれてゐた。その髀を抱けば、實在の
克巳とは餘程もう遠いものになつてゐた。人はいろ／＼に云ふけれども、そんなふ

うには思ひたくない。克巳（そのひと）がきいたならば、

「いつまでも矢張り「克巳」さんが貴女を苦めてゐるのは悲しいことです、残念なことです。もうおしまひなんです。執着の過去の絆をたち切つてお丁ひなさい。それが兩人に與へられた運命なんだから仕方がありません。只一人で、自由に大手をふつて勇ましく廣野の道へ!!」

例の調子でそんなことを云ふだらう。與へられたる約束とは何! 運命とは不可抗なものか、何故それを打破らうとはしない。

「お退き、私がそこを通るのだ! 邪魔になる石はそのまま、私の都合のいゝ方へ轉がして見えます!」

和子は好きなゾナの臺詞を思はず口に出した。

自分が偉くさへなつたらば………もつと——いろんな目に逢つて、おしもおそれもせぬ立派な人格が出来てから、わたしは克巳さんに逢ひたいんだわ、笑つて

昔語りがしたいんだわ。善にもせよ悪にもせよ、たゞの女ぢやもう二度と顔は合は
せまい。」

「大きな運命にぶつかつて、非常な歎きにもお逢ひなさい。悲しみの盃を底のおり
までお飲み干しなさい。胸にピストルを突きつけられるやうな目にも逢つて御覧
なさい。その時分の御創作を何處かの巷で讀んだなら、賞讃と感謝の詞を送りま
せう。貴女のことだから随分思ひ切つた眞似もなさるだらう。僕もさうです。コ
ンミツションもつきつけられやうし、テンズテーションも來ませう。又大いなる
戀も來るかも知れない。あらゆる經驗を伴めつくして、笑つて死にたいと思ひま
す。」

いつか克己のさゝやいたさうした言葉がまぎ／＼と思ひ出された。

「見損なつたと云はれないやうな人物になりたい。」

と悲しく思ひつめたばかりに、自分はあせり過ぎた。ちつとしてはゐられなか

つたのだ。目の覚めるやうな事件が惹起して見たかつた。奇蹟がつくつて見たかつた。が、不快なこと、醜なるもの、危険なことを避け、只正しい苦闘によつてのみでも、藝術の眞へ到達することは出来たのに……。

間違つてゐた。誤つてゐた。ド、ブロンディを書かんが爲に、わざ／＼獄舎へ這入りたいと願ふ人であつてはならぬ！ 和子は笹の葉をむしり乍ら、熱い涙を地上におとした。

(一八)

ある夕和子は胸を躍らせ乍ら、川島の手から奪ふやうに厚い横封筒を受取つたが一目見て失望した。それは瀬川の手蹟であつた。

なーあんのこつてす。克巳さんではないんですか、おつれの方は。

しかしあなたはすゐぶん無鐵砲なあそびをなされる。絶對の個人主義、刹那主義者にとつては、サロメの眞似ぐらゐなんでもないことです。否、寧ろ自ら手を下すことに於て平氣なだけ、サロメよりも一步進んで居ります。これはあなたの有仰る自由の爲、今此一瞬時に満足するといふ満足のしかたと異なるものでありません。

私はあなたの思想を肯定します。随つてサロメの思想をも肯定します。對手を殺して其死屍に姦する時、大なる満足を覺えるといふ狂的思想をも肯定します。凡ての空想を排し、現實に満足を得ずして何等か、より以上の複雑した力強いものをと求め行く時、人はおのづから此境地に入るのです。

爲我、刹那、戀、人生の藝術化といふ事を積極的に愛するならば、どうしたつて此處まで押詰めないのはうそです。此處まで押詰められない人間は、寧ろ始

めから求めないのがよいのです。

おつれの方にこれだけの覺悟があるかどうか知りませんが、なければ甚だ不徹底な方だと申さねばなりません。

今度の方はどうしてもあなたを殺さなければならぬ方のやうです。それも出來ないでをめ／＼歸つて來るやうな方では心細い。

が、若しその人が大いなる覺悟を持つた心太い人であつたら………

あなたの行爲は冒險を通り越して無茶です。心にもない人によつてあなたのアージンの破られない事は當然です。

今度の方があなたの有仰るやうな方なら、試金石としての價値はありません、あなたの試金石は今の處克巳さんの外にはありません。それで澤山なのです。敢てお試しになる必要はありません。心にもない人によつてお試しになるのは赤んぼの手によつてお試しになるのと同様です。

その赤んぼの手によつてあなたが殺されたなら、それこそ笑止ではありませんまいか。あなたはことによると赤んぼの手によつて殺されるかも知りません。あなたのいのちはそんな安価なものにはしたくない。

お芝居、技巧！

併しそれならもつと真剣なお芝居をやつて下さい、芝居の爲の芝居、アートの爲のアートでなく、芝居即ち自分、アート即ち自分といったやうに、必ず以前の自分に歸らぬ覺悟で藝術と同體になつて下さい。克巳さんの希望とても同じだらうと思ひます。尤も克巳さんの仰有る「あなたは正直過ぎる、ゆうづうがきかない」とはどういふ意味がよく解りませんが、恐らくは作品の上に於てのみの言葉ではないでせうか、若しさうでなく右も左もいゝあんばいにあしらつて置けとの意味なら、克巳さんらしくもないと思ひます。

尤も藝術家とても人氣者ですから、社會から憎まれぬだけの用意は必要ですけ

れど、妄りに觀客の城を越えて近づかうとして來るもの對しては、嚴として一步も假借せぬだけの態度を明らかにして置いて頂きたいのです。

あなたの態度は寧ろ今までゆうづうがきゝ過ぎてゐる。その爲にみんな惱まされて了つた。

あなたはそれを誇りに思召すでせうが、それがかへつて自己を滅す因となりはしますまいか。

たとへ毛ほごでも氣を持たせられて、黙つて引込む人間がありませんか。此儘ぢやすまされないとはい、草平さんの意地ばかりでもありますまい。もうさうなつた場合一方が逃げ出すやうな事があつたら、どこまでも追ひかけて行つて、たとひ殺しても慾望を遂げなければ止まないといふのが近代人です。

只古い因習から脱却し得ない爲に、さう知つてゐながら遂げ得ないだけです。併し遂げ得ないといふのは場合によつて遂げ得るといふ意味になります。

恐ろしいといへば恐ろしいのでせう。併しそれが當然の道筋です。後になつて驚いたつて間に合ひません。

おつれの人は、強い大膽な人であつて欲しい。そうしてあなたはもつと強い人であつて欲しい。

が、又おつれの人は、頗る弱い人であつて欲しい。そうしてあなたはもつと弱い人であつて欲しい。

第三者としてお伺ひするのは、とりやうによつてはあなたを侮辱する意味にもなります。克己さん流に言へば……。山はもう随分お寒いでせう。

寫真師は細君があぶながつて手放さないのです。こちらは又まはりからいろいろの仕事を押付けられるので、また何處へも出かけることができません。それにもう避暑客らしい顔して出かけるのもあまり氣がきませんから。

その手紙は川島にも見せた。川島は妙な、甘酸っぱいやうな顔をして、

「瀬川と云へば僕はいつも失笑してゐるよ、後れはまづ今少し己れを知つたらいゝんだになア。なあんだ、僕を克巳君とまちがへてたのか！ 悲観だなア。それをさうぢやないと云つてやつたんだね、君は。僕をどんな人物だと云つてやつたんだこれで見ると……………」

と繰り返してゐたが、

「あゝ、さうか、わかつた。」

「ほゝゝゝゝゝ」

爆發したやうに和子は高く笑つた。

「惘然な奴等だなア。ネエ、一寸眞面目な顔して僕は云ふがね、よしや口さがなき童つべが何と批評しやうと何と推量せうとそれは御勝手次第、このすがくしき大自然に對し、神嚴の氣宇立ちこめれる宇宙の偉大なるに對し、神かけて恥ぢない。鎗ヶ嶽の絶巔に長嘯一風した誇りよりも、同棲二十日間、何等自らにやま

しからざる互の行爲の至純なるを誇らねばならぬ。けがらはいしい邪念は微塵も持たず、朝から晩まで山に對する讚美の聲にのみ司配され、崇高な憧憬心の下に、白樺の香り芳薫たる中に呼吸する我々は、他人のみだりに付度することの出来ない神々しさを腦裡に刻み得たものである。かくてこそ二人は互ひに理解を持つんだ。

「へえ！」

和子は胸をわくくして、インクの出のわるい萬年筆の軸をやけに叩き乍ら、

「それや最初からあたりまへのことぢやありませんか。誇るべきことでも何でもありませんわ。」

「さうさ。だがね、まあ戀は戀、肉は肉さ。僕等さう思つてゐる。だから瀬川のやうに煩悶なんぞしないよ。よしんばだね、僕が君を戀したとしても、肉なんぞ要求しはしないさ。そんな必要はさつと他の女へ行つて満たしてくるさ。だから精

神上で戀したつて、少しも差支へないわけだらう。ネエ、さうぢやないか。」

「何だか妙な理屈ね、私にやそんなことわからない。」

「それが僕の超然主義と云ふんだよ。君の處女主義と相まつて、始めて完全に遂行することが出来るんだ。」

「へえー」

莫加らしくなつて、それつきり口をつぐんで了つたが、不快だ／＼とは思ひ乍ら瀬川の言ふことにも道理があつた。和子は自分を反省せずには居られなかつた。

「克巳さんにもすまなかつた。自重しなければ………克巳さんも決して私にそんな意味で芝居をしろなどと云つたのぢやなかつたのに………。人生の藝術化と云ふことはおもちやにすることではない。たとへ川島がどうあらうとも瀬川がどうあらうとも、徒らに冷笑してはならない。もつと／＼堅實な修養をつまなければ………慚愧に自分を引き裂きたくなる。わたしは何をしてゐたらう。」

かたく双袖を抱いて、餉臺の端に顔をおしつけてしまった。

「君、どうしたんだ。何をそんなに考へ込んでる？」

「ほゝ、克巳さんが戀しいのよ。」

と笑つて見せる。

(一九)

八月もまだ二十日前といふに、山上にはめつきり秋風が立つて、もう登山の客足もうすくなつた。別に親しい交際はしなかつたけれども、一番長い顔馴染だつた、『戦はむかな』の連中も昨日かぎり引き上げて了つたので、ひごくあはたらしい氣がされた。

川島は昨夜夫人からの手紙を受取つた。いつも氣にもとめぬと云ふ磊落な様子して讀みずてるのであるが、その晩に限り不安な表情が眉宇を掠めて、胸一つには包みかねたやうに、

「妻の許へ行つてやつぱりいろんなことを云ふ奴があると見える。」
と苦笑しながら、長い巻紙を寸々に裂いてしまった。和子は讀んでゐた書物から靜に目をあげて、

「どうなすつて？」

と訊いた。

「別に何も……………私は貴郎の氣心を知り、また玉川さんの人格をも信じてゐるから、誰に何と云はれやうとそんな事は何とも思はないと云つてある。たゞ御兩人とも私をだまつてすつばかしなすつたのはひどいつて……………」
「それつきり……………」

そんな筈はないでせうと云ふ意地のわるい眼をしたけれども川島はいつになく

あはてたさまで帳場へ下りて行つた

それで今朝のことである。何心なく廊下へ出た和子は、昨夜の寸断された文殻が一隅に掃き寄せられてあるのを見て、素早く拾ひ上げて袂に入れた。そしてふと心着くと、浴室の前の橋廊下のところに絹物の丹前を着た、痩せた蓬髪の一紳士が立つて此方を見上げてゐた。和子はハツとして、顔のやりばがなまでの羞恥を感じた。

室に戻つてからそつと袂の中でつぎ合せ――讀んで見た。

案の通りそれは精一杯の怨みをこめた書面であつた。人非人のやうに和子のことを罵つてあつた。良人の無情と無恥を責めて、他人の例などあげて辱しめてあつた御中越しにより封入した爲替券は自分の物を質屋に持つて行つて調べたのだなどとしてあつた。和子の手先はふる／＼と激しく震へた。

文中にある自分の上は何だか他人事のやうな氣がした。怒るところではなかつた。男が憎かつた、淺ましかつた。彼等の社會に唾棄したかつた。虐げられたる妻よ、何と云ふ惘然なことだらう、お前達はなせ嫁いで來たり。和子は裏心から夫人に同情した。

かうした事實をかくしてまぎ／＼嘘をついた川島に對しても、詰問しやうとも思はなかつた。それよりも人の信書をぬすみ讀んだ自分の行爲の方が恥かしかつた。

「ともかくも一日も早く歸らう。もうこんなところにぐづ／＼してはゐられない。」紙屑は丸めて火鉢に投じてしまつた。

歸京のことを川島に云ふと、寝轉んだまゝ駄々つ兒の様に手足をバタ／＼やつて「おい／＼そんな不人情なことつてあるかい。ちや仕方がない、歸るよ、僕も歸るよ。終始行動を共にしやう、と、すると何日!!」

明日!!

「君、歸りにやタン町へ行くんだせ。」

「えい、お約束ですもの。」

「よしつ。うれしいな、愉快だ〜。」

その聲が餘り調子外れにはづむでゐたので、和子はびつくりして、そんなにも女と云ふものに餓へてゐるのかと思つた。タン町とは耽溺する町の意味、つまり遊廓のことで、井上を先夜の返禮がてら其處へ招待しやうではないかと云ふ動議がこのあひだ川島から提出された時、和子は案外にもすぐ賛成したのであつた。その事を云ふのである。

「君も泊るんだせ、いゝかい。」

「えい、大いに廓の情趣を味はつて來ませう、ほい。東京だとまた何んのかいゝるさいけれど………信州邊ならかまはないわ。」

「ヤア、話せる、〜。それでこそたあちやんだ。面白いせ、君！あゝ愉快だな。」

早速起き直つて安全剃刀で顔をあたり乍ら、一人ではしやいでまた一しきり、あゝした社會の習慣だの自分の遊興ぶりだの、濃厚なおいらん部屋の空氣なるものを説いた。

和子も手まはりの物など片づけはじめた。白地の浴衣は終に一度も衣袋の底から取出される季候がなかつた。鎗澤の流れの中から拾つて來た石だの、燒獄の硫黄のかたまりだの、白樺の皮の剝いだのだの、いろ／＼なものが澤山ふゑた。一つ一つ選り分けたり、たまつた手紙を裂きすてたりしながら、

「わたしはね、早くウエンナの二階でアイスクリームソータと珈琲をのんで、シユウクリームやドウナツツが食べたくつて仕方がないのよ。」
などと笑つた。

(110)

「今朝はあんまり好お天氣だから穂高へ行つて見ないこと。」

翌朝早く揚子を含み乍ら欄に凭れて、秋晴の空を見上げた和子はふいに云ひ出した。さう聞くや、川島も布團を蹴つて起き上つた。下山の豫定がすぐ變更されて穂高行だとひしめいた。宿の老主人ももうとめなかつた。

人氣者の鎗を事なく征服し得てから、山嶽に對してはすつかり傲慢な心持になつて了つた和子は、穂高は天險ぢやの鎗よりえらいのと云はれる度に業腹でならなかつた。以前「おでん君」や「蜜豆さん」達は石瀧道で危険だくと云つてゐたが、先日「戦はむかな」の一人は、

「いらしたら如何ですか。何、鎗よりは樂ですよ、貴女なら大丈夫です。」
とさへ云つてくれた。だのに見す／＼見捨てゆくと云ふことはどうにも心残りであつた。

「今日はい／＼晴れたかな、こんな事ア滅多ねえづら……運のえゝ衆ちや。」
強力達は云ひ合つてゐた。佐山は仲間から妬まれるほどの氣に入りので、無論今度も案内役を承つた。が、もうこの前の様な緊張した氣分や不安の念は一行になかつた。和子は笑ひ乍ら行つてまゐりますと金剛杖をふりまはした。

日歸りに出来る道程であるから、佐山もたい辨當だけを入れたふぐつを背負つて鼻唄か何かで身輕だつた。標高の高い故か穂高はいつも霧の多い山で、殆んどその素顔を見せたことが珍しいほどのに、今朝は片翳も覆ふなく澄み徹り、焦茶の岩肌、深々の白雪が堪えがたいほど輝き渡つてゐる。路は河童橋の手前から朝露の繁い左のヤブへ入つた。

倒れ木を橋の代りに渡つたり、川を渡渉したりすること二三回、鬱蒼たる森林帯の登りはかなりな強勾配であるけれども、日が當らないから樂だつた。足下の石や木の根は布圍でも着たやうに厚い青苔や、朽葉の褥にまとはれてゐる。

その代り森がつきると、日も眩むような炎天の花崗岩の石積へ投り出された。峰頭からかけて巖の様に瀧の様に懸つた急傾斜のカラ澤（積）は、いくら行つても果しなく續く。一里半もあるときいて和子は落膽してしまつた。梓川の流れや焼緑の噴煙が背後にだん／＼遠くなる。日光は宛然白熱瓦斯のごと中天から射おろし、数しらぬ石は毒氣を吐くやうで息も塞るおもひ、汗は流れて目に入りしば／＼四邊が眞暗になつてゆくやうに感じた。

中途で雪消の水がちよろ／＼と、音立て、青く流れ出してゐた。佐山はこゝでその水を用意のビール瓶二本につめた。和子も川島も跪づいて掬んだ。

「あれが山田さんの小屋ぢやがね。」

それは同じ宿に逗留してゐる有名な洋畫家で、あの昨朝の紳士はその人だつた。文展の出品に穂高を描く爲、時々人夫をつれてはこの小屋に來て籠るのださうで、薦垂のやうな小屋が右手の灌木帯の叢の中に見える。

穂高で随一の難場と呼ばれてゐるのは、やつとカラ澤のつきた行き止りにそれはまるで直線に板を立てかけたやうな岩壁がある。岩とは云つても雪磨ぎでスベ／＼した大きな一枚石が、見上げるやうに二三段つゝいてゐる。此處で一番恐ろしいのは上から石の墜ちること、實にあつと云ふまでもない。カラン／＼と澄み渡つた美妙な音を立て乍ら、目にも止らず飛ぶやうに落下する。岩に取着いてたら最後避けやうがないので、中り處がわるければ小石一つでも命がけだと云ふ。杖などはその麓にすてゝ了つて、たいもう猿のやうに手足を動かして攀ぢる。けれど和子は驚かなかつた。易々と通り抜けてしまふのに、二十分とはかゝらなかつた。

芝草と岩石交りの草本帯の登りは、たい呼吸の逼迫する位なもので、和子は歩き

乍ら花を摘んで手帳にはさんで、その名を執つこく佐山に訊き正したりした。時々歩を止めては息を切つて二人を見上げる。

「もう後どの位！」

「三千尺さ！」

「まあ、未だ！」

「山の路つてものは、かの行かんもんだね。」

「まつたかね。」

喘ぎ／＼も和子はすなほに疑はなかつた。さうして三千尺、三千尺に引きすられて一生懸命に歩いてゐたが、至るところ石と岩ばかりの骨の様な山だけれども、垂直線に富んだその遠望はいかにも雄大壯麗で、尖つた中にも丸みを持つた、強い鋭い重々しい山容は、寫真で見る欧州アルプスに一番近いやうに思はれた。

「誰でもさう云はしやりますだ。ヤア、わい雲が出た、ありや此方へ」と吹き

つけるでね。」

「ねえ、あともうどの位！」

「まだいくらも来やしないせ、君、何度訊いたって同じことさ。同なじ事は同一事さ。」

それでもいつも焼石の様に水を吸ふ和子が、けふはちつとも渴を訴へないので、佐山の背中の水瓶は徒らにころ／＼した。假松の中を漕ぐことも、崩れやすい石礫の懸崖を傳ふ時でも、山媛の様に身輕で馴れ切つてゐた。男達も氣がゆるんだか、川島は頻りにタン町の様子などを佐山に追及したり、彼等同士でなければわからないような戯談口など利き合つてゐて、和子が何を問ひかけても「まだ／＼。」「三千尺が些つとばか。」

とのみ答へた。

まにりまはつて間近に辿り着いても和子はまだ／＼遙かなことを想像してゐたの

其處は矢張り風雪に虐げられた岩角とごろた石の堆積で、しかし鈴の穂のやうに

狭くはなく、そのまゝ背梁傳ひに前穂高や中穂高の方へも行けるやうになつてゐるから、危険は少ないやうに思はれた。時計はまだ十時を少しまはつたばかりなので佐山は荷を下し乍ら、

「エラ早かつただ。残念ぢや、こんな事實をみんな實際と思はねえだかも知れましねえ、他に證人がゐんのぢやものね。」

「さうだねえ。僕だつて少々意外だつたせ、けふは六時半出發の、十二時までに着けば好成績だと思つてゐたんだ、たあちやん、いつたはどうしたんだい。」

「ヘビーをかければ何時だつてかうなのよ。」

ころ／＼と笑ひ乍ら、あまつた元氣のやりばがないやうに其處中を活潑に飛び歩いた。こんな場所にも露營の痕跡があつた。一坪半ばかりの穴の様な石室で、お定まりの汚ない茶碗や空罐やサイダアの空瓶などが散亂つてゐる。その他陸軍の測量部の大きな十字形の木標が半分壊れかゝつてゐたが、川島は石の破片をとつて、和

子の姓名を大きく刻みつけた。

忽ちむら／＼と濃い煙の様な雲霧が、風のまに／＼おしよせて來た。疾い、疾い大變な速力である。頭上を掠めて疾風のごと！ もく／＼と脚下から湧き上る。下界はたゞ一面の白い霧の海。それで空はからりと晴て輝いてゐる。諸處の大雪溪の上を走る雲の影が、照つたり翳つたり鼠色を印する。

風も烈いし、ちつとしてると寒氣は目鼻に痛いほどなので、鹽握飯をかざる齒や手がガタ／＼震へた。そして何時まで待つても霧が晴さうにないので、思ひを残しつつ、一行はやがて下り始めた。

和子達は翌朝早く宿を立つた。

露の底からしらりと流れ出して、見ても寒さうな水の色。何となく大気が冷々と身にしてみても、がうと山上から落して来る風はもうすつかり秋の音がしてゐた。和子は悲しさうな顔をして見返り勝に河童橋を渡つた。心に再遊を誓ひながら――

川島は頻りにまた來年の夏の新計畫などを相談かけた。去り氣なく調子を合せ乍ら、心の中では流石に少しはすまないやうな氣もしてゐた。徹頭徹尾自分が好意なしで、さうしてあれだけの行動を假面の下に執つたことを思ふと、それは自分の卑怯であり陰險さであつたと思ふ。自分がこれほど侮蔑してゐると云ふ事を、たつた一言知らせてやりたい。口をさまさしてやりたい。さうしたらどんな顔するだらう何故自分はそれをあの鐵面皮な酒々面へぶつつけてやり得ないのだらう、とむらむらした。路が登りにかゝると和子は今日もまた、足に合はぬ草鞋で二人をなやませた。生憎婦人用のが品切てゐたので、大き過ぎるのを履いたからである。カルパナ

と云ふのは楓に似た、莖の血の様に紅い美しい灌木であつた。暗い木下蔭には光苔が微かな光りを放つてゐた。

しかし上高地からの登りは一里足らずですむ。峠の上に立つた時川島は、『山が戀しや、別れのつらさ、せめてこの峠越えるまで。』

など、歌つてみんなを笑はせた。

「嘉門治のときの先生ももう歸つたでせうねえ。きつと峠で泣いたでせう、僕は、悲しくて、實際泣くですー ほゝゝゝゝ。』

和子もその假聲をまねて笑ひくづれたが、實際名残が惜しまれた。大天井嶽も徳高も常念も霞澤も、まだ眠つたやうに濃い白雲をまとつてゐて、梢を鳴らす朝風の音のみがうら寂しかつた。徳本の山の肌を蔽ひつくしてゐる濃緑の中には、すでに真紅な色彩の點綴が見られた。

昨日の山登りで少し指先を痛めた足を引きすり乍らも、和子はボン／＼と背後か

らはね飛ばされるやうな恰好で歩いた。急な傾斜の下り坂は後へくと身を反らし氣味にしてゐても、まるでネヂを巻いたゼンマイ仕掛の人形の様に、はづみがついてしまつて止度がなかつた。

馬小屋以來山中唯一の人家である岩魚止の茶屋で辨當を使つた。流石に嘉門治の小屋よりは綺麗で、畳も敷いてあつたし、棚には正宗の瓶詰や罐詰物なども並んでゐた。丁度下高地から登つて來た人夫の中谷と此處で落ち合つたので、和子は自分の郵便物や小包を受取つた。

だん／＼にかしましくなつて來る蟬の聲が人里の近いことを思はせた。下るにつれてまだ／＼下界は霍亂に斃れさうな暑さ。草花も喘いでしほれてゐた。てら／＼と銀色に光るトロツコの線路路に出ると和子はもう安心して、やたらと途中の石に腰かけては休んだ。腰をかけるに都合のよささうな塙所さへあれば見のがさなかつた。島々村へは別／＼に、川島よりは四十分程おくれて到着した。

清水屋の二階で和子は服装を更めて、お轉婆な少女姿が、すっかり上品な令嬢風になつて了つた。川島もカラーやカフスを新しいのに替へると、日に焼けたのが妖怪じみて際立つた。

此地には俵が一臺しかなかった。それももう先約があるとのことだつた。しかしどうでも今日中に松本市まで下りなければならぬと和子はあせつて、もう乗合のガタ馬車でも何でも厭つては居られなかつた。幸ひ宿の主婦がうまく交渉して買切といふことにした。

口々の挨拶に送られて馬の鞭はあげられた。埃でむせつばい一本道を、ぼく／＼かばかば馳けさせる。田畑には早稲や粟がもう穂に出た盛りで、鳥おどしの紙片がのぼりか何かのやうにひら／＼してゐた。路傍の用水堀や田の畦に絶ず綜々と水音もしてゐたけれど、清冽な山の清水をのみ見なれた眼には、妙に鼠色を帯びたきたないものと思はれた。ふり返ると松林の間から藍青の空に連峰の雪溪の線などが、

往途に見たのとはまるでちがつた感（かん）を起（おこ）させる。和子（わこ）は首（くび）の痛（いた）くなるほど窓（まど）からそつちばかり向（む）いてゐた。激（げき）しい動搖（どうごう）にかこつけて川島（かしま）はよく手（て）を執（と）らうとしたり、膝（ひざ）で小突（こづ）きに來（き）たりした。いつか夕風（ゆふかぜ）が吹（ふ）き初（はじ）めて、河原（かはら）には紅（あか）く撫子（なでしこ）が咲（さ）いてゐた。淺間（あさま）平（へい）や松本（まつもと）の市街（まちが）が見（み）え出（だ）した。

電報（でんぱう）でしらせておいた井上（いのうえ）の宿（やど）へ着（つ）くと、早速（さつそく）まづ食卓（しょくたく）が運（は）び出（だ）された。久（ひさ）しぶりに明（あ）るい電燈（でんとう）が目（め）に泌（し）みて眩（まよ）しかつた。井上（いのうえ）と並（なら）ぶと川島（かしま）の赧（ちかぐろ）くなつたことは驚（おどろ）くばかりであつた。自（じ）分の顔（かほ）はわからないので、和子（わこ）は可笑（わ）しがつて二人（ふたり）を見（み）くらべては笑（わら）つた。

平（へい）凡（はん）な餅菓子（もちがし）でも海苔（のり）巻（まき）でも鶏肉（とりな）鍋（べ）でも瓜（うり）の新漬（しんづけ）でも、下界（げかい）の食物（しょくもつ）はみなうまかつた。和子（わこ）は遠慮（えんりょ）なしに平（へい）げた。川島（かしま）は早（はや）く出（で）かけやうと急（せ）ぎ立（た）てたが、井上（いのうえ）は時計（けい）を出（だ）して見（み）ては、まだ早（はや）過ぎ（すぎ）ると落着（おちづ）いてゐた。すると川島（かしま）はやるせなさのあまりと云（い）ふ風（ふう）に、ボールを投（な）る投（てい）手（しゅ）の身振（みぶり）をしたり、また突然（とつぜん）井上（いのうえ）に抱（だ）きついで肩（かた）をゆ

往途に見たのとはまるでちがつた感を起させる。和子は首の痛くなるほど窓からそつちばかり向いてゐた。激しい動搖にかこつけて川島はよく手を執らうとしたり、膝で小突きに來たりした。いつか夕風が吹き初めて、河原には紅く撫子が咲いてゐた。淺間平や松本の市街が見え出した。

電報でしらせておいた井上の宿へ着くと、早速まづ食卓が運び出された。久しぶりに明るい電燈が目に泌みて眩しかった。井上と並ぶと川島の赧黒くなつたことは驚くばかりであつた。自分の顔はわからないので、和子は可笑しがつて二人を見くらべては笑つた。

平凡な餅菓子でも海苔巻でも鶏肉鍋でも瓜の新漬でも、下界の食物はみなうまかつた。和子は遠慮なしに平びた。川島は早く出かけやうと急ぎ立てたが、井上は時計を出して見ては、まだ早過ぎると落着てゐた。すると川島はやるせなさのあまりと云ふ風に、ボールを投る投手の身振をしたり、また突然井上に抱きついて肩をゆ

すつたりした。

(一一一)

やがて三臺の俵の揃つて向つた先は所謂タン町で、松本の市街を離れてから一里近くも暗い夜道を走つた。長い橋を渡ると向ふに遊廓の灯が見え出した。和子はいつか燈籠を見につれられて行つたことのある吉原の、規模を小さくしたやうな光景を車上で想像してゐたが、大門を入ると俵は廓内を一巡した。鼻の支へさうな狭さで木棒はすぐ向け直された。兩側には明るく妓樓が立並んで、こて／＼と白粉つけた赤い衣裳の女たちの張店も見られたけれども、和子はぞろ／＼通るぞめきの素見客から自分に注がれる視線の方がまぶしくて、柳の枝がさ／＼と髪に觸れるのを

い、機に、避けるように頭を屈めて了つた。一行は岩龜樓とか云ふこゝでは大樓の前につけられた。

俵を下りる時には流石にどきついて、四邊の様子も内から迎へる聲々も何もまともつた印象は残さなかつた。たゞ正面の潤い階段の下に、桃色と白をからみ合せたおそろしく太い鼻緒の上草履の澤山並べられてあるのばかりが目についた。案内された二階の大廣間の一隅には、古色蒼然たる大太鼓が据てあつて、遠近の室々からは湧くような絃歌や歡聲が、スツテケ／＼、ホツチヨコチヨイ、ヤツサコリヤ／＼などと我知らず人の心をそゝり立てるやうに響いてくる。

川島は突如墓口を投り出して、これでいゝやうにやつてくれと氣前を見せた。おばさんと呼ばれる墓の様に肥つた中年の女が口やかましく附き切りで取持ち乍ら世話を焼く。大きい一閑張の食卓を中にして、和子は床の間を脊にして座つた。取敢ず御酒にサイダ、和子には天津桃など剝いて進める。持ち運ぶものはみんな男であ

つた。井上は一々呼びとめて盃をやつてゐた。

やがて藝者も来た。もう四十に近い。色は淺黒いが一寸いやみのない派手な顔をしてゐる。細かいすきやの着物に白博多の帯。半玉は十一二のまだ小さいので、古風な型のめりんす友禪の單衣に、紅い帯をおはさみに締めて桃色のしごきを下げてゐる。桃割の根が抜けかゝつたのに簪ばかり總の下つた大きい藥玉や、紅白の花など挿してゐるのでまるで狂氣のやうである。姉藝者は三味線を引き、小女は太鼓を打つた。あの大太鼓をもせはしく相の手に入れるので、けたましい音響は室内に響き渡り、鼓膜が破れさうで和子は耳が覆ひたくなつた。

やがて今一人加はつた。半玉でも今度のはや、大きい。十六位でこれは白茶地に櫻模様の友禪縮緬を着てゐたが、もう四つ身を着るような體ではないのだから、身幅もつまつて行丈も合はぬで可笑しい。乳房さへ膨らんで見える。が、眼が細くて表情のない板を張つたような顔をしてゐた。小鼓をかまへて立膝になると、たゞさ

へ合はぬ膝前から紅いめりんすが零れるのも哀れである。段だら染の簪の總か、耳の傍でちら／＼と亂れた。

一しきり騒ぎ終へると、ざわ／＼廊下がざわめいて、桃色の長襦袢に空色絹の襦袢の裾を引いた女が三人、すつと入つて一列にしやがんだような立膝のような、一種特別の妙な姿態して並んだ。生憎和子は割のわるい位置にゐた。振り返らなければよく見えなかつたので、それも不見識だと思つて澄ましてゐると、小さい半玉は手早く巻煙草に火をつけて三人に渡した。彼女等は最初から一切無言のまゝで引込んで行つてしまつた。これが引きつけと云ふ慣習なのであつた。

あんな妓ちや氣に入らない、もつと若い綺麗なのを出せと川島が駄々をこね始めた。おばさんはいろ／＼になだめたり、手強く叱るようにもした。すると川島は直きにぐた／＼と意久地がなくなつて了ふのであつた。和子はいろんな好奇心や一種の冒險的觀念に馳れながらも、矢張り眞人間の來る場所ではなかつたと云ふ氣が

絶すして不快だつた。

便所へ立つたまゝ暫く姿を見せなかつた川島が、また一人十三四の半玉を引張つて來た。あらい辨慶縞の袖の長い縮の浴衣を着て、緋襦子の帶を恰好よくお太鼓に結んでゐる。粗末だけれども一體に氣の利いた服裝をして、髪もこの子ばかりは東京風の前へ反つた大きい唐人髷の結立なのが涼しく光つてゐた。

「たあちゃん、君の爲にこんな可愛らしい子を見出して來てやつたせ。どうだ、氣に入つたらう、今夜中は君のものなんだせ、あんな中婆さんちや仕方ないからね。えい、どうだい。」

「えい。」

と和子は笑ひ乍ら傍へ招くと、びつたりすりついて座つて、

「わたしもこのお姉さん、大好き。うれしいわ。」など、お世辭を云つた。サイダの酌を受ながら名前を訊くと「嘉代」と答へて、活々とした丸顔に眼がパツチリと飛

び出たやうに大きい。この子が誰か新橋で有名なのに似てゐるやうな氣がしたが、和子はどうしても思ひ出せなかつた。

一座はまたもやざんざめいて、嘉代は小さいのと一緒にかつばれなぞ踊つた。大きいのは太鼓を打つた。しまひには川島も井上を引張り出してカチウシャダンスなどと廣間中跳ねまはつた。袂の先で南京珠のような汗を拭き／＼再び和子の許に寄り添ふた嘉代は、鼻の頭の白粉がはげて赤くなつてゐた。和子はだまつて自分の手布を握らせた。何故かこの子が可愛くてたまらなかつたが、最初から來てゐる他の半玉たちに氣の毒なような氣もしてつとめて冷淡にしてゐた。

あの妓達はもう來なかつた。今一度見たいと和子はそれを心待にしてゐただけれど、その中にお引けと云ふことになつて、ばら／＼と立ち別れた。和子の手は嘉代が執つて、程遠からぬ一室へ案内した。和子はされるがまゝになつてゐた。一番小さいのも一緒に従いて來て、桃色のしごきをふら／＼させ乍ら、稚い二人は飯

事でもするように、茶箆筒から茶器を取下して拭いたり、長火鉢に懸つてゐた鐵瓶の湯加減を試みたりしてお茶をいれた。干菓子が高杯に盛られて前に据られた。和子は兩人にとつてやると、懷紙出してうや／＼しく受けた。

おばさんが来て二人に手傳はせて床をのべたり蚊張を釣つたりした。寢具は長持の上に載つてゐた綿ネルの、赤と黒との基盤縞でおそろして堆く大きかつたが、まだ真新しいようなものにも關はらず、何となく汚らはしい感じがして、觸るのも氣味がわるかつた。浴衣も肌襦袢の上に着た。久しぶりで蚊張の裾をくいるのも珍しかつた。

貴女もおやすみなさいな、と言つても嘉代は行儀よく枕許に座つてゐた。和子はこの子に氣づまりな思ひをさせまいと非常に心遣ひをした。無口な和子には何と慰めてやつていゝかわからなかつた。この正體の知れぬ女客を扱ひかねて、何處やら消然してゐる。和子はつとめていろ／＼なことを話かけてやつた。やゝ馴れて、

「お姉さん、かるたしませうか。」

あゝと頷くと、勇んでバタ／＼と馳けて去つた。やがていそ／＼抱へて來たのは「いぬも歩けば棒にあたる」と言ふような伊呂波歌留多であつた。それを蚊張の内うちに散らして、和子は布團の上に半身を起して札を讀み乍ら相手になつた。まるで自分自分が遊ばせてやつてゐるようなものだ、と可笑しく思ひ乍らも、熱心に額の汗を拭ひ乍ら眼を輝かせて物色する嘉代の様子を見ては、可哀想にもなつて、三四回も繰り返したが、面白い小説のお話をして上げるからと言ふと喜んで、横臥つてその細い頸を小さいな木枕にのせた。白い大きな花簪が抜けかゝつてゐるのを、和子は手をのばして取つてやつた。この位の妹が欲しいと思つた。

嘉代も段々打解けて來て、問はるゝまゝにいろ／＼なことを話した。川島のことをも、

「御兄妹ですか、など、訊いた。」

「否、さうぢやないの。」

とためらはすに答へた。和子はこんな者に對しても、嘘をつく氣はしなかつた。

嘉代は不思議さうな顔して、でも似てお出なさるにと言つた。さう、何處がとおかしさを堪へてきくと、お二人とも何てお綺麗な方だか、それに眉毛の濃いところやなんかがつて一同噂してると言ふので、さうを、と和子は笑つた。

嘉代は名古屋の生れだと言つた。此地へ賣られて來たのは去年の六月で、もう馴れたからさほどにも思はぬけれど、最初の中は寂しくて、幾度逃げ出さうとしたが知れぬことや、電車もないやうな町にあるの悲しいことや、芝居も滅多に見られないことや、冬は太鼓を打つのに霜燒のくづれるのが辛いこと、夏はまた夜が短かいから眠くつて、堪らぬ。毎夜二時を聞かないことは殆んどない、それも躍つたり、唄つたり、陽氣に騒いでる中はまぎれもするけれど、ちつと座つて團扇の風でも送つてゐる時がいちばん辛い。知らず、前へのめつて餉臺の角へ額をぶつつけ

るようなことは度々ある。そんな時は姉藝者が怖い眼をしてグーツと睨める、などと話して、名古屋辯と信州言葉と混合に使つてゐた。

せめて今夜一夜だけでもゆつくり休ませてやりたいと和子はいとほしくて、そつと寝返つてしまつた。昨日と今日の山路の疲勞や、いろ／＼な目新しい出來事の應接に、自分ももうたわいもなく眠かつた。

夜を生命の別世界故、更にも一種のざわめきは静まらず、ボタン／＼廊下の足音も絶なかつたけれど、和子は何んにも知らずに氣持よく熟睡して、翌朝目をあくともう六時過ぎである。夜半過ぎにおばさんが頻りに嘉代を呼びさまして、寢衣に着替よとすゝめてゐたことを夢現の中に覺えてゐるが、嘉代も起きなかつたと見えて帶揚も解かずに寢屈さうに身を屈めて兩手を胸の處に投げ出したまゝまだよく眠つてゐる。どの室からか喃々と囁く聲音が洩れてくる。つきせぬ糸の様に縷々と續くそれが氣になつてうるさくてならぬ。

嘉代が洗面所へ案内する。廣い中庭に面した廊下を幾曲りして、階段を何度も昇降して、飛び石傳ひに。寢惚眼の遊野郎が女に付き添はれて幾組も顔を洗つてゐる和子は房揚子を含み乍ら、鏡の方向いて眩しうにしてゐた。塙所か空くのを待つて、嘉代はうがひ茶碗に水を汲んでくれた。そちらへ向き直つてふと見ると井上もゐた。

「昨夜は御迷惑でしたらう。どうです、眠れましたか、妙な塙所で！」

「え、面白うございましたわ。おかげ様で、ほゝゝ。」

和子も平氣で挨拶した。

歸りにとある室の前を通りかゝると、急いで若い女が出て来て、

「こちらへ行らつしやいます。」

と言つたけれども、

「え、後刻で。」

と言ひすてにして自分の室へ戻つた。

女は氣轉よく白粉や髪の道具を揃へて持つて來てくれたが、使ふ氣はしなかつた
しばらくするとまた、

「お煮花を召し上れ。」

と言つて來た。和子はつれられて別室へ行つた。

そこには川島や井上が長火鉢に差向つて盃の應酬をしてゐた。餉臺や猫板の上には二三品の肴があつた。女は紺地の縮の浴衣に白小倉の單帶を締めて、奴元結かけた低い濱島田がつくり曲つて、美人といふのではないが受口の眼の可愛らしい、しかし今まで女中だとはかり思つてゐたのに、これが昨夜の所謂花魁なるものと知つて和子は内心驚いて了つた。今一人の女と來たら鼻持がならなかつた。これは廟髮にして、色の黒い鼻の丸い下品な、愛嬌と云つたら微塵もない。聲音でも物腰でもまるで工場の女工型だつた。これが色賣る職業の女かと和子はあきれて見守つた。

が、二人とも血色はよく膝など弾力のありさうに肥え太つてゐて、暗い影や悲哀のあるらしくもなく、その話題なども案外世帯じみたことばかり言つてゐるので、和子は重ね々案外だった。

嘉代は何時のまにか化粧を直して、綺麗な顔して莞爾々と傍に座つた。

『眠いの？ 腫れぼつたい眼をしてるわね。』

と和子は含笑み乍ら、その頬を指先で一才突いてやりたく思つた。

和子は嘉代に何か與へたくつて堪らなかつたけど、何んにもなかつたので、持つてゐた金地の小扇でもと思つたけれど、これがなくつては自分だつて困る。矢張りお金の方がよからうとひそかに紙包を帯の間に用意しておいたが、つい渡す機会を逸して了つた。東京へ歸つたら何かよろこびさうなものを送つてやりたいなど、考へ乍ら迎ひの俤に乗つた。一同賑やかに送り出した。中にも二人の女が手づから下駄箱からあはてゝつまみ出した、褪せた花緒のちびた駒下駄を突かけて出たのが哀

れであつた。ふり返ると柳の蔭に佇つ嘉代の緋襦子の帯のいろが強く目に沁みた。

停車場まで井上に送られて、十時何分發かの汽車に乗り込んだ和子達は、その夜の九時過ぎ飯田町驛についた。都へ近づくにつれて和子はつく／＼克己が戀しかつた。胸が引きしぼられるやうに苦しかつた。車窓から顔を差出すと夜風がハラ／＼前髪を亂した。空には朧な月が群る雲を色づけてゐて、牛込あたりの人家の灯が夢の様に後に飛んだ。甘い哀愁に打たれたその顔を、自分との別れの爲と自惚の強い川島に解られはしないかと思ふと、急に不快な氣持になつて、むづかしい表情に返つた。川島はすつかり計算をすまして、和子の分の殘金を返した。人波に交り乍らプラットホームへ下り立つた時、和子は我ながら脊の高さを感じた。長い汽車旅に疲れたらしくもなく、すらりと裾長にいい恰好であつた。

停車場前の廣場から電車の停留所へ出るまでに、川島は和子のバスケットを持つてやらうと言つて、突然手を握らうとした。和子は洪笑してふり放ち乍らも、堪らない腹立たしさと先方に對する侮辱を感せずにはゐられなかつた。明るい電車の内でのしらふしい笑顔が、張り飛ばしたいほど憎らしかつた。

松住町の乗替場からやつと一人になり得た和子は、この二十日間、蝙蝠の羽に目鼻を覆はれてゐたやうな厭はしい煩はしさから、逃れ出た快さにホツとして、胸一杯に呼吸した。

(一三三)

それからもう一年の月日が経つて了つた。世の中にはいろいろな事件があつた。

和子の周囲ばかりでも數へ切れぬほど多かつた。得意の者、失意の人、病死、破産、自殺、復讐、行方不明！ 發狂、友の結婚、悲劇？ 喜劇？

ひとり和子は相變らず清らかな、石膏像のような白い頬に片鬢を浮べたまゝ、冷然とすべてを見下してゐる。専横な傲慢な冷酷な執拗な、その小さいな胸中の秘密知るよしもないけれど……………。

銷したるに叩くはたぞや胸の扉を

去にませこゝは魔女の棲處ぞ

これが或人に贈つた和子の近詠であつた。

ハを はり

夢の花片

繪端書函を整理して選り分けた中から。

時と云ふ夢ぬす人にわが歌の

美しき夢なげてすぎなむ

新春の御きげんいかい？ 今年も相變らずにね。私誰だかおぼえてゐらして？
御無沙汰ばかりいたして居ります。光子様は吉井様と御改姓遊ばしました、美しい
夢をすてゝ舊い方に……………。鏡子

……………
思ひきり黒縮緬の羽織の肩を落して、繊細な指に巻良はさんで薄い煙を吹かせ乍

ら、銀杏返しと高島田の髪すりよせて、繪番附を見てゐる棧敷の女「春狂言」と題した夢二の繪端書に。

この方とはいつともなしに離れて了つた。ある時はまるお酌のやうに、ある時はまた女優の様に、貴婦人風に、傳法肌、極端から極端の服裝へ飛ぶのがお道樂で、それがまたどれもよく似合ふ。御一緒に歩けば道行く人がみなふり返るので晴がましい位。派手好きな活潑な進取的な御氣性と、引込思案の固意地な孤立的の私とは、どうせ並行線には進めず思ひの方向へ立ち離れて了つたが、それは突飛のようでも惡氣のない極めて感情の純なひとだったので、今でも折々はなつかしく思ひ出す。一時マダム振りが評判だつたんです、米國から新歸朝のバリ、染谷工學士の戀與方として。しかし遠くの鑛山へ御赴任なすつてからの御消息は滅多に傳はりませむ。

今日は雪、誰れかさんと誰れかさんと植半の奥の一間の置炬燵なんて一幕も候はむ。まだ御出京は遊ばされず候や。是非御一緒にと本月は未だ木挽町行を差控へて待ちまゐらせ候。みか

大きな眼に権のある、紫絞りの半襟した潰島田の仇者が二三本鬚の毛をほつらせ乍ら、緋鹿の子の炬燵布團に顔をうづめて沈思の態、誰れやらの替紋繻はせた新芽いろの蓑入は、細い黄金のべの煙管と共に邪険にそこへ投げ出されてある。お美香さんはこの繪の女が抜け出したような下町趣味の人。お年は二十一。

○

千鶴子様へまゐらす。

父とこゝへ参りました。温泉宿の空氣はまた別もので御座います。可愛らしい梅も咲きました。瀧の音が夜になると一入興を味はせます。明日は山登り！

今日^{けふ}大きい兄^{あに}がヤチ馬^{うま}におつかけて來^きましたので、随分^{ずぶん}私の部屋^{べつや}大賑^{おほにぎ}かでございます。でもかうやつて毎日^{まいにち}お蕎麥^{そば}、しかも眞黒^{まぐろ}なのを食^たべて喜^{よろこ}んたり、お蜜柑^{みかん}の汁^{じゅう}ばかり吸^すつて居^ゐたつて仕方^{しかた}がない。あゝこれがお友達^{ともだち}だつたらとつく／＼考^{かんが}へました。前面^{まへ}は青^{あお}い杉^{すぎ}が一面^{めん}に植^うつてる山^{やま}、まあその美^いい色^{いろ}と云^いつたらとても繪^えの具^ぐでは出^だせません。

夜^{よる}になると父^{ちち}さんにねだつて、一中節^{いちちゅうせつ}をきかして頂^{いた}ぐの。一寸歌澤^{ちゅうかつたぎ}に似^にてゐていゝものね、小春^{こはる}治兵衛^{ぢへゑ}がお得意^{おほいこ}なのよ。いゝものねー。兄^{あに}さんは滑稽^{こつげい}よ、氣^きの毒^{どく}な聲^{こゑ}で澤市^{さいいち}さんをうなり始^{はじ}めて、聞^きいて居^ゐられやしない。ハイ、エー、實際^{じつさい}、全^まく、ほんとうよ。

あゝまた、夜^{よる}が來^きたまた。淋^{さび}しい夜^{よる}がわたしを捕^とへに來^きた。どこまでわたしを、お前^{まえ}はさう苦^{くる}めるの……………。

……………

小豆がゆを食べた日、おいしかつた。修善寺温泉にて、やま子

.....
某令嬢が御避寒先から寄せられたもの。

○
訪へ詫人つばき花咲く女護ヶ島

船を揚れば依然として太古の状、爲朝の昔が偲ばれます。俚語「男だてなら千ヶ崎沖の、汐の早さをとめて見ろ。」腕づくでも男に負けまいと云ふ氣性「アーわたしや大島荒濱そだちヨ、色の黒いは親ゆづりヨ。」どうしてなか／＼島の娘は、黒いのもあるが總じて白い。あなたのやうに、透きとほるやうに白い。膝から下、まっ白な素足に藁草履の小さいのを突かけて、ヒタ／＼と身輕に坂町を馳け下り馳け上つて、その働くこと／＼。而も頭上には二斗入ぐらゐの水桶をのつけて！横目を使ひながら。敬白、紫浪生

前途有望か！ 何かしらぬが新進の青年畫家の君。爲いろのマントに同じソフトの下から長髪を食み出させ。畫具函かたげた御自身と、三原山頂に燃ゆる御神火。燃ゆる紅椿と黒髪の女をあしらつた御自筆の二枚續きに。

○

其後はとんと御無沙汰、お變りございませんか。平生は家庭の事やら筆不精やらにて失禮のみ申上げ、何卒御許し願ひ上げ候。またこの寫真不出來乍ら宅にて寫し候まゝ作りなき其まゝの様子お目かけまゐらせ候、綾子少々動き候爲か、誠に可笑しく候へどもお笑ひ草までに。かしこ。綾子の母

寫真繪端書、これは御良人のお手玩みであらう。喜代子様は模範的の若夫人、恰好のいゝ大丸髷にお鼻の隆い横顔少しばかり見せて、餉臺の上に頬杖突いていとし

さうに綾ちゃん見守つてゐらつしやる、房々した垂髪たれがみの裏うらの傍わきで蝶ちょうとリボン結むすんだ今年四歳の綾ちゃんは、お縁えんにぶらりと大きな庭下駄履にほしたいた兩足ぶら下けて少し泣顔なみかほして………………。喜代子様きよこさまとは幼友達せうなともち、昔むかしからしとやかに落着いた上品じやうひんな方かただつた。

○

鶴沼つるぬまは近頃ちかごろめつきり春はるめいて來たでせう、土筆坊つくしんぼうもそろ／＼あたまをもち上げて來たでせう、そして雲雀うさぎもね。

記念祭きねんさいも一日々々いちにち近づいて來ました。今年は大舉ことしして工事に取とりかゝつてゐます。僕は案内の任にんに當あたつてもよいけれど、事によつては當日居たうじないかも知しれません、何處かへ旅行りょこうしたいんです。然し兄あにが妹いもうとや小さいお友達ともちを澤山たくさん引きつれて乗り込むつて云つてますから、やつて來ませんか。もしお出いでになるならば入場券にようやうけんの都合つづふもありますから、一寸否ちよつといなやおしらせ下さい。向陵かうりやうにて、輝一

.....
 淑様の小兄様、生真面目な憤りつばい、そのくせ涙もろい一高生の面目躍如たりし方。この方が今はもう三菱づとめの若紳士でね、昔の面影など棄にしたくもございませぬ。かけちがつて一年あまりもお目にかゝらなかつた内に、先日屹驚して丁つて「随分大人におなり遊ばしてねえ。」とあきれて申せば「僕だつてもう二十六ですよ。」と笑はれた。音楽に淺からぬ趣味と才分をお持ちの由。

○

春なれや、わが瞳わが唇は、かすかにふるへ萬象を戀ふ。

千いさん！ どうして居られますの。

警察の煉瓦の塀に雨ふれば城山の町の春もわびしや。

静かなく春雨が一人居の室の庭に、都を戀ふる私の胸にしみくと。どなたも

御健全で！ かしこ。あや

.....
 背の君が歐洲御留學中を、御實家の離座敷に閉ちこもつて三年の孤閨をかたく守り給ふ君。悲しいと云ふことゝ淋しいと云ふ文字と、戀しいと云ふ言葉がいつのお便りにでも、散見てない事はない。いちらしいほど氣の弱い女らしい方ですもの。

○

決して貴女をサタイア―した譯ではない、許して下さい。けふ神田で一才見たきり、あまりなんだか現代的だつたから買つて御送りする迄。此頂は學校は毎日休み同様、ホンにつまりやしない。春の日が武し野に照り初めて、ひばりの聲高く、櫻咲くのも遠いことではありませんね。このホカ／＼と溫い日光、如何に天地の慈を感謝していかかわからぬ。皆様によろしく。三好生

.....

三好さんはお口がわるいが、お父さんみたいな顔をしながら、無邪氣な正直ない

やみのないひと。新しい女が大のお嫌ひ！この繪端書はマント着た分髪わけがみの美しい女おんなが恍惚うつろひ表情へいしやう的な眸めをして、七分口せんぶんぐちばかりのコツプ握にぎつて料理れうりのお皿さを前に控ひかへて白しろい九卓ていさくに凭よつてゐるところ。しかも「フランス式しやうしきの室むろに、五色輝しやうかく酒さけの匂におは此この人々を如何いかに導みちびく」なんて文句もんく入りで。

○

華はなやかな都會きやうかいの灯ひを、樂たのしき少女せうじよの頃ころを思おもふて深い感かんじに囚とらはれました。貴姉あなた、千ちい様さん、何時いつまでも夢見ゆめみてある事ことがゆるされるならば——若い日ひは大變たいへんに幸福きふくでムいますけれど……かうして筑紫つくしに平和へいわな日ひを送おくつて居ゐります私は、眞實しんじつに生いきたいために何も彼かもなげうつて了しましました。人妻ひとつまと云いふ名なの前まへにはどんな美うつくしい衣ぬもぬぎすてねばなりませんもの。たつた一つの力ちから、それを頼たよりに私わたしは生いきて行くのです貴女あなたの出でられる人世じんざいと私わたしの辿たどる道みちとは表面へうめんにあらはれる事實じじつは異ちがひますけれど、きつとその根底こんていは同じであらうと思おもひます。

私は貴女のことをいちばん多く考へさせられます。いろいろの意味から貴女にお逢ひしたいのですけれど！　かうして遠くから戀しがつてる二人は儚なうございますわねえ。姑がこの頃温泉へまゐつて留守でございますの、淋しいわ。鈴音

.....

わが敬愛する友の一人、愛の勝利者。この上ともに御兩人の御多幸を祈ります。美しい、露を含んだ緋牡丹のやうなひとでしたが、御成婚後は種々な事情の爲一度も相會ふ機會を得ませんけれども、その濃艶さはおとろへても、今は白百合の様な氣品と、高潔なつゝましやかさをそなへられたことと思ひます。年も若いし、姉さまと云はれたこともある間柄なれど、もう鈴音さんの方が妹ではなくて先輩のような氣がいたします。私はいつも訓へられ導かれることが多い。

○

今日は十日ぶりに春雨がシト／＼と降り出しました。赤煉瓦の窓から露になやん

だ櫻の花やニコライの方をチット眺めてゐますと、十番教室の方から神田男の流暢な發音と、田尻博士の蠻的な講義聲とが、煙の様な雨に濡れて響いて來ます。

行く春の花散る雨のたそがれに

君が琴の音忘れはせじな。

ソナに笑つちやいけません、男のクセに腰折れナンカッテ。春雄

.....

輝一樣の御親友で高商の方でした。英語會の切符をお願ひする爲にお知己になりました。大きななりして恥かしがりやで、矢張り生真面目なお坊ちゃん、いゝ氣になつて私たちはよくいぢめたものです。が、このお琴の音のぬしは私ちやございませんのよ。

○

千鶴様！

だ櫻の花やニコライの方をチット眺めてゐますと、十番教室の方から神田男の流暢な發音と、田尻博士の蠻的な講義聲とが、煙の様な雨に濡れて響いて來ます。

行く春の花散る雨のたそがれに

君が琴の音忘れはせじな。

ソナに笑つちやいけません、男のクセに腰折れナンカッテ。春雄

.....

輝一樣の御親友で高商の方でした。英語會の切符をお願ひする爲にお知己になりました。大きななりして恥かしがりやで、矢張り生真面目なお坊ちゃん、いゝ氣になつて私たちはよくいぢめたものです。が、このお琴の音のぬしは私ちやございませんのよ。

○

千鶴様！

昨夜は御無事でおかへりになつて？

私たちはあれから、カフェーライオンへまゐつて一しきり騒ぎましたけれど、あなたのお抜けになつたのが、ほんとに物足らず思はれました。歸途は赤燈になつてしまひました。本石町で百合子様やそのお兄様たちにお別れすると、女は車中に私一人つきりなのでした。深夜の電車は飛ぶやうに早く凄かつた。矢張りむりにおとめしないですよかつたかも知れないと思つちやつた。

昨夜の節子様のお服装ね、輝かな春の夜の劇場に最もふさはしいものと皆さんの御好評でしたわね。貴女はどう思召す？ 私一人反駁してやりましたのよ、かしこ。

佳音子

.....

観劇の晩、圖らずも塙内の廊下でぶつかり合つた御連中のおすゝめを無理矢理振り切つて、ひとり目比谷から電車に乗つてしまつた私は、寂しかつたけれど微かな

誇りもあつたのでした。その頃は私もまだ若かつたのですよ。女優巻や金冠や長髪や腕時計やトルコ帽や天鵝絨の洋服や、けばくしい服装に人目を引いて、タキシードを飛ばせたり、カッフェからカッフェを飲みまはつたり、素人演劇をやつたり謂はゞ高級の不良青年少女團！ 思ひ切つてあゝした群に投じ得ないのを、卑怯だからだと自ら悔んだこともありましたが……………。

○

一寸申上候。

茶目子儀去る十一日隣りのドラネコに「もゝ」を手痛くくらひつかれ、一時猫事不省に陥り早速入院致させ候へども、三日目に死兒を四匹流産いたし、とても助からぬ命と今朝先生より申し渡され候。兄はじめ私の心配一方ならず、御推察たまはるべく候。取いそぎ右御通知まで、早々かしこ。京子

……………

十七になるお嬢さんが愛猫の危篤を報せられたもの。厚い布圖を敷き重ねてつぐなんである猫の圖がペンで描いてありましたが、まるで頭布を着た三莊太夫みたいな恰好なので失笑しました。しかし御丹精の効あつて茶目は運強く命を取とめ、其後全快致しました。

○

昨日はポトレエスがありました。華やかな舞臺の一隅に心まで雨にぬれて、さびしい役割をつとめました。ポトレエスはつまらない。

今日は篠原をつれてめづらしい、東京を案内いたしました。本屋とカフェと巽書會と。どこにもかしこにも、何をかねらつて到達しようとおがいてる姿がありありと見えます。

大久保にも生暖い風が吹いて、ロマンチックな椿の花が家の周囲にこぼれております。

僕も少し浮足になつて、何もしくなりました。謹之助

.....

その日の紀念繪端書に.....。

お見合レースー ほゝ相變らす當日はいろんな挿話やロマンチックな事件が多いんですつてね。若かりし日の追憶のなつかしさよ！

○

汽車はひた走りに東へ走つてゐます。友と對座して、つき合せた膝と膝に窓を透してほのく春の日は流れこんでゐます。

「わかれゆく小松林の砂山に桃の花咲けり.....」と藤澤の歩廊で浮んだ和歌の下七字がどうしても出ないので、喜之さんに救ひを求める「桃の花咲きて陽炎へる日かも」といふ風に、詠歎の形式をとつたらどうかと云ふ。人の言ふことに満足できずして、眉をひそめ窓に縋つてまとめようとあせる。あせればあせるほど散ら

ばらうとします。

『みかへれば砂山かげに、一畝ほど小松にまじり桃の花咲けり。』

大切な、折角醺酔した情緒をとう／＼育り上げることが出来ないで、散慢な叙景詩になつてしまひました。

唇をかんで行く手を眺むれば、もうわづらはしい帝都の煙が見えます。

『一日に十枚書いたこともない』と有仰つたのをきいて、ホロ、としました。今又それを思ひ出してホロ、としております。書ける書けぬは別問題として、何よりも尊い靈の波紋が湧いても／＼小波となつて岸を打つことが出来ずに消えて了ふことが今更ながら悲しまれます。でも強い意志をもつてゐて下さい。

六郷川を今渡ります。さようなら。

.....

紫鉛筆の走り書き。この方は現代青年の好曲型で、夢見勝な乙女が高遠な理想や

抱負を語り合ふには、極くいゝ相手でしたかねえ。今でも逢ひたいとは思ひますわ。
私の美しい空想を守つて、最後まで傷けなかつたひと。いふ思ひ出していいやな記憶は一つもありませんもの。

○

其後は暫く御無沙汰。

先日は御厄介のもの（カナリヤ）お願ひ申しまして!? 少しは大きくなりましたか、随分お世話がやけませう。

もう粟のないじふんと思ひますから、おもたせしました。それから何かいい花をと思ひましたが、今年は鳥の騒ぎで何にも植ゑませんでしたから、ろくなものはありません。花壇にはパンジーも二つ三つ咲きましたが、鉢のは一つも咲きません。蕾をもちましたら又御屑け致します。

あのびつこの雛はまだ生きてゐますよ、羽ばかり長くなつて、體は相變らず小さ

くてピー／＼鳴いてゐます。

お暇の節はお遊びにお出下さい。富佐子

.....

程近き別荘に轉地療養の君。ピアノの名手、お年は二十、女學館の御出身。色白のたつぷりした御體格で、何處にお胸の病などおありかと疑はれる程なれど………眉麗はしく、紫紺地の紋縮緬のお羽織が抜けるほどくつきりとよく似合ふ。佛語なども堂に入つたものと聞けど、そんなハイカラ風は氣風だになく、あくまでつゝましやかに御遠慮勝なのは御病身の故か。多額納税議員の愛嬢！

○

胸に一片の詩趣なく手に筆のすさびなき吾等は、あはれ鶴沼の半日を如何にして記念すべきか、など、思ひ續けつゝ昨日午後二時熱海に着申候。山吹の花紫雲英蒲公英英なんどおのがじゝ時を笑顔に一行を迎へ申候。今朝は梅園を訪ね、貫一宮さん

の跡を偲び申候。

斷崖絶壁に荒浪の打寄する所、伊豆海岸の男性的にして、砂濱に小松の生ひ繁る三浦半島の女性的なると、相模灘を擁して相對する、實に好コントラストと存じ申候。明日は海岸を徒歩にて網代より伊東温泉に参り可申候。同行二人

これは知人の紹介で旅行の途次訪問された醫科大學の學生二人。

謎の藝胸にいだきし小鳥故
花の咲く日も野邊に歌はず

花にはおそく青葉には早いけれど、街はづれの道のどこかに、まだ春の名残が残つて居るものゝ寂しいたそがれ！ 私には貴姉の御上京をお待ち申して居ります。

美禰子

○

近く春を追ふて、ひとりあくがれ出で申し候。けふ函嶺より徒歩にて十國峠を越え、當地にまゐり候。熱海にて、澄江

浪のおと流人よりなほさみしきは

旅のねざめの夜半にきくこと。

.....

多感多恨の女詩人、瘦ぎすの脊のすらりとした凄いほどの美人ですわ。でもね、天才は狂に近いとかつて言ひますわ。みんななるべく敬遠して下ふんです。お氣の毒だとは思ひますけれど、お年ですかお二十二。

○

御消息のうかいへぬのを、御案じ申して居ります。櫻が散つて山吹が零れて蹺躑の亂るゝ南國の夕ぐれ、橘のかほる木蔭に遠く遠く相模の空なつかしく思ひをよす

る友に、せめてはおはがきなりと。高麗子

.....

未見の友の一人「いつとなく忘るゝとなく文絶て、あはれ今年の春も去ぬめり。」

○

昨夜はおそくまでつまらないお話を致しまして、今朝はさぞおねむい事でございました。夢のやうに七日が過ぎて了つてお別れかと思へば、あまりに短い心地がして、うらめしい感が起りました。貴嬢の美しい後姿がみどりの若菜と紅の躑躅の中にだん／＼とかくれ行く様は、丁度春の女神のお歸りになるやうで、晚い山の温泉の春も、あゝ轍の音と共に去りました。まるで繪のやうに。御再遊を祈ります。

衣すれの音もやさしき君去りて

花散る窓に文を待つ人。喜美

.....
年に合せてはやゝ小ぶりの丸鬚に水いろの手柄、黒緇子のかゝつた襟元のスツキ
リと胸の透くやうな旅館の若女將。

○
夕ざればホテルの窓にともる灯の、またるゝ無異のこのあぢきなさ、
眼の碧き初夏人はいと白く、生絹そろぞきわがまへを行く、

高い山の上の西洋めいた街——ホテルを出入る金髪の少女が、皐月の風に美しく
笑つてゐるのに多く出合ふ。けど毎日無爲に温泉にひたつてゐる心持は、わびしいもの
一つです。箱根底倉つた屋にて、青柳瑠瑠子の兄

○
青い／＼楓の葉によく雨の注ぐころとなりました、いつも相變らず……………。

お寫眞を有がたう、大變好いお恰好！ 後姿なんか見せてすゐぶん罪な方ですね

いづれそのうち御文して。みさご鳥

○

御心配をかけたことを、身を切らるゝように後悔してゐます。悪いことをお眼にかけまして、どうぞかんにんして下さい。どうぞお氣にかけないで下さい。私は大丈夫です、やつて行ける方法を知つてゐます。只嵐の渦巻いてる間は、詮方なく身を任せてゐなければなりません。只そればかり、嵐がすぎれば昔に増して元氣になります。御深切は身にしみて忘れは致しません。

二宮君につれられてお濠をまはつて、パウリスタへまゐりました。いつの間にか世の中は初夏に近づいてゐます。夜の色も灯の光りも珍しい歡びを啜り乍ら、不思議な自動ピアノの音に、心惹かれて居ります。さよなら（得三）

先日は失禮いたしました。只今二人、暗い――夜の底から初めて曙の光を望み見た時の様な心持で、パウリスタの自動ピアノの音を聞いて居ります。永井が是非

君もかけと云ひますから失禮をもちへり見す一筆（誠）

.....

何の足しにもなりはしないのに、お姉さまぶつたお世話を焼いて上げたこともあ
るのだと思ふと、可笑しいよりは恥かしうなる。いつたいにあの時分には感情はか
りがかなり烈しうございましたからね、お互に。

○

御便りのないのを寂しく思ひます。姉様はじめ皆さまは御機嫌よくゐらつしやい
ますか。何だか三年もお目にかゝらぬやうな氣が致しまして。

御上京の日はいつ頃？ いけないとお仰せになるので御許へも伺はず、悲しい日
を送つて居ります。

裁縫や割烹やさうした科目ばかりををさめて居りますのが、心もとなく思はれま
す。

「詩」などは思ひもかけぬこと。

けれど、多くの時間をもつたつれづれにはいたづらをして見ますの。

今度相見る日はいつでせう……………姉様おすこやかにゐらして下さいまし。いつ

くまでも私は、幼い心をもち度うございます。輝代。

……………

この春女學校を卒へたばかり、人なつゝこい小鳥のような乙女、可愛いひと、どんなに慕つてくれるでせう。けれどもそれも先方に、ピンクの君の出来るまでの對象、戀のまゝごとのお相手だとおもふと、つまらなく、一寸妬ましいような氣もされますわ。だつて餘り綺麗なんでもの。ちつと私の兩袖におほふてゐて、他見をさせたくありません。

○

彌生の雨の夕なつかしき君とおわかれいたしてより、早二ヶ月の餘になるので

ございますわね。其後御變りもなくゐらつしやいまして？ 忘れもいたしませぬ。二

年前の今月今日、あの南町の實家でつきぬお物語に楽しい御めもじの其の日でござ
いますよ、千鶴様！ あなたもまだ御記憶遊ばしてゐらして下さいますか？ 麗美人
草が眞紅に咲いて居りましたつけね、あゝほんたうにもう 櫻桃が薄黃色に水々し
い艶をもつころがまゐりましたのね。

早く夏休みが来る様に、其時はきつと、おいで遊ばして頂戴よ。八重子

.....

ある新婚の夫人より。ちがひますわね。矢張り處女時代とはね。言葉の花は美し
くても、何となくよそ／＼しい他人行儀な！

○

お變りもございせんか。梅雨霽れのうしほの色はいかい。長い試験が終つて友
は狂氣のやうに新橋へかけつけましたけれど、私にはそのよろこびが許されません

の、毎日暑い中を東奔西馳、原稿と資金の蒐集に馳けづりまわつてゐます。

窓の下に据られたテールに倚つて自分の原稿を書いてゐますとき、武さしの、
涯にあらはれた異形の雲が怪しく輝いて心を誘ひます。これがすんだらもとのよう
に、いろいろのことを伺ひ申上げたい。さよなら。初子

.....

初子姉様は歸り新參の格であるミツシヨンスクールの寄宿舎にゐて、この夏は何
か雑誌の編輯を一手に引受ていそがしがつてました。年配も年配なり、目立たぬ服
装に華やかな銀ぶち眼鏡を白い細面にかけてスタイルは、もう生徒より先生の貫目が
ありました。相思の間の御婚約の君が不幸にも病死されてからすつかり無情をさと
つてしまひ、宗教の道に入らうと決心されたので、亡き君のことを話出される度、
聞人の方でまたかとは思ひ乍らつい貰ひ泣をして丁つたり、同情の涙ふきく可笑
しくなつたりします。だつてあんまりなんですもの。新式の尼さんなのよ。

今富久子さんと田邊さん等が家にあつまりました。大分あなたのお噂が出ました。小猫は貴女がお歸りになつてからは、心安らかにすや／＼と眠つてゐます。だつて貴女の大きな聲でミイちゃんと呼ばれると、びつくりして背中の毛を立て、驚きました。なんですもの。少い兄は明日仙臺へ立ちます。英子

.....

男の御同胞ばかりの中、末つ子で育つた英子さんは、ほんとに活潑で竹を割つたような御氣性です。私はかういふひと好きです、十八にもなつてまだお下髪にして、元祿袖の着物を着てゐます。お晋丈！ 五尺一寸もあるんです。ちつともおかまひにならないけれど、素顔のお美しさと云つたらありません。日本人にもこんな綺麗な皮膚があるかと思はれるほど。とにかくいろんな意味においての天分と幸福をうけて生れた方です。私はこの若い才媛の前途を興味ある期待をもつて囑望して

居ります。

おなつかしい情調の千鶴子様、私は何故か貴嬢がお慕しい……………雑誌で美しいお作拜見致した時の胸の高なり、いつも／＼お作を拜見してはおなつかしさますばかりです。あまりのお慕しさに玉章したゝめて幾度かポストへいれに行つた事はありますけれど……………文士界に御名高き君が名もなき乙女等とは到底お交り下さらないと存じて、葉書持つたまゝ又宅へ歸つて來てしまひます。今朝友より借りた小説はお慕しい貴嬢のお作でした。思もつかすよんでしまつた私はもうたまらなくなつて此端書をしたゝめました。千鶴子様まだお目もじした事もない私からこんな無禮な端書いく重にもお許し下さいませ、そして以後は貴嬢の門弟としてお交り否お導き下さいませ、何卒御返事下さいまし。かしこ、紫苑より。

お懐しき花の千鶴子様……………

かね／＼おうわさに聞いて居りました貴女様の事、私はなせかまだ一度もお目にかゝつた事のない千鶴子様おしたわしいので有ります。日頃千鶴子様のお作りになつたものの、私これを讀みますと一段の動機を起しました一つには貴女様がお懐しく成るので有ります。私は千鶴子様へ差上げるお手紙いくどかしたゝめて見ましたが、皆無にしてしまつたので有ります、どうぞ之から弟子として御交際を幾重にも願ひ申します。さよなら

……………

いまだに時々こんな求交狀の舞ひ込んで來ることもあるのですよ。數多い中からですけれど、それにしても餘り上手過ぎますわねえ。

○

吾れ聞く、財あるものは財を饋り聖人は言を餽ると。或は曰ふ「われは施物をな

「す程貧しからず」と。吾、言を以つて子に饋らむ。

我は知の世界死滅の狀を目撃するまでは知を逐ひて已まじ。かくて知以上は得らるべければなり、疑は知のはじめ。疑つて疑つて疑ひつくせば疑なし。疑以上のものであるべし。

纏らぬものこそは偉大なれ。

避くるところに不徹底ありと思ふ。

我は惡に徹底せむことを求む。

我れ、數學と化學、物理學を愛す。

我れは天文臺上、星の世界に恍惚の境を味ひたし。

わが戀人は晴夜、暗夜の星なり星なり。

我はわが萬能を信す。

僕は君を戀の對手とするのぢやない。藝術家としてたゞき上げるために選んだの

だ、戀するには女はいくらもころがつてゐる。あゝ知らざる者こそ幸ひなれ。我は星の子、超人なるに。

超人とは何ぞや、良心の必要を感ぜざる一種の人間也。

耳垢をとりつつくく思ほへり樂しきことも色々ありと。

僕は人間を戀ふる程たわけては居ない。自然だ。海だ。混沌だ。沈黙だ、俺は沈黙を火の出る程愛する。されどしばしは許せ、わが言ふことを。ひろし

.....

これは高等學校の生徒でしたけれども、哲學中毒で少し氣の變になつた人です。意あまりあつて言葉が足らぬといふ風で、無暗と自分の胸の邊を掻きむしつたり、握り固めた拳から血の流れるほど熱や餉莖の角打叩きく、釋迦、孔子、老子、孟子、キリスト、ベルグソン、ニイチエ、ソクラテス、マホメット、カント、ヘーゲル——まだくいろくあつたけど覺え切れません。——なんぞ頭から焼いて粉に

して食べちまつたやうな怪氣焰に、面を向くべきようもなく、初對面の私を面食はせました。その時分からもう脾がオツカなく變つてゐました。無論一目でわかりました。さうして其後頭病勢が重つて精神病院へ入れられたと云ふことです。

○

御無沙汰いたしました。

相變らず何んにもお話はできないか知れませんが、いらして下さればうれしい。

何だかよわつてゆくばかりなの。手紙はともかけないの。みなさんからよろしくつて。茅ヶ崎、南湖院にて、妙

.....

細々と清らかに瘦せて、モスリンの絞りの浴衣まとふた肩のあたり、抱いたら消えて了ひさう。眉が濃くなつて頬の色のみ鮮かに、引詰の櫛巻、はら／＼と後れ毛のこぼれかゝつた風情、妬ましいまで美しく妙さんはじめ、患者の人々はみな愕く

べきほど神經過敏だつた。しかし物質上や生活上には直接何等の杞憂もないやうな良家の子女たち故、比較的若々しく呑氣で美しくつて。私は病院へお見舞にゆく度に、いつも同情の念よりは反感を起して歸り／＼した。

妙さんはその後お故郷へお歸りなすつたと聞きます。幸多く在せ、なつかしい女の一人です。この文をも何處かで讀んで下さればうれしい。

○

いつぞやはすぐ御本をお送り下さいまして恐れ入りました。

また先日は留守にお出下さいましたさうで、歸りましてからあのカキオキを拜見致して、どんなに殘念がりましたせう、お察し遊ばせ。

御のどがおかわき遊ばしたでせう、まアこれをめし上げ。この女中美をみとめてやつてちょうだい。登志子

.....

少しおでこで睫のながい頤の丸い頸の太つた愛くるしい顔―思ひきり胸を張らせ
て、胴は蜂のやうにくびれて、裾の方は風船玉のやうにひろがつてゐる。その下か
ら小さな靴の先を一寸のぞかせ、髪はすつかり白い布で包んでしまひ、縞の風呂敷
のやうなものを二つに折つて肩にかけ、大きなエブロンは宛然風をはらんだ帆のや
うで、袖は二つ折までまくり上げ、肉附の小氣味（）好い手に珈琲茶碗のせたお盆を
持つてゐる。これは何處の國の女中風俗かしら？ お菓子にべバミンツゼリーか何
か持つて來てちようだい。

○

明けなば小生は二條の鐵路遠く八重の浪路遙けく胡茄の聲を聞く身と相成る可く
候。漢陽の祝道光る時は赤い夕日の滿洲に柏葉橄欖の子を偲び給はる可く候。無情
の山河が如何に榮華を慕ふ若き子の腫孔に影するか！終りに臨み貴著御惠送のお禮
厚く申上げ候。装禎の夏向きなるはすつかり氣に入り申し候。雄二

○

大層詩人になつたつてこの前貴女に褒められて、愈々自己批評のみにあらず天晴東洋の大詩人と自覺するに至り、それには自然の美に浴するにしかずと母様のお乳をすてて旅に出申候。但し汽船にて紀州灘を渡りし時は吐きこそせざれ、一片の食物も咽を通らず、詩人もヘチャも要つたものに無之候。同室には神戸のボルドウイン氏と余のみ、然るにボ氏生來舟を好み、日本酒に罐詰にてグイ／＼引掛け居られこれには少々閉口致し候。崎の湯にて、伊藤生。

○

これは街の最中にある廣場です。さればにや町幅の廣さ六十間、呼べば答へむとする處にては無之。北海道の美觀壯觀は言語に盡すべからず、貴嬢ならば此れを盡すべきにといと口惜し。

蝦夷富士と洞爺湖に參るべく候。神谷古潭の神秘も極むべく候。札幌でサクラ

ポーを食ひながら。三郎

○

今日は從姉夫妻につれられて新温泉へまゐりました。外面は淺草其まゝですね。しかしあの浴場を一寸買切つて、一日バチャ／＼遊びでたら愉快だらうつて從兄さんが申すんですよ。そんな事をすれば新學士、お髭と奥様が泣きますわネエ。やつと三月ぶりだのに從姉のスツカリマダム振つちやつたことは驚きました。貴女にもよろしくつて。だから塚にて、暑い日、蝶子

○

昨夜は兒島半島夜半の月見と洒落込みました。風流つて寒いもんださうですが、中々に暑うござんした。ホ、

今年はこれから多忙いので駄目だけど、來年は月下の瀬戸内海を周遊するつもり氣だけは手。中國のさゆり

○

本日友人と共にこゝに参り申候。

貴女竹遊の地と拜聞す、大正の閨秀たる千鶴さんが紫式部の源氏の間をどんな顔してのぞかれたやら。これから船にて湖をよぎり大津に出で三井寺を見て夜は京に入り、久しふりにて鴨東の縁酒に暫し浮世を忘れんと思ひ居り候。早く舞妓の繪の様なのがコボ／＼履いて橋渡る様の見たく候。石山にて、蘆野生

.....

夏になると皆さんそれ／＼御歸省や、旅行や避暑に出拂つて了はれるので、帝都は寂しうございます。すこしお留居居の方のお目にかけましか、でも一二枚しかありません。

○

蟬時雨降る日の打續き候を、如何渡らせられ候や。久しう御消息承はらぬにも

しやと御案じ申し居りさふらふ。御暇のまさばいふせき小家には候へど御入り候へ
青簾の下麥湯一服參らせさふらふ。かしこ、鶴子

.....

どうして、見上げる様な石造の御門の内に住んでゐらつしやるのですよ。燗
風器のはためきにレースのカーテンそよく洋館の御書齋、すゝめらるゝ飲料はレモ
ネード、お好きなキュラソー？真紅なグレナダー？御圖案を御自身でなせる奇抜
な中形縮緬の袖の長いお單衣に、白絹へ御自筆の涼しげな墨繪の御帶しめて、お髪
には眩然たダイヤのヘアタイヤでもからましてらつしやらうと云ふ風姿の女主人
公なんですもの。御無人なので今年はどちらへもお出掛ないと見えます。

○

松林中の椋鳥さん。

過日は不運の爲か何の爲か、まああのやうにつまらないことはございませんでし

たね、ほんとにお氣の毒でなんとも申せません。あの翌日番町の政子の君が入つしやいました。大きい創作に取かゝつてゐらつしやるんですつて、いづれお目にかけますつて。

昨夜はお義理での丸の内行き、四邊のきらびやかなのはいつも心地よく感ぜられ候へども、何分同席の連中みな國許の年寄連にて一向榮え申さず、あんまり我儘も申されず、神妙につゝしみて女饅さん方のキイ／＼聲拜聴仕り候。

それから先達てある處で面白い／＼歌をさいて参り候。それは次信にゆづる可く先は。壽子。

○

ジョンパンヤンの「天路歷程」を憶ひます。罪の重荷を負ふて「滅亡の町」から天國まで、はる／＼と苦の旅に上るクリスチャン——今の私は、それよりも大いなる苦みに喘いでゐます。百度を越える炎熱の下に額の汗を拭ひ拭ひ働いてゐる私を

御想像下さい。

どんよりと黄色い月がたよりなささゝに空にぶら下る夜、ちゃんころらは青草の上に足拍子そろへてうたひつゝ、胡弓を弾きます。キユキユキユ間のまけたばかりしい、なが〜ときれめのない、其の調子が地団太踏みみたいほど腹が立ち、胸をかきむしりたいほど物悲しいのです……………。

こほろぎでせうか、切ない哀歌が胸にしみます。それでも虫の音は日本のと少しも違ひません。明日は日本人のゐる町へ行つてみます、——世界を探がしに。御健康を祈る、さようなら。上海、四川路、利定

……………

ことしの夏は青島や朝鮮や満洲や南洋方面に出かけた方が多かつた。いろ〜な便りも寄せられた中で、利さんのほどうもしみ〜と、わびしい流滴の地における若人の望郷の念や、いちらしい情緒を思ひやらせられて胸を痛くしたやうなの

は他にはありませんでした。さうして華やかな瓦斯の灯やまばゆいイルミチーシヨンの光輝！ 酒の匂ひ煙草の香、耳を徹すやうな唄や樂、馬車、自動車、轎、人力車、二十數ヶ國の人情が誇りかにそゝろ歩いてると云ふ四馬路の夜の熱沓の光景なぞが、活動寫眞でも見るやうに眼の前に浮び出された。

四層五層の高大な茶館——西瓜の種をかちつてお茶を飲む處ださうです。——は濃白粉と生脂肪で顔を彩とつた支那美人が澤山ゐて、忽ち客の左右から軀へ上りついて來るのですつて、耳朶に金環をはめた可愛い若い妓たちが、一片の貨幣を得んが爲に、我勝に、好來西——つて切ない愛想の聲をふり絞り乍ら。その數の多いことゝ、その濃厚な脂粉の香や、漆のやうに黒く長い髪や、色彩的及び肉感的に美なることは驚く外はないさうです。繪端書には麗はしい姑娘の一人が立つてゐました。

來月^{らいげつ}末^{すえ}なんてそんな優^い長^{ちやう}な話^{はなし}つてありやしない。是非^{ぜひ}おもしろい返^{へん}事^じをお送^{おく}りなさいそれでないと住^す田^た君^{くん}がうんとあてゐるつてさわいであるので、僕^{ぼく}が大^{おほ}いに閉^ひ口^{こう}して丁^{しやう}ふんだから。拜^{まが}む頼^{たの}むとかう手^てを合^あせ乍^なら！ 信^{しん}州^{しゅう}輕^{かろ}井^{やま}邊^{ぎま}にて（青^{あお}柳^{やなぎ}）

一寸^{ちやうと}餘^よ白^{はく}へ抗^{かう}議^ぎを申^{まう}込^こみます。青^{あお}柳^{やなぎ}さんは何^{なに}か云^いふと二^{ふた}言^ご口^{こう}には、當^あてゐる當^あてゐるつて云^いひますが、僕^{ぼく}は決^{けつ}してそんなつもりではないのです。もつとも今^{いま}僕^{ぼく}の胸^{むね}を占^{せん}領^{りやう}して居^をる或^{ある}もの、兎^とに角^{かく}それが僕^{ぼく}のすべてなのですから、自^し然^{ぜん}とそ^その結^{けつ}果^{くわ}僕^{ぼく}が口^{くち}から出^だす一^{ひと}言^ご々^々が皆^{みな}自^み分^{ぶん}の失^{うしな}つた古^{ふる}いローマ^{ローマ}ンスにあ^あくがれてゐる寂^{さび}しい青^{あお}柳^{やなぎ}さんにとつては、當^あてゐられるやうに聞^{きこ}えるのかも知^しれません。若^もしそ^そうだとしたならばそれは僕^{ぼく}の持^もつて居^をる「青^{せい}春^{しゅん}」と云^いふもの^{もの}に對^{たい}しての、青^{あお}柳^{やなぎ}さんの輕^{かろ}いゼラシイではないでせうか？ 青^{あお}柳^{やなぎ}さんは年^{とし}をとりましたね（住^す田^た）

なアに年^{とし}なんかつともとりやしないんですすけれどもね、たゞ若^{わか}くつて若^{わか}くつてしやうがないといふ程^{ほど}わかくもないつていふ女^めな^なんです。もしそんなに若^{わか}かつたら

屹度今頃は當てられて氣が狂つてしまつてゐるでしやう（青柳）

.....

マア、ま、きつい氣！ どうえ、どうえ、つてさしづめ京都の舞妓なら、笹紅の青金色に光る口開けて、友禪の振袖ふり上げて、鶯の様にさへづるところ。なんとおさばき申上げたらいゝんでしやう。ほゝ、私なぞ、それこそまだく若くつて若くつて仕様がないますから、さう左右からお兩方にあてられましたは生命に關はつて了ひます。青柳さまもまた大人氣もない、平素は瑠璃ちゃんのお兄様だとばかり思つてゐましたのに于エ。世の中つておもしろいものでございますわねエ。

○

お千鶴さん、

この歌をうたつての少女が、貴女に似てゐませんか。京城にて、宗助

.....

これには笑つて了つたんですよ。官妓が五人並んでゐました。各々に團扇を持つたり、花を手にしたたり、立つたり腰かけたりして。變に腹部のところをふくらませ、胸高に裳をつけて、緑や朱鷺や淡黄色や水色や、服の色彩は美しいけれども前額を眞四角に剃り込んで、びつたり髪を梳き分けて、兩耳を露出しにして、みんな疵の少し釣つた、顴骨の高い蒙古人種の特徴を發揮した形貌の中にも、最年少い色の黒さうな憎たらしいのゝ口からすうと煙の様なものが出てゐて、千鶴子女史に似たる少女とわれ見たり、桃色着たる官妓の間に「つてあるんですよ、友達に見せると、その人はまた似てゐると云はなければわるいかと思つて、頻りに見くらべ乍ら「さうね、さう云へば何處か。」なんて云ふんですもの。ぶつてやりたくまりましたわ。

○

「小松原つゞく相摸の海近く、千鶴子ありしと史に書かせよ。」

秋冷しゅうれいの候こうを期きしての御活躍ごくわつやく、小さな眼めを皿さのやうにしてお待ち申候まちまう。當地たうちにも面めん白しろき事ことは山程やまほど御座候ござ。その内うちをろくお賣うり仕しるべく候こう。大學だいがくの奴等やつらがまゐりましたらよろしく御傳聲ごでんせい願ねがひ上げ候こう。神山かみやまさん姉妹しまいも來きてゐます。伊香保いかはにて、

○

昨日きのう當地たうちにまゐりました。美しい夢ゆめの様なロマレスに憧あこがれて、かうやつて旅たびから旅たびへと歩いてゐますと、何なんんとも云いへぬ一種しゅの哀感あいかん！ エ、甘あまき悲哀ひがひとでも申しませうか、が胸むねにあふれます。何なん、それもその筈はず、スキートハートを東都とうとに残のこす身み！ エヘンくなんて云いつてゐるのは千鶴ちづさんぢやなからう。淡路岩屋あはぢいはやにて、常雄つねを

あら、御催促ごさいそくとは恐れ入おそりますこと。詩的してきな戀こひに浮うかされてゐるとつて、みんなこんなものですわね。折角せつかく差控さしかへて居ゐりますのに、それでは物足ものたりなくつて、何なんとかか云いつてほしくつて仕方しかたがなくなつてらつしやるのね。そんなら申上まうしあげますわ衣子えこ様さまにたんとお手紙書てがみかいてお上あげ遊あそばせよ、海うみも見みず山やまも見みず人ひとも見みず、目前もくぜんに

ちらつくはたい君が俤ばかりつて云ふわけなんですよ。ほい、

○

旅情こまやかなりしも一朝無常の彼に胸みだされて、ながきらみ残して此の地をはなれ申候。

奇なるか哉、我が運命。今はたい生をのろふみに候べきを、うたてやわが涙は枯れ候か、暗々たる人生に目くらみ候ひしか。

たいく自暴自棄の姿に候。寸暇を得てこのはがきしたゝめ候ふも、みだれたる筆の跡にて胸中の混亂御推し給はるべく候。途中御地に参上のつもりに候ひしかど何もかも破壊に候、絶叫に候。あゝ人、何の爲の一生ぞと。芙蓉峰麓、ステーションにて、紅椿

.....

音痴な私には何んのことだかわかりませんでしたの、この意味が。さうしたら御

縁談えんだんがお定りになつたのでした。岡目おかめにはどんなに平静へいせいに見えませうとも、それぞ
れ複雑いはくふくだ御事情ごじじやうのない方かたつてありませんやうねえ。これも時勢じせいでございますわ。

○

山やまに別れて海うみに來ましたけれども、秋風あきかぜ吹き初めては、濱はまも寂さびしうございます。
黒味くろみを帯おびた青い波なみに、汽船きせんは煙けむりを吐はいて去ります。私はこれからどこへ行いかうか
は、まだ自分じぶんにもわかりませむ。皆様みなさまへよろしく。さよなら、玉枝たまえ

.....

苦くるしい絶望ぜつぼうの胸むねを抱いだいて、さすらひの旅たびに出たうら若い女おんな繪師えし。文展ぶんてんへの出品しゅつぴん畫
も打うちすてても世の中よのなかのこと、云ふものは、さう案あんじたものではないと、私は玉
枝たまえさんの事件じきんを多寡たぐひをくゝつて居ゐりますの。あら、局外きよくぐわい者しやだからばかりちやあり
ませむわ。けれども.....。

○

昨日鎌倉を去つた一人の旅人は制服に身をかためて、かな／＼秋呼ぶ杉木立の間
いそぎもせで奥へ／＼と辿つて参りました。其旅人は今日久しく憧憬して居つた蘆
の湖へ向ふのです。高い山と深い溪を眺めて、自然の大いなる物に魅せられました
明日歸京する考に候。早々、大内生

○

野分／＼湘南の萩桔梗をぞ思ふ。

またあらしがまわりさうでございますね、まことに度々にて！ 先日はお障りも
ございませんでしたか、つひお見舞も申上げませんで。今度は手廻しに前以てお伺
ひいたしておきます。境内の栗がそろ／＼笑みかけました。△△庵にて、松子

.....

尼寺住ひの未亡人、いたましい宿世を持つてらつしやる方です。やつと二十の若
奥様中年からであるとなか／＼得度は受られないさうで、まあ三四年はあゝしてゐ

らつしやるのださうですが、たとへ何年の後にもせよ、あの美しいひとを無惨々々と圓頂の法衣姿で見たくはない。何も廢物同様な尼さんにおなりなさらないだつてと思ひますけれど、信仰はその人の心々ですし、私はこれを書き乍らふと源氏物語の浮舟の君の上を思ひ出しました。

○

貴女がシュークリームを食べた手つきでおぼえて居ると言はれた私は、今此南洋の一都市から葉書を差し上げます。私は今歐洲へ行く途中なのです、そして今此島の海岸を通して椰子の木の間がくれにシー、グエーホテルを見た時、彼の松林の中の吾妻屋を思ひ出して此葉書を書きました。

此頃は何かお書きですか、私は元良さんに頼んでおきましたから、貴女のお筆になつたものは幾ヶ月かの後、遠い英國で拜見する事が出来る筈と楽しみにして居ますシンガポールにて、平松芳麿

.....

學習院出の坊様、お育ち柄とてお行儀のいゝお上品な方でした。聞き及ぶ内ポケットの奥ふかう秘めたまふ寫眞のぬしの令嬢やいかに？ お兩人ともまだお若いんですものね。御辛抱遊ばせよ、錦衣を召して御歸朝の榮ある日の御幸福を今からお祝ひいたします。

○

お葉書拜見。あなたの言語體の文章を読むと、あの理智のシンボルの様な黒水晶のバツチリしたお眼が浮びます。大分お世辭が上手ねなんて蔭から云つて舌を出してるのは誰れた。書物はいつでもおついでの時でしょうございますとも。今日は學校の記念日なんですよ、別に公會はしませんが、皆が集つてビールを鯨飲するんです。そしてローレライでもハイデルベルヒでも高唱して、一日を楽しく送るんですよ。目丸

.....
いつもお元氣でお美しうございますこと。運動界やお得意の論壇も桐の一片と共に色めき立つて來ましたものね。熱血健兒の壇上の御雄姿が偲ばれます。マツチの時にはまた屋根の上や樹の枝に實つてお土手り遊ばすんでしやう。あまりに熱叫して墜落の椿事でも惹起したまふな、

○

秋の半日を上野に暮しまして、文展の歸りを清水堂の茶屋にやすみ乍ら、まだ紅葉には早い梢に小鳥の鳴くのをききました。

あなたと御一緒だつたらと思ひます。豊子

.....

少し色の褪めた赤毛布の縁臺にひらりほらりと、黄いろい病葉が舞ふて來ませうからりと晴た碧空には、暑からぬほどの日が輝いてゐませう。豊さんはあの房やか

な艶つやのいゝ黒髪くろかみをお島田しまだ！ それともいつものお束髪ぐし！ 洋傘かうきりは眞紫まむらさきが何かで地面ぢめんを
はじくり乍ながら白しろい襟元えりもとを俯うつせけて、歌袋うたぶくろにいろゝな詩想しきやうをおさめたのでしやう
そしてあの紺紫こんむらさきの半コートはん召めしてゐらしたでしやう。ほゝ私千里眼わたくしりゃんでちゃんと見
てゐましたわ。

○
お日ひが短みぢくなりましたから、これから後あとはもう全速力ぜんそくりよくで通過つうくわさせます。

○
濁にごりたる江えのあなたなる連山れんざんに、うす日がぎろひ夕ゆふとなりぬ。
流水りゅうすいの悲かなしき命いのちおもひつゝ、うす青あをき日を踏ふみてゆくかな。鏡南浦ちやみんぼ、徳永生とくながせい

○
梧桐つとうが散ちる、紅葉もみぢが散ちる。

秋あきもとうゝ逝ゆきました。

千いさん貴方あなたはどうしてゐらつしやるの。御近況ごきんきやうおきかせ下さいまし。楠代くすよ

今日は遠漕會が催されました。舟にのつて陸をはなれると理窟も黙想も捨て、無邪氣に歌つたり笑つたりしました。五等の沖で日が暮れました、黄色い星をひたした、黒い夕潮を迂るやうにはしつて、夜の七時に戸田と云ふ小さい村につきましました。お酒をのんで酔つて浴衣の上から外套着て、堤の上に立ちました。星の光りも川瀬の響もさびしい。明日の夕方歸京します。さよなら

○

おもひあまりて御簾をひけば

なんとせうぞの凶と出る

いつそうちあけ話さうか

ひとりで泣いてすまさうか

ま、なんとせう、川柳

僅の間の語らひでございましたけれど………それでも私は嬉しう存じましたわ
千い様！ 貴女も私も今までかなり波亂に富んだ境遇を作りましたわねえ、この先
もどうなりますやら！

けふはまた悲しいお報知を申上げなければなりませんの。それは——從妹の美江
子が、一昨朝亡くなりましたの、十九を一期として！ 私は淋しい儼ない氣分にか
きくれて日を送つて居ります。咲子

○

御消息をありがたう。御壯健でおめでたく存じます。いよ／＼冬が参りました。
今日からちいみ上るような寒さが湧いて來ました。ぶる／＼と震へながら讀書室
の窓から自然を呪つてゐる寒がりやをお憐み下さい。海岸はお温かでせう、風のな
い日は。白い砂原の小松林が美しい。温泉湧く南の方がひたすら戀はれます。
何ものかに對する憧憬を失つた時、私たちは生命を悲みます。けれども、下らな

冷 炎

久松

くつても現實に没頭できる間は、何もかも忘れてゐます。

お大事になさい。傑作をお待ちいたします。さよなら、小田切晴雄

○

お千鶴さん、いつか大學の赤門前で大變あなたが高襟つた風をしてお出なのを、俥の上から見ましたつけ。それから間もなく病氣になつて仕舞つたんですの。可愛さうでしやう。看護婦と來てゐます。ポチャ／＼温泉にばかり這入つてます。湯ヶ原の別墅にて、涼子

大正五年十一月十五日印
大正五年十一月十八日發行
大正五年十一月二十一日再版發行



不許複製

定價金七拾五錢

著者

內藤千代子

發行者

東京市京橋區長崎町二丁目九番地
田中金一郎

發賣者

東京市神田區錦町一丁目十九番地
小川菊松

印刷者

東京市神田區三崎町三丁目一番地
畑竹次郎

發行所

東京市京橋區長崎町二丁目九番地

京橋堂

發賣所

東京市神田區錦町一丁目十九番地

誠文堂

振替口座東京六二九四番
電話本局四二〇八番

印刷所 信博堂 印刷所

◀ 告 豫 刊 近 ▶

小説 毒 蛇

(四六判上製三百餘頁)

女學世界紙上にて多大の好評を得ましたのを今回更に全部訂正
増補し目下植字中に御座候はゞ出版の上は何卒御愛讀のほど願ひ
上げ候

内藤千代子新著

杉浦非水先生裝幀

好評
拾版

生ひ立ちの記

四六版 頗美裝
紙數約四百頁
正價金七拾錢
郵税金八錢

「スキートホーム」「ホネームーン」「エンゲージ」の三著に依て満天下の讀者を驚喜せしめたる著者は、今や進んで「生ひ立ちの記」一卷を完結す。こは前三著と異り最も秩序ある著者の自叙傳にして、前半約四分の一は今春既に『女學世界』誌上に於て四回に亘り異常の喝采を博したるもの。而して後半四分の三は、實にこれ著者が七月以降酷熱の間、多大の犠牲を拂つて新たに執筆せる流血の文字。露骨に言へば戀の告白！叱ッ、愛の争鬭！靈の行軍！之を綴るに著者獨特の才華燃ゆるが如き文章を以てす。げに情思熾烈、行文絶妙、一讀三嘆、喪神、斷腸の感あらしむ、著者は今や芳紀正に廿二歳、曾て一日校門を潜らず、而も常人の企及し能はざる才文を行ふ、洵に聖代の奇蹟と稱するも敢て過言に非ざる也、願はくは満天下の文藝愛好家諸君、速かに一讀以て著者の神秘に浴せられん事を期望す

發行所

東京市神田區錦町一丁目十九番地
振替口座東京六二九四番

誠文堂書店

德富蘆花先生原著
鹽谷榮先生英譯

英語研究家
の最良指針

縮刷
發賣

英譯不如歸

新形ポケット洋裝
註譯共全二冊
紙數四百頁
英譯定價五十錢
註釋定價十錢
送材料金六錢

本小説の好評なるは原作の既に二百五十版に上りたるを以ても知らるべし其英譯亦歡迎湧くが如く而も英語の實力を増加し得る最良書として既に十數萬部を賣盡す今回携帶閱讀に便ならしむる爲め茲に訂正縮刷を發行す。【有樂社藏版】

夏目漱石先生 杉村楚人冠先生 序
鳥居素川先生 澁川玄耳先生

太刀

大成丸世

雄著

畏帆走記

海のロマンス

縮刷上製箱入全一冊
紙數六百三十頁
定價金 一圓卅錢
送料金 八錢

是れ我國に於て最初に現はれたる、而して最も優れたる海洋文學なり、曾て太刀雄氏の大成丸世界周航記が『東京朝日』の紙上に掲載せらるゝや、何人も何人が其の船中にありて斯く艶麗なる筆を以て此の通信をなし、前人の未だ描く能はざりし海洋美を説きつゝ、此情趣多き航海記を送るならんと驚嘆の眼を睜らざる者あらざりき。焉んぞ知らん筆者は尙ほ年若き無名の一練習生ならんとは。太刀雄氏は今や新たに數百項を書き加へて、此の空前の世界帆走記を完成し、茲に『海のロマンス』と題して出版し、新しき大正三年の文壇を飾るに至れり。

發行所

東京市神田區錦町一丁目十九番地
振替口座東京六二九四番

誠文堂書店

夏目漱石先生 杉村楚人冠先生 序
鳥居素川先生 澁川 玄耳先生 序

太刀 大成丸世
雄著 畏帆走記 海のロマンス

縮刷上製箱入全一冊
紙數六百三十頁
定價金 一圓卅錢
送料金 八錢

是れ我國に於て最初に現はれたる、而して最も優れたる海洋文學なり、嘗て太刀雄氏の大・成・丸・世・界・周・航・記・が『東京朝日』の紙上に掲載せらるゝや、何人も何人が其の船中にありて斯く艶麗なる筆を以て此の通信をなし、前人の未だ描く能はざりし海洋美を説きつゝ、此情趣多き航海記を送るならんと驚嘆の眼を睜らざる者あらざりき。焉んぞ知らん筆者は尙ほ年若き無名の一練習生ならんとは。太刀雄氏は今や新たに數百項を書き加へて、此の空前の世界帆走記を完成し、茲に『海のロマンス』と題して出版し、新しき大正三年の文壇を飾るに至れり。

發行所

東京市神田區錦町一丁目十九番地
振替口座東京六二九四番

誠文堂書店

内藤千代子氏著

最近四ヶ月に
亘る苦心の作

津田清風氏裝幀

生ひ立
ちの記
姉妹篇

惜春譜

菊半截形
ボイソ
三頁組
定價七十五錢
郵税金六錢

言ふまでもなく生ひ立ちの記の其後の生活著者は一方
に處女主義を標榜しながら一方に於ては又こんな熱烈な戀に
悩んで居ります著者の真相を知らんとする者、著者の文章を
學ばんとする者の必ず一讀すべき新著であります。

發賣元

東京市神田區錦町一丁目
振替口座東京六二九四番

誠文堂書店

大阪商船會社汽船
鹿島丸一等運轉士 米窪太刀雄君著
名取春僊氏挿畫
藤澤瀧雄氏校幀

三版

マドロスの悲哀

四六版美裝函入全一冊
定價金 一圓廿錢
郵送料 八錢

神秘的海洋精氣の發露

輕妙、洒脱・絢爛、一種の魅力を有する著者の才筆に依つて描き出されたる『マドロスの悲哀』には、海の傳説、船幽霊、港の女、酒場物語等を初めとして、最も神秘的なる海上の自然と人生とを其豊富なる詩的情操によつて巧に描寫されてある。正に是れ著者獨占の海洋文學第三編であつて、海國に注むロマンチストの必ず一讀すべき新藝術の正光である好評噴々新刊一ヶ月にして既に三版を發行するに至る。又近來の快著と云ふべし。

著大 四生先耳玄川澁

書名	體裁	定價	郵稅
日本及び世界見物	三五判一二〇頁	一、五〇	〇、〇八
三體古事記	菊判四六六頁	九〇	〇、〇八
從軍三年と小敵大敵	袖珍形一二〇頁	一、三〇	〇、〇八
故郷他郷	四六判四〇〇頁	一、三〇	〇、〇八